
ジェネシス・アーク

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジエネシス・アーク

【Nコード】

N4935M

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

空中要塞へと姿を変えた愛知県や他の都道府県は戦争に巻き込まれ次々に散った。その魔の時代を抜けまた新たな戦いが幕を開けようとしていた。

GENESIS GIRL

科学都市日本を構成する『愛知』は母なる大地をそのままパズルのピースのように切り離し空中に浮かべた空中群島の一つである。今日も住民たちはいつもどおりの生活を始めようとしていた。ただ一つ、十二年前に終結した巨大な動乱が再びその頭角を現わさなければ……。しかし、平時のように朝は訪れ発端は隠れた場所で現れる。科学を駆使し日光を一点の増幅炉に集める鏡のようなビルや他の都市から物資を運んでくる輸送機が集まる貿易センタービル、その近くには学校のような建物がある。高いビル群の外側には小さな家々が連なる普通居住区やアパート型の高層ビルを含む開発居住区などの居住区。地区によっては正規の兵器工場や『愛知』保有の軍関連の施設もある。現在は自然保護などの両立も図りつつ開発を続けているこの都市は誰も思いもよらない波乱を起こす引き金になって行くのだ。ただ……誰もそのことを知らないだけなのだ。

「行ってきます！」

「気をつけなさいよ！ 最近人攫いが増えてるんだから！」

「大丈夫！ アタシはそんな可愛くないし身体も……」

「そういう事じゃないの！」

この少女がこの物語のカギを握る少女だ。本人ですら気が付いていない力を持つ少女は地元の普通科の高校に通う普通の学歴で普通の顔立ち全てが普通の女子高生。飛びぬけて運動が出来るとか頭が良いとかスタイルが良いわけではない。本人もそれを気にしているようだから今、それについては触れないでおこう。玄関を勢いよく閉めて姉の言葉を聞くとなしに路地を曲がって行った。

「おはようございますー！」

「ああ！ おはよう！ 今日も元気だね！」

彼女の唯一のとりえは元気なことのような。朝から賑やかな商店街の道を全速力で滑空していく。靴底に仕込まれた小型のエンジンと空気からのエネルギー吸入で高速かつ機敏な動きを可能にした空中都市『愛知』の科学研究機関が開発、販売している機種で一番一般的なジェットシューズという移動用機器だ。操作の仕方はスケートというスポーツに近いが陸上で使用するため少しニュアンスがずれるだろう。それに慣れるまでは難しいが慣れれば簡単で適当な例としては遠い過去にローラースケートなどと言うものがあつた。制御の仕方や移動の要領はそれに近い。違うところは別売りの吸着イオングローブを使用すれば壁面を走ることも可能だということと空中を走るため高く飛ぶこともできる。

「やばっ！ 遅刻だっ！」

その時、不意に後ろから男の声がした。

「君……。一校の子？」

少女と同じデザインの制服を着た平均身長程の少年が同じ道を滑空する。道といってもビルの壁面で少々首が痛くなりそうな光景なのだが……。彼のシューズは少女のものと同じかなり速いように見える。理由は簡単だ。少女の物と形態も違い少々無骨だが機能性は高く最新式で軍用の強力なシューズだという事だろう。性能が違えば条件も違う。軍関係の機器を使用していることからどうやら彼は何か少し一般人とは違う経歴があるようだ。そんな彼らは大きなビル群が密集した中枢都市の中心地であるセンターシティにさしかかった。ビルがより大きく迷いやすい地区でその分制御力やいろいろな技量を問われる。

「あんた誰？ 見ない顔だけど……」

「俺は剣刃 零紫、軍事特務機関の兵士の一人さ。人攫いの搜索及び殲滅が任務」

「そんなこと言って……信じられるとでも思ってるの？」

「信じなくてもいいよ。そっちの名前は？」

「鈴音 琴乃」

「じゃ、とりあえず。君が遅刻しないように送ってあげるよ。鈴音 琴乃」

零紫という少年はいきなり琴乃の右手を掴み琴乃のシューズのエンジンの力を利用して抱き上げた。ぞくに言うお姫様だっこを先ほど説明したとおり壁面で行っている構図になるう、だがよくよく考えてみた上で素直に思ったことを言えばおかしな現象だ。なぜなら零紫は軽々と頭一つ違うだけの琴乃を抱き上げ手を使わずにビルの壁面をさつきよりも早いスピードで滑って行く。しかも、彼の腕はどちらかと言うと華奢に見えるほど細い。二人の通う高校はこのビル群の奥にあり彼は入り組んだ高層ビルの隙間をスムーズに抜けていく。

「ちょっと！ 何してんのよ！」

「近道だけど？」

「そう言う事じゃないわよ！ それにそっちは貿易センタービルとシステム中枢のサーバーホールビルがあって抜けられないはずですよ！」

「大丈夫……。少し目を閉じてな」

さらにスピードを上げていく零紫はよく見ると綺麗な顔立ちをしている少し異様なところがあるがそこはあえて触れずに進む先を見ながら何やら考えている琴乃。零紫の右頬にエネルギー伝達組織細

胞と呼ばれる医療的、科学的に使用されている物が、そして首筋には識別番号らしきものが書いてあり違和感がある。そうは言っても最近では普通の人間にも病院のカルテなどの識別番号が体に書かれている人も少なくないようだ。大概の患者は消す物だがお金がかかるので消さない人もいると聞く。先ほど琴乃が言っていたビル群のさらに中心部にある巨大なビルの数百メートル手前で屈み始めた。

「何する気よ！ まさか！」

「もちろん……。飛び越えるつもりさ」

「やめて！ アタシの体がもたない！」

ビルの高さは800メートルほど普通の人間ではよう言わない発言を口にした零紫はさらに力を足に込め、遂にビルの百メートル手前で殆ど垂直に飛びあがった。恐怖の中体にさして変化が起きていない。空気の圧力がかかり体の各部が悲鳴を上げ始めるはずの高度・400メートル付近で琴乃は不思議に思い目を開いた。空中都市は元々高度・4000メートル以上の空に浮いている要塞都市だ。その中で食糧自給や鉱産、エネルギー供給の情勢の均衡を保つためにこの世界、日本には主に三種の要塞都市がある。まずこの世界に存在する人が住める施設を一通り説明しておこう。一種類目はこの空中都市『愛知』も技術を取り入れた空中要塞都市だ。太陽のエネルギーを最大限に取り入れ活用するシステムで半永久的に空中に浮き続けるのだ、別名をメタルクラウドという空中に大地をそのまま浮かべた島だ。二種類目は海底都市でこちらは海水によって腐食しない金属、オリハルコンと空気の中に新しく発見された物質であるアルマジムを利用した強力なバリアを使って海水を遮断した都市。こちらにも別名がありポセイドンと呼ばれる。三種類目は回遊都市。海面に浮かんでおり海流に影響されやすいが食糧は安定してとれる。自然も豊かで人間が暮らす上ではこの上ない場所だ。例により別名ネバーランドだ。

「へ？」

「大丈夫……。俺を信じてもう一度目を閉じて」

「嘘……。キヤ　！」

ビルを超えるために急上昇すれば必ず急降下が待っている。零紫の右頬からは金色に輝く光の筋が放たれているのに加えて羽の形をした刺青が現れていることが印象的だ。そして、背中からは同じ色の光が基体として構成されている翼が開き急加速を抑えている。これらの人としての摂理を超越した人、これこそ正に最高の人間兵器だ。彼はそのうちの一人……。すうきな運命をたどることが決まっている少年だ。琴乃はすでに気を失っているが零紫は気にせず急降下を抑えるのに集中している。

「到着したぞ。あれ？　こりゃだめかな……。気絶しちまつてるし……。一応、教室まで運んでおくかな」

声をかけたが返事のないことに気付きすぐにさっきの容量で空いていた窓から校舎に入って行った零紫。それから数分経過し。

「う……。ここは？」

「琴乃！　大丈夫？」

「あれ？　君枝？　……。アイツは！」

「剣刃君のこと？」

「なんで君枝が知ってるの？」

「琴乃が芸能に疎すぎるだけだと思うよ」

六階建ての高層ビルのような真新しい建物がこの『愛知』地区第一高校だ。第一と言ってもこの地区には現時点では高校はここしかない。総合学科の多学部式選別制を採用し希望進路とその生徒の力

を図り最終的な進路が決まる仕組みだ。琴乃たちはその高校の一年生で今は季節があるならば六月あたりだろう。第一次時緊張崩壊世界戦争はこの母なる大地である『地球』の自転すら歪め現在の一年は綺麗に400日となっている。そして十二月ではなく二十カ月となりこれまで顕著にみられていたらしい季節も今は無い……。あとすれば数十年に一度氷河期が訪れる程度の変化しかないのだ。そのような大地の中で彼らはとても過酷な運命を生きていかななくてはならない、理由付けをすれば過去の文明人によってその宿命を自分たちに押しつけられたと言えよう。

「私さ、さつき窓から彼が入ってきて失神してる琴乃見たときにね。正直、私がショック死するかと思ったよ」

「は？ 窓から入ってきた？」

「よし！ ホームルームを始めよう！皆席についてくれ」

「この話は後でね……」

このクラスの担任は水無月 鋭牙教諭だ。この高校の卒業生のなかで理系学科に在学中18歳にして博士号を取得した天才人だ。大学からの推薦でこの高校の教諭になったらしい。現在も研究を続けながら教師という職務を全うしている。水無月は淡々と一日の連絡事項を済ませ扉の方向に声をかけた。

「入っただいぞ」

「はい」

静かなはずのホームルーム中に転入生の紹介があり琴乃は絶句し他の女子生徒はキヤイキヤイと声を上げはしゃぎ始めた。それもそのはず、来た転入生はその名も剣刃 零紫で席順は琴乃のとなりなのだから。確かによく見ればルックスはいい。そして君枝からメモが回って来た。

『さっきの続きね……。剣刃君は芸能界に彗星のように現れた今をときめく大スターなのよ。歌って踊れてルックスも良いの』

ホームルームが終わり琴乃は先ほどの手紙のことを考え一時間目に返事をノートの一ページを切り抜いた紙に書き隣を見た。転入してそうそう居るはずの席に彼は居ないのだ。普通に！ 堂々と！ サボリ……。 “そのどこがいいのだろうか” という顔をしながら後ろの席に座る君枝に手紙を回す。

『ルックスがいいのは解るけどさ……。授業をサボるような奴のどこが良いのよ』

『話は最後まで聞く？……読むものよ。噂だけど彼には裏の顔があるの。今やどこの自治組織でも所有しているらしい改造人間っていう噂』

『そんなことあるわけないよ。だってあれは長くて15歳が寿命でしょ？』

『うんそうだけど……彼には空白の時間帯があるらしいの』
「俺の授業中に手紙で文通とはいいい度胸だな！ 大原！ 鈴音！」

遂に二人が手紙を回していたのが物理の教科担任でクラスの担任でもある担任の水無月にバレてしまった。二人とも立たされ問題を解かされている。その後、罰として科せられた任務が零紫の搜索だった。午前中の授業を全てサボっている零紫がどこにいるかは誰にもわからない。情報はあらかた聞きまわったが成果は無、あらゆる教室や女子の入れない場所以外を探したが居ない。昼休みの終わりに屋上に通じている階段の方向に向っていく零紫をみつけた二人。

「あれ、鈴音 琴乃だ」

「！っ。アンタどこに居たのよ！」

「ずっと学校に居ただけ？」

「どこにです？」

「君は確か大原 君枝……だったかな？ 答えは屋上だよ。まあ、
昼休みは購買に昼飯を買いに行つてたけどね」

「入れ違いだったみたいね」

「ぐぬぬぬ……」

午後の授業は零紫も琴乃に引っぱられる形で教室に連れていかれ
参加している。おとなしく座っているので先生とも波風立たず比較
的穏やかに過ぎていった。少し寒いくらいの校舎内は空調が完備さ
れているようだ。完備されていると言ってもここは上空4000メ
ートルのエリアなので元々外気との接触は無いに等しい。が……人
も呼吸をするので一応空気の入れ替えはしている。そして噂通り零
紫の頭が良いのは確かだ。寒そうに制服の袖に手を隠しながらペ
ンを握っている。五時間目の授業は数学で六時間目は生物の授業にな
っている。どちらもかなり難しいはずの議題を講義している教授た
ちの話を聞くとなしにノートに何かを書いている。

「剣刃！ さつそくだがここの数式答えてみる」

「37分の19 3ですか？」

「せ…正解だ」

「おお……」

6時間目の生物など聞いてすらない。しかも寝ているようにも見
える。角度を変えてみるとノートに数式をずらりと書いている。こ
の時代の科学は恐ろしいほど進展しており特に進んでいるのは生物
工学やバイオ科学などだ。それを提唱するのに必要な生物の証明式
は数式と言葉の数の比が大体五分五分で均一になるのが普通だ。そ
れを超えかなりの行の数式が並ぶ。

「剣刃くん？ 君は何をしているのかな？」

「エネルギー伝達組織の伝達式と人体の合成率の比計算です。体内のエネルギーと外部供給エネルギーの増幅率は伝達率の割合によって作用することの証明ですかね。エネルギーの抵抗はその人間の体内の増幅倍率によって決まってきた我々の人間の完成論に近い不等式です。俺としては……」

「……その数式の計算はここをこれに代入して……それにそこ間違ってるわよ」

「いえ……。倍率計算式は最近のデータ 比が変化しているので……」

長い、長い教諭と零紫の論争を聞き流し空いた時間に他の生徒は溜まりにたまった課題を進めている。終了の合図とともに教室に居る生徒たちはみな用具を机に押し込み机に敷設されているパソコンの電源を落としていく、そして掃除機を係りの生徒が廊下にある柵から出して掃除を終わらせて次々に教室に集まってくる。朝のホールームよりも淡々とした調子でそれを終えて放課後は階段を急ぎ足で降り下駄箱に抜けていくと再び零紫と琴乃は鉢合わせしていた。

「あ、鈴音 琴乃」

「そういう剣刃 零紫がアタシに何の用よ」

「いや、ただここで会っただけの奴が必ずしも用があるとは限らないとは思わないの？」

「ふ、ふん！ まあいいわ。そんなことより朝のことはどうするつもりよ」

「どうするって？ あれはあれで完結だよ。俺も抱き上げた時以外は手荒な事はしていないし」

零紫はそのまま靴を履き替えシューズを装着しポケットからグローブを取り出して急加速していく、シューズがエンジン音を立てな

がら零紫の指示どおり速度をさらに上げる。校庭には部活動をしている生徒が集まっていて前傾姿勢で地面を滑るように滑空していく零紫を目で追って憧れのまなざしを零紫に向けていた。高校の敷地外に出るとすぐに琴乃がそれを追跡していき、なぜか零紫の数十メートル後ろをシューズのエンジンをサイレントモードに切り替えてエンジン音を抑えた状態のまま街の中を滑る。だが、琴乃が思っているよりもそういった方面でも零紫はできるようだ。彼もまたエンジンをサイレントモードに切り替え人ごみの中に消えていった。急速に加速していた琴乃は商店街の手前で朝に零紫がしたようなそぶりを見せた。本来はビル群の中には交通区分があり上層を緊急車両や運搬車両、中層を普通車両、地上を歩行及び旧式のエンジン車両などが動いている。それを無視しビルの中層域へ飛びあがった。

「アイツはこんな感じで……！ タアア！」

上を見て飛び上がり空中の普通車両域から零紫の特徴的な銀髪を探した。彼も琴乃が空中に飛び出し自分を見つけたことに気付いたらしく細い路地へと姿を消した。その近くに急降下し少し離れた場所でシューズのエンジンを切って零紫が居なくなつた路地へと踏み込んだ。そこは薄暗く人気のない道だ。気になるのは琴乃以外は誰もその路地には見向きもしない。まるで気づいていないように……。周りを見回してよく見ると人が一人もいない上に生き物の気配すらしない。先ほど入ったはずの零紫すら見当たらず不安になって来たようだ。

「あれ？ 今ここに……入って行ったはず。一つ間違えたかな……」

背後で靴音がしたが振り向く前に首筋に熱のような物を感じ身体から血の気が抜けていくような感覚を受けた琴乃、動けない彼女に零紫がささやくように声をかけてきた。そして、彼の爪には金色の

エネルギーを固化したらしい武器が装着されておりそれは徐々に琴乃の首に近づいていく。触れるか触れないかのあたりで光が消え少々熱を帯びたままの手で細い指が巻きついていくように彼女の細い首を握った。

「お前さ、面白いね。そんなに死にたかったのか？」

「なっ……。何よ。脅そうたってそうは……。ひっ！」

「これを見れば本物の特務機関の兵士だとわかるかな？」

首を掴んだ状態で少し力を入れて向き直らせた。手に持っている手帳には空中に浮いている木の刻印の前に矛、剣、弓を派手にかつシンボリックに構えている翼の生えた少女の刻印が刻まれている。その下には黒に銀の鑄造で作られたシンボルが付けられている。上のマークは空中要塞愛知のもので下にあるのが特務機関『ガイア』のものらしい。それらはこの空中都市『愛知』の防衛機関として巨大な権力及び影響力を誇る特務機関『ガイア』の正式な隊員を示すものだ。それを見せるとすぐにベルトの後ろからエネルギー収束サーベルと呼ばれる先ほどのエネルギーを固化したものと同じ原理で作られている武器を取り出し再び琴乃の首元にかざしながら話しかけた。

「俺が君に求めるのはただ一つ。秘密の保持さ……。君が見つけて入って来たこの通路が変だと思わなかったか？ 人が一人もいない……。ここは『ガイア』の秘密工作用の通路だ。そこに入ってきて来たことは殺されても文句なしっていう事になるんだけど」

「そ……。そんなの知るわけ……。知ってるわけないでしょ！ 一般人のアタシが！」

「いや、入ってくることができるのは普通の人間ではないんだけどね。安心してよ。今すぐにその綺麗な首筋にこのサーベルの刃が通るわけではないしね。君に約束してもらいたいことは二つだけだ。」

今からこの上で起こることに目をつぶることとこの秘密を守ることに。それまではこいつを持っていてくれ、人攫いに襲われたらこれを作動させ逃げ続けるんだ。あ……、俺が下りてくるまではここに居てくれると助かるけどね。言ってる意味わかる？」

そう言っつて小さなボールを琴乃に投げサーベルの刃を一度しまいこみシューズのエンジンをブラストモードに切り替え路地の上空に消えて行った。そしてビルの上から断末魔の叫びとともに右腕が二本と左腕が一本、首が三個と分離した胴体が数体落ちてくる。どうやらビルの上で人攫いの一団と戦闘になっているようだ。しかも圧倒的に零紫の方が押ししておりその零紫から声が聞こえてくる。

「そこから離れるなよ！」

しかし、琴乃はすぐにその場から離れてしまった。それもそうだが人がバラバラになった死体を目にすれば誰でも気絶したり、その場から逃げたくなるだろう。それに人ごみにまぎれば見つかりにくくなるのは必然と考えすぐに地上に広がる商店街に逃げ込んだのだが、その考えも甘かった。人攫いは民衆に溶け込むことで人をだまし一人になっていたり、人との繋がりが薄い人間をさらい売り飛ばすのが生業でそれが血相かいて路地から現れた少女を見逃すはずがない。

「あんた達なんなのよ！」

「へっ！ 上玉だぞ！ 追いかける！」

零紫のシューズのようなブラストモードは琴乃のシューズには搭載されておらずスピードは普通のシューズ並にしか上がらない。彼女の身体能力が問われる。それに気が付いたらしい零紫がすぐに周りにいて武装している人攫いを殲滅し先ほど渡しておいたボールの

発する電波を頼りに追いかける。

「何てこった……。女の子のことはよくわからん……。しかももう時間がない」

琴乃は人が多く目立つ中心街に逃げ込みビルの壁面や走行中の普通車両まで利用しなんとか逃げ切っていた。零紫はビルの壁面を滑空しながら持っていた携帯電話を使い誰かと連絡を取っているようだ。琴乃がビルの中心街に逃げ込んだせいで電波の受信度が悪くなり追跡が出来なくなっているように見える。

「もしもし……。親父？」

「いい加減その呼び方はやめろ。どうした？」

「人攫いと遭遇して現在の敵は少女を一人目標に追っています。救援お願いできますか？」

「わかった……。俺がいく」

「ありがとうございます」

零紫の上司らしい男との通話後、その男は何もない場所からバイクに乗っている状態で現れた。乗っている武装したバイクがエンジンを唸らせ普通車両域を滑空し零紫の持つ端末の電波を追っていく。街の外れからなので少々時間がかかりそうだ。

「おい！ あの女はどこいった？」

「済まねえ兄貴……。取り逃がしちゃった」

「ちつ……。顔は覚えたんだろうな？」

「へえ……。意外と可愛い顔でね。結構な上玉でさあ」

琴乃は中心街の一番警備の厳しい場所である貿易センタービルに居るようだ。そこは一応の事、治安維持隊の警備員が常駐していて

人攫いも容易には入って来られないのだ。そこで少し異様な現象が起きた。警備員が高校生ほどの少年に敬礼をしているのだ。琴乃はこのビルの真ん中の動力室に入り込んで体を丸めて俯いている。動力室は高温になり熱暴走を起すのを防ぐために空調で温度が低く設定されている。こうでもしないと凍え死んでしまうのだ。そこに……

「鈴音 琴乃……。そろそろ出て来ても良いんじゃないか？ 確かにここは安全だが下手すれば死ぬような所だぞ？ まあ、逃げ切つただけよしとするか」

「何よ……何よ！ 何よ！ 何よ！ 何よ！ アンタ正義の味方みたいな顔して実はただの人殺しじゃない！ そんな奴に助けられる道理は無いわよ！」

「まあ、ああ、俺は確かに人殺しだ……。だがな、これだけは言っておく。無益に殺したりはしないし理由や証拠、命令がなければそういう行為自体は嫌いだ。お前が俺をどう思おうと勝手だが俺は『ガイア』の『特別任務遂行鬼神隊』の最後の生き残りとして一般人を一人でも守るのが役目だと思ってる」

無理やり腕を掴んで立ちあがらせ動力室から引っぱりだした。センタービルの下層にある商業区の中に二人で向かい合って黙々と食事を取っている不自然な二人が居た。まだこの大地が地上にあったころに『ファミレス』などと呼ばれていた場所だ。比較的安い料金で飲食が出来る場所でそこは数人で集まって賑やかに食べるのが一般的な場所であるが相手の顔も見ず下を向いてただひたすら食べている。明るい店内にあわずそこだけ空気が重い。

「……………」

「そろそろ何か言ったらどうよ。アンタ……左腕怪我してるでしょ

？ 隠すの下手すぎ。それにアンタ芸能人なんですよ。アタシみたいなものとして噂にならないの？」

「してるが……もう痛みすら感じない。芸能は生活費を世話になつてる親父に無理させたくないだけだ」

「は？ まあ……アタシには関係ないけどさ」

センタービルの食堂を出てビルの外部に出る。夜の十時を回っているため紫麗は彼の後ろをとぼとぼと付いてくる琴乃に注意しながらずっと腰につけている先ほどのサーベルよりも大きな機械の筒を握っている。センタービルの元にある区域は夜になると危険な区域になる。柄の悪い連中が集まり人身売買、違法な薬物取引、武器の闇市など聞くだけでおぞましい行為が平然と行われている。

「俺から離れるな……。離れるなよ」

「わ……解ってるわよ」

センタービルから延びる道をまっすぐに抜け危険地域の最後の区画を抜けようとした時に再び夕方の人攫いの一団が取り囲んでくる。そのエリアは悪人も一般人も近寄ってこない修羅の庭だ。周りには人っ子一人いない。

「よお……姉ちゃん」

「あ……あんだ達！」

「ここを出くわすとは姉ちゃんも相当運がないね。さあ、大人しく用心棒ともども奴隷になつてもらおうか！」

「全くめんどくさい奴らだな……。じゃあないか。鈴音 琴乃は下がりな」

街灯も破壊されておりビルの上層に住んでいる住民の放つかすか

な光しかない。その中で特徴的な金色の光を放ち『特別任務遂行鬼神隊』のその体に与えられその命を削り続けた力を遂に一般人の前にさらしたのだ。彼の個体名は『零』。その攻撃性と彼自身が元々持ち合わせる反射神経と動体視力を駆使した『人間兵器』の最後の散り様を……。背中あたりから高い風圧とともに巨大なエネルギーを放ち戦闘を開始するためにエネルギーを集中をしている。

「最後の鬼の一番……人の世全てを守ろうと……、朽ちる我が体顧みず、散った仲間は無数に……。そして今！最後の鬼の一番！悔いを残さず散らせて見せよう！死花を！参る！」

抑揚の付いた言葉をひとくりにまとめ零紫は人攫いの撃ち込んでくるレーザーガンを琴乃に当たらないように弾き返しながら次々にその手から延びる強靱な光の爪で切り刻んでいく。さらに腰から取り出したエネルギー収束サーベルを抜き放ち流れるような手つきで振り回すそれによりまわりの敵は絶命していく。腰が抜けてその場に座り込んでしまっている琴乃はただ呆然と零紫が『人の心をなぐした人』を無きものにしていく様子を見続けていた。およそ十分後に早くも決着はついた。それまでの過程で首を切りおとされたり、前例のように腕をそぎ落とされ足を細切れにされ人とは思えない肉の塊へと姿を変えていく人攫い達。そこに武装したバイクが現れビームマシンガンを撃ち込みながら中心で敵を押し返している零紫の横に止まった。

「お前……。死ぬ覚悟はできてんのか？ 零紫……」

「ええ、できてますよ。最後にその子みたいな面白い女の子と話が出来て良かったです」

「え……。どういっ……」

「そうか、お前の意志はこの子を守ることなんだな？」

「行ってください。そのバイクなら賊程度簡単に蹴散らせるでしょ」

？ 荒神さん」

「わかった。せめて一人残らず殺せよ！ お前の骨は俺が拾ってやるよ！ 七年間だったがお前の技師が出来て良かったよ」

「嘘！ ちよっ……待ってよ！」

バイクの主は荒神というようだ。顔に大きな傷があり、ひどい割に小柄な男にバイクに無理やり乗せられた琴乃。そして、二人の乗ったバイクが急発進し人攫いの残りの半数がシューズのエンジンに火を入れ懸命に追いつこうとする。一直線の太い道を大型のバイクは速度を上げる。荒神は一般人の被害を出さないためにわざとセンタービルのもとに戻って行った。そこでバイクのミラー越しに追ってくる十名ほどの人攫いを構えた拳銃で寸分の狂いなしに狙撃していく。

「素人の雑魚どもはこれで十分だ！」

放たれた光を帯びた弾丸は人攫いの半数の命を一瞬にして奪った。それに加え残りの半数は別の男の遠距離射撃によって皆命を落とされた。弾丸の放つ光の筋はほんの数秒で止まりビルからシューズのエンジンを絶妙に制御し細身な男がビルから降りてくる。

「流石は元化学機動体のメンバーってところか……。腕は落ちちゃあいないみたいだな……。荒神少尉。残りは俺の獲物だ」

センタービルの近くにあるビルの屋上から生き残ってなお追いかけてくる無知な人攫いに眉間を打ち抜くという曲芸並の芸当で鉄槌を与えた男の姿があった。彼はバイクに寄りかかっている小柄な男に話しかけている。どうやら同じつながりがあるようだ。

「なんとか間に合ったか……。元陸軍中尉、思世 貴登。現在軍教

官で腕は落ちたと聞いていたが。逆に上がってるな」

「そりやどうも……。だが、世事を言ってもボーナスは出ないぞ？」
「残念だな。そりや」

その頃の零紫はと言うと。

「最後の一人か。大人しく死んでくれよ……。手間掛けさせやがって……」

「ヒイイイ！ お助けえ！ ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア
！……！」

無慈悲にも程がある殺し方をしごろごとと転がる肉塊を定まらな
いらしい焦点で周りを見回した後すぐに気が抜けたように零紫本人
も壁に手を突いた状態で下を向いてしまった。そこから数秒と持た
ず最後には壁にもたれかかった状態で倒れ呼吸の間隔が歪になり腕
や足には力がないらしい。動こうともせず目目を閉じた。

「あ、あの荒神さん？」

「なんだ？」

「い……いや、その」

「零紫のことか？」

「はい……」

「アイツのことは忘れる。俺も心残りだがもう手遅れだ」

「え……。それはその……」

「荒神……。時間だぞ」

絶句して下を向いた次の瞬間にバイクから飛び降りて足に手を当
てた琴乃に向って声をかけずにそのまま行かせたようだ。バイクの
上で何やらポケットを探り酒瓶のような物を取りだして口に運んで
いる。荒神のもとに細身で長身の男が狙撃銃をかついだ男が少し離

れた所から声をかけた。

「追いかけていないのか？」

「思か……行かせてやれよ。女は自由な方がいい、特にあのぐらいの年頃はな」

「このバツイチがよく言えたな」

「お前だって追わないんだろ？ だったらお前も同類だろ？ 思世教官？」

「馬鹿言つな。お前はただ愛想尽かされたただけだ。俺はちゃんと愛する者の最期をみとつたんだ。同じじゃない」

シューズの出力を最大にしてなんとか元のエリアにたどり着いた琴乃。だが、彼の放っていた巨大なエネルギーと光は見当たらない。おぼつかない足取りで歩いていく琴乃は進んで行くと零紫が切り刻んだらしい人の死体に蹴躓く。ピチャピチャと音を出しながら流れている血を踏みながらさらに進むとビルの壁面に手が触れた。光が無ければ視覚は意味をなさない。それが働かなければ感覚と聴覚、嗅覚に頼るしかない。しかし、嗅覚は血と肉の焼けた臭いで効かず感覚は近くに死体があるという恐怖からまったく作用しない。

「やっぱ変だよ。鈴音 琴乃」

「ヒッ！ ……つて剣刃！ アンタ大丈夫なの？」

「こいつら殺してすぐに追っかけてない時点で大丈夫な訳ないでしょ？ ちゃんと頭は働いてるのか？」

「しっ……失礼な！ せつかく助けに来てやったのに」

「だったらこのまま荒神さんのとこに帰った方がいいよ。見たくない物を見ることになる。見たいなら別だけどな」

「アンタ懐中電灯持ってないの？」

「はあ……。失神しても知らないからな。ベルトの左側のホルダーに入ってる一番小さい奴がそう……。そう……。それだ」

琴乃がベルトと腕の間に手を通した時に不自然な湿り気があった。最初は帰り血かと思っただがライトを付けてこれまで零紫が拒んでいた理由とともに原因がわかった。彼の体の組織が流れ出ているのだ。水分は少し粘度があり触れた琴乃の腕に又メ又メとしたたる。気づいた時には既に右腕は腐った枝のように一部の組織を残したまま崩れ落ち体内の水分との分離が著しく進み始めている。それでも彼は最後に立ちあがり琴乃に向って頬笑み掛けながら話している。

「アンタ！　なんで……その体……」

「君の予想通り俺は『改造人間』だ。普通の奴らとは違ってシンク口値が高くて少し長生きしたかな。だけど、君を守るために最後のリミッターを外したらこの通りさ。だからなるべく見てほしくなかったよ……」

「それじゃあアタシのせいなの？　そうだったのは……」

「いや、遅かれ早かれこうなったさ。それにその『せい』っていう言葉は気にいらぬな。それはあくまで俺の意志だったんだから。それに俺は楽しかった。今日一日を琴乃みたいな子と過ごさせてね。ありがとう。そしておやすみ」

「待ってよ！　何よそれ！　ねえ！　アンタ！」

「バイ………バ………イ」

最後には砂のように崩れ落ち彼の着ていた服を残してその存在は消えた。後ろから先ほどの荒神とその荒神が運転するバイクの後ろに乗っていた見知らぬ男が近づいてきた。荒神が琴乃の肩に筋肉質で堅い手を乗せ見知らぬ男が砂の一部を持っていたビニル製の小袋に入れようとした。荒神はよく見ると人工皮膚を使っただけだが明らかに左腕が丸々義手だ。そして屈んで袋をつかんでいる男は『愛知』のマークをかたどった眼帯を着けている。

「それ……どうするのよ？」

「火葬する。この空中都市『愛知』の治安を最後まで守り続けた同士として最後に皆で別れを告げたい」

「待つてよ！ アンタ達『ガイア』の人間なんでしょ？ なんとかしてよ！ そんなアタシのせいで死んだようなものなのよ！」

「無理だ……。残念だが一度死んだ命は生き返せない」

その時、琴乃の背後からいきなり零紫が放っていた光と同じ光が放たれ琴乃を包んだ。だが彼女は『改造人間』ではない。啞然としながら目を見開いている後ろの荒神と思世に向って言葉を放ちながらさらにエネルギーを膨張させていく。

「アナタ方にできなくてもワタシにはできる。『創の三原理』を司る血を受け継いだ私になら！」

「おい！ 荒神！ 何が起きてるか解るか？」

「『創世主』だと……」

荒神が口にした直後に思世が持っていた拳銃を構え警戒態勢を取った。しかし、すぐに荒神に制止され銃口を地面に向け荒神に向けて声を荒げた。零紫の放つ巨大なオーラよりも大きなオーラが二人を含む半径十メートルのエリアを包み弱いが風が起きている。

「やめる。今の彼女は俺たちの同士を生き返そうとしてくれるんだ」

「馬鹿かお前は！ 『創世主』と言えば第一次緊張崩壊戦争の引き金となった種族。皆、銃殺されたはずだぞ！」

「今は抑えろ！ もしかすると彼女はあの忌まわしき一族の直径では無いかも知れない」

光が物体のように形を作り薄っぺらいコードのような物になった。

それは人体エネルギーを最大限伝達するエネルギー体で総称されアマルガムと呼ばれる液体金属だ。それが砕け散り原型をとどめていない零紫の細胞を再び構成して体を再構築していく。美しいが恐ろしくもある光景が終わり再び命を得た零紫と力を使い過ぎ気絶した琴乃を荒神がとりあえず預かりバイクで自宅まで運んで行った。思世は荒神との話しあいの結果ここでの事実を胸の奥にしまう事に決め、その場を離れて行った。

「う……。う……。はっ！ ここは！」

「おはよう。携帯借りたから。一応返しとくよ。いいお姉さんを持つたね」

「あつ……。荒神さん！ ここは？」

「俺の家」

その部屋には何やら大型の機械類から小さなパーツまでいろいろある。琴乃はあたりを見回し自分の置かれている状況を把握しようとしきりに考えるようなしぐさを取っていた。そこに零紫の声と知らない男の声が聞こえてくる。荒神も電話の着信音とともに受話器をとり琴乃に『待つように』というような意味合いのジェスチャーをしデスクの椅子にふんぞり返った。聞こえてくる声は疲労困憊といった様子の男の声だ。内容は仕事の依頼で荒神はそれを断りすぐに琴乃の方に向き直った。

「もしもし……。智基か？ は？ 書類整理？ それぐらい自分でやれよ！ ……おう、酒ならいくらでも付き合ってやるよ。おう…
…おう……。わかった。じゃあな」

電話を置くタイミングと合わせたように零紫がデスクの横に走って来て手を机に強くついた。荒神にいろいろ聞きたいなどと琴乃には見せたことのないような驚きを含んだ声でしきりに話しかけている。

荒神がそれを制止し部屋の隅にあるベッドの上に座り込んでいる琴乃に視線を移し少し顎で『行け』という意味を持つのであるう動きを取り『酒をとつてくる』と言い残して部屋を出た。部屋はかなり広いが人がまともに住めるエリアはこの辺りだけだ。あとはほとんどが機械で埋まっている。

「あ……。ええと。その」

「またあつたね。鈴音 琴乃」

「いい加減フルネームで呼ぶのやめたら？ 言いくいでしょ？」

「いや、気にならないが……！ そうだ！ お前は俺に何が起きたか解るか？」

「それが解れば苦労しないわよ。アタシは今現在自分の置かれている状態すら解らないんだからさ……」

そこに先ほどの声の主と荒神が入って来た。そしてまず最初に琴乃に近づき本人も気が付いていなかった手錠を外して自分のポケットに入れた。そして、零紫の方に炭酸飲料を琴乃にはココアを手渡し口を開いた。今更ながら荒神はかなり酒臭い。部屋には沢山の酒瓶がある。それらはほとんどがアルコールの高い洋酒のようだ。

「自己紹介が遅れたな。鈴音 琴乃さん、俺の名前は荒神 修羅。」

『ガイア』所属の技術主任だ。知りたいなら過去も教えるが今は省略。で、こいつが巖磨 角つつう二トだ。一応おれの部下でこれまで俺と組んで零紫のボディ形成プログラムやアーマータイプの作成なんかを担当していた。自己紹介はここまでにしてまずはお前の昨日の出来事に付いて教えておく。正直なところ俺にも何が何だかわからんが断片的に解る事から推測した過程を述べるつもりだ」

荒神の顔が真剣に成り巖磨という男にパソコンを開かせある写真を見せた。痩せた細面の巖磨はノートパソコンのキーをはじき出し

何やら画像を解析してこちらに見せてくる。

「これは？」

荒神が『まあ待て』と言うように手をかざし説明を始めた。椅子にふんぞり返っているため人に話をするような態度には見えないが気にしないことにしよう。

「昨晚……。零紫の生体反応は完全に消失したはずだった。『改造人間』の宿命である短命さが現れた形だろう。だがここにお前は居る……。なぜだと思っ？」

「荒神さんか巖磨さんがバックアップを用意していたとか？」「データならそれも可能だが『人体』においてそれは不可能だ。クローンは作れるが魂と言うべき感情は個体ごとにバラバラに現れるからな。先に答えを言っておこう。お前を生き返らせたのはそこに居る。

鈴音 琴乃さんだ」

「へ？ アタシ？」

「その通り。ここでさつき見せた画像が役立つ。二人とも『創世主』伝説は知っているよな？」

「ええ、少しは……」

「ああ、あのバカげた話ですか？」

「そう……。俺も軍にいなければその馬鹿げた話の本当の転機や結末が解らなかった。だが今、俺が手に入れた情報をここで全て君たち二人に伝えよう」

荒神の話すことはかなり昔にさかのぼることだった。一九九三年二月二十九日にその子供は生まれた。体の各細胞に恐ろしい数のミトコンドリアと普通の人間には無い特徴を持ち生まれた人間の亜種とまで呼ばれた子供。彼は『鑑 章介』と名付けられ幼少期は平穏に子供として過ごしていたがある時ある出来事を境に彼の行動が

世界を揺るがす事態に発展したのだ。どのようにしてその規模の軍隊を集めたのかは定かではないが彼は巨大な軍事力と既知、何より恐ろしかったのは彼の先を見る能力だ。それによって全ての作戦が見透かされ列強はなす術も無く次々に倒れ彼はこの母なる大地を併合、巨大な帝国を作り上げた。

「あの、それとこれのどこに関係があるんですか？」

琴乃が聞きたくてたまらなかったと言うようにたずねて来た。今度は荒神では無く巖磨が答えた。「まあ、そう思うのもむりないは、情報を見つけたワイかて言葉が出んようになるくらいの実事やったし。アンタはんがまさかそれに該当するとは思ひもよらんかったさかいなあ」

「それ……どういふ事ですか？」

「親父がいうように結論から言ってしまうえばアンタは『創世主』なんや」

「……………は？」

彼女の一言を聞き終えさらに巖磨が説明を加えた。その『創世主』の異能は人を超越しておりそれは人類がどのようにしてもなしえない物が多々含まれていたらしい。まずは驚異的な回復能力、次に空間転移能力、三つ目に無い物のある物に変える力。

「親父の話しやとな。アンタはんの背中からごつつ綺麗な光が出たそうなんや。で、そういう現象を調べてみるとな？ 『創世主』の力の一部やつちゆうことが解ったんや。それにアンタはんが眠りこけとる間にとつた血液サンプルの検視結果から推測するとアンタはんは確実に『創世主』なんよ」

部屋に居る四人の中に沈黙が広がり荒神が焼酎の瓶を床に置いた

音とともに口を開き話しかけた。

「『創世主』はな、『血』で生まれる物ではないらしい。人間の摂理、輪廻、世界の均衡状態と時期の重なりから百年に一度、十億人に一人の割合で生まれるのさ。で、俺は今、ものすごく安心してる。現代に生まれた『創世主』がこんな良い子でな。いずれ知ることだから今伝えておく。その後『創世主』の一族がどういう末路を歩んだかをな」

その後の『創世主』の一族は皆殺しになりその血は絶えたらしい。この時代になる前の数十年前に起きた第一次緊張崩壊戦争の小規模戦線はここ日本で行われていた。その頃は『創世主』の血も薄れ異能は無く既に巨大な帝国は崩壊を迎えていて支配勢力から分離し独自の自治を持った地域が多く現れた。勢力範囲は独立軍がユーラシア、北アメリカオーストラリアを含むエリアを軍事拠点として構え『創世主』の一族は太平洋に浮かぶ孤島や南アメリカ、アフリカを領有していた。そして、その戦争の名前の通り『創世主』の一族の総攻撃を境に緊張は一気に崩れ戦争は激化、独立軍は元日本や元オーストラリアに空中要塞都市を集結させ防戦を張る一方でアフリカの後方より陸軍を進行させていたらしい。戦争の決着はこの日本空中都市連合艦隊によりもたらされ敵の主力艦や兵器や兵士は海のそこに消えて行った。その後は防戦をも敷けなくなった『創世主』の軍が中立を保っていたヨーロッパに落ちのびようとしたがヨーロッパは独立軍の勝利が確実になると独立軍に味方したうえで『創世主』の一族を拿捕しその一族郎党の全てを銃処刑により殺害したのだ。

「ここ、『愛知』は戦時中の名残を残したまま空中に浮いてるのさ。多くの都市は海面に浮く回遊都市として機能を停止させているがいつなん時敵の襲撃に見舞われるか解らないからな武装はしてあるわけさ」

巖磨が話を元のラインにもどし話し始めた。巖磨の話し方はこの『愛知』には珍しい。過去にまだ日本が分離していない時代には関西弁と呼ばれていたしゃべり方らしい。

「親父。話しながいで……。まあ、要するにや。わいらはアンタはんに礼を言いたいんや大切な家族を救うてもろたしう。ほんまおおきにな。見ての通りワイらは血のつながりは無いしはつきり言うて赤の他人や。だけど慣れると楽しいもんやで？ まあ、零紫と親父は親子同然やけどな……」

「水を差すようで悪いが業務連絡もしておく。早めに言っておかなくてはいけないのを忘れていたが明日からそいつをそっちに預けることになってるからよろしく頼むよ。琴乃さん」

「え？ どういう事？」

「お姉さんの同意のもと零紫の身柄はそちらに預けると言うことさ。それなりの補償金付きでな。他にも『ガイア』の任務や情報操作の関係で付属が付くかも知れないが細かいことは後々……」

その時、不意に警報が鳴り響き管制室からの伝令が流れ基地内にいるらしい主任が中央会議室に召集された。その緊急放送と同時に荒神も立ちあがり部屋を出て行き巖磨はぶつくさ毒を吐きながら零紫を連れて部屋を出て行った。荒神は主任位の1人で巖磨は零紫の専属のシステムエンジニアだ。それぞれの仕事に向け足を運ぶ彼らは無言のままである。緊迫感は相当なものだ。そんな中、一人にされた琴乃がいささかかわいそうだが緊急事態につき誰も相手が出れないのだ。

「思世管制主任兼指揮官よりの通達です。夢路班は通常のシフト通りに砲撃管制を受ける準備をした状態で待機、水無月班は第二緊急レベルシールドポットの展開用意をしたのちSEHシールドの展開

用意をして待機、空雅航空大隊は敵機の撃墜を行い敵の数を削った後に輸送船館の警護、荒神氏には『特務機関特別高機動科学隠密部隊』OGREを指揮し敵の攻撃艦の主要管制室の制圧及び敵の指揮官の暗殺を行ってください。指示が通った班、大隊から行動を開始してください」

WAR WAR WAR

各管理官やチームのリーダーが慌てて基地内の廊下を走り回っている。警報が鳴り響きホールなどのモニターには全て『緊急事態』やローマ字表記の文字、訳の解らないふにゃふにゃした文字などが羅列していて基地内は先ほどの落ち着いた感じとは違い騒然としている。琴乃は完全に気おくれし荒神の部屋で呆然としていた。零紫は巖磨とともに奥に消え荒神は召集を受け管制室に向かったのだ。十二年前の戦争の余波なのかそれとも新たな戦禍の発端なのだろうか。どちらにしる今は定かではない。

「こちらメインオペレータールーム第一から第十の砲門統括室はこちらに回線を移しリンクを全て本部の専用ケーブルにつなげ！」

「了解！」

「A班は回線接続、移行を完了！」

「B班も同じく！」

センタービルの中央管制室内右舷戦闘管制ブースでいつもは疲労で死にそうな顔をしている夢路 智基主任がきびきびと指示を出し『愛知』の保有する全ての攻撃、迎撃用の砲台を稼働させていく。『愛知』の側面についた砲台はA～Jまでの小班が管轄を受け持ち総指揮を取る思世の指示とシステム制御を担当する夢路が指揮をとる。全てのリンクが完了した時に左舷でも動きが見られた。

「総司令官殿！ 砲台の管制システム異常なしです！」

「左舷『SEHシールド』展開演算システムオールクリア。空雅『黒燕』飛行大隊の後続機に『第二緊急レベルシールドポット』装備完了。いつでも開戦可能です」

水無月 鋭牙教諭の裏の姿はこの『ガイア』の文官の中での重役だ。この空中要塞『愛知』の防備をその神がかった計算速度と論理思考で海賊の襲撃から守って来た影の英雄。とうの本人は天然でその自覚はないが空中海賊の逮捕や全滅に貢献しているのは事実だ。

「荒神だ。『特務機関特別高機動科学隠密部隊』 OGRE 全員集合完了したいつでも出撃可能につき命令を待つ」

「こちら空軍大隊の空雅。尖突機動機陣、後続支援砲撃機、爆撃用中型機、小型空母の全ての『燕』が出撃準備を完了した」

思世が立ち上がり作戦実行の合図をした。その合図とともに各隊が一斉に動き出していく。騒然としていた管制室や廊下、会議室、砲門管理棟に致まで完全に騒ぎが収まり静寂が広がる。唯一聞こえてくるのは空雅の戦闘機団のエンジン音と夢路の指揮する砲門が開き始めた音くらいだろう。その頃の零紫達は……。

「この……くそが！ なんでプログラムが機動しないんや！」

「どっかしたんですか？」

「どうもこうも無いねん！ お前の機体プログラムが応答せんのか……。親父も居らへんし……。これまではお前の媒体は普通の改造人間の伝達式と同じように普通の伝達量で噛みあっとったんやが……」

「どうした！ 巖君、君の部だけ連絡が無いから心配してたんだ」

「おお！ 救世主や！ 水無月はん！ お願いがありますねん！

この演算をチヨチヨイとお願いできまへんやるか？」

「巖君、もしかして……」

「そのもしかして……で身動きが取れなくなってもうたんや！ せめてこの演算が終われば後はもとのアーマーデータを各種リンクするだけなんやけど」

「悪い！ 回線に横やりして、俺に良い心当たりがあるんだけど。」

昨夜、保護された子の友達に『大原 君枝』っていう女の子が居るはずなんだけどな？ 彼女に今連絡を取ってこちらに来てもらってる。息子たちのベビーシッター を頼んでいる子なんだが彼女はすごいぞ！ 鋭牙ほどではないが彼女も相当な演算能力を持つてる。今から来てもらうから少し待っていてくれ！」

「了解や！ それまでにこっちもできるだけ解いとくさかいたのんますな！」

「了解！ 荒神君にも回しておいたからそこはなんとかなるだろう」

同期のメンバー内では親密な関係を利用してトラブルも次々にクリアしていく。彼等の強みはチームワークの機敏さと正確さだ。タイプの違う六人が合わさったことで最高のチームが出来上がっているのだ。数分後係員に案内されて巖磨のところにとどり着いた君枝が到着し演算式の解析を零紫本人を加えた三人で行いできるだけ早い解決をめざし上下関係や一般人の枠を超え互いに信頼し合う事をこの三人は無意識に実現していた。それぞれの流儀の内に……。

「くそ！ 何なんだよこれ！」

「剣刃君！ うるさいよ。こういう時は静かに集中して！」

「後で絶対に臨時収入を求めてやるで……でないとこんなの割にあわせんは」

その作業を入っても気づかれないままの琴乃が眺めていた。自分も役に立ちたいがそんなに特技や飛びぬけた才能があるわけでもない彼女はすぐにその場からいなくなる。廊下をとぼとぼと歩いていると十字路の右側から細いがしつかりした手が覗きしきりに手招きをしている。そのころ空雅隊がおよそ100機、要塞の半島部にある滑走路から次々に発進し今回の任務地に向っていく。その後続に一機だけ違うカラーリングとフォルムをした飛行機が急降下し空雅隊の数機の護衛を受けながら攻撃を受け半ば占拠されかけている回

遊都市『静岡』に向う。

「我、『蒼燕』敵影を右舷前方より確認。『黒燕』隊攻撃許可を」
「許可する。『碧燕』と連陣形を組み波状攻撃を仕掛けよ」
「了解」

訓練度の高い空雅の直轄部隊には全て『燕』の一文字が入る。小隊長となる戦闘機にはそれぞれ隊のシンボルとなるカラーリングがしてあり良く目立つため狙われやすいが空雅の起用した精鋭たちの実力はその辺りに居る戦闘機などに撃墜されるような物ではない。敵の先陣隊はこちらの軍閥連の三人、空雅、荒神、思世の三人が試行錯誤を重ねて作り上げた陣形の数々を絵を描くように指示どうりこなしている熟練のパイロットの猛襲を受け壊滅。別働隊を警護していた『赤燕』も下から加勢し敵の進撃は完全に食い止めている。そして手招きをされていた琴乃はそれに反応してそこに小走りに向かう。するとそこに現れたのは管制室にいるはずの思世だった。数個の無線を利用して各班や隊、軍に命令を出しているのだ。その思世が声を絞りそこに座るように指示しポケットから黄ばんだ袋を取り出して三つしているベルトの内の一つを外し背負っていたリュックから少し厚手のジャケットと厚手のズボンをだして次の指示を出した。

「すまない……時間がないから手短かに話す。荒神は『静岡』のデータや戦力抽出を図りに向かっていて零紫の補助に回れないんだ。で……、いやかもしれないが零紫を助けてほしい。これは………まあ、荒神のお古で少し血なまぐさいが我慢してくれ。これもお古で悪いが拳銃の予備ともう一つだ」

「あの……、これをどうしろと」

「簡単だ。今から伝える手順でことを運べ。あとはなるようになる」

「はい」

思世の伝える内容は簡単そうでも難しい警備兵に見つからないように通路を走り巨大迷宮のような『ガイア』地下本部の中を目まぐるしく駆け巡る。まずは更衣室に向かい思世にもらった戦闘用の衣装に着替える。薄い布のマントを着てさらに下層にエレベータを乗り継いで向かう。琴乃本人は『まるで映画見たいと！』はしゃぎながらそれをこなす。だが、先に待っているのは血みどろの戦いと初めてのことばかりの戦場だ。そして、最後の部屋にもぐりこみ零紫達が入ってくるのをひそかに待っていた。彼女の向かおうとしている前戦地では荒神以下十名ほどの戦闘員が任務を遂行している。今のところは死者も出ずに皆健在のようだ。

「荒神……。到着したか？」

「到着した。これよりリストアップされた主要人物及び将校、敵機関の破壊を開始する」

「健闘を祈る。我々の任務は侵略では無い。あくまで『静岡』の人民の保護だ。それを忘れるな。昔の『異名』を捨てたお前ならできるだろう？」

「わかつていさ。左腕を切り落とした時に誓ってる」
「……。そうか、俺も区切りがつき次第戦闘に参加する」

荒神の後に続く真っ黒い防具にスコープや暗器の数々を仕込んだ数名の兵士こそ『愛知』の軍関係者しか知らない普通の人間で最強かつ危険な戦闘員で『特務機関特別高機動科学隠密部隊』……別名OGRE。数も少ないが『改造人間』の起用前は必ず前線地に配備され隠密、暗殺、破壊工作、伏兵、臨時補充要員、臨時指揮官など多くを掛け持ちしていた部隊人員。『改造人間』の研究が成功しコストの関係や用途の薄れから不要になったためほとんど教育や作成は委縮したが過去に作成されその残存兵や未だにその面影を残している面々というのが彼らだ。10歳になるころに訓練や教育を始め、

知識、運動能力、身体的機能の向上を経て一人前になるのだ。思世は危険を顧みずその封印を解き遂に彼らを前線地に送り込んだのだ。

「『鬼神』隊長。分岐点に到着しました。配置はどうされますか？」
「よし。俺と三人残り敵の迎撃だ。後の六人は二人づつ三手にわかれて『静岡』のメインコントロールルームから関係者の退避。殺されていれば敵の一掃と地下のシエルターシステムにこのチップを差し込め」

「了解『鬼神』リーダー」

二人の男がマシンガンを構え奥の暗がり消えて行った。彼らは荒神の一年後輩のメンバーで中距離戦闘と近距離格闘の二つに長け荒神の『二本差し』と呼ばれたほどの猛者だ。

「次に敵の占拠していると思われる場所に行く。そこに行く二人は心しろ。敵は必ず『静岡』の攻撃管制システムを使い俺たちの『愛知』のシールドの薄い下部か空雅隊の小型母艦を攻撃するはずだ。そのシステムを破壊するか敵を皆殺しにして来い」

「イエス！ サア！」

さらに筋肉質で大柄な戦闘に特化したような二人が奥に消えていく。彼らは外国の機関からの留学を目的にしていたが思世の指揮力と指示の的確さにほれ込み『愛知』にとどまるにいたったメンバーの生き残りだ。

「最後だ。これも多少は危険を伴うが『静岡』の海中船団及び空水中用戦闘機のパイロットがまだ下で抵抗しているはずだ。そいつらを海中滑走路から外に送り出せ。お前達も一緒に離脱しその足で本部に帰還して思世指揮官に報告しろ」

「はっ！ 御意のままに」

最後の二人は空雅の元部下で荒神のところに配属されたメンバーだ。彼らが最後に居なくなったのを確認した荒神も腰のベルトから二本のエネルギー収束サーベルを抜きたまに道を抜けようとする敵小隊の撃破を開始した。その頃、本部西区間のラボでは零紫の装備の変換とデータのアップデートが終わり鎧、剣、盾を装備させ彼を空中射出ハッチまで送っていた。

「よし！ お嬢ちゃん良くやってくれたは！　こんどなんかおごつたるさかいな」

「おお！　お兄さん太っ腹！」

零紫の装甲及び重戦闘用の武器の数々の戦闘プログラムやデータの挿入を終え、体に装着し終えたところで思世からの催促がかかりエレベータを乗り継ぎ下層の琴乃が潜む部屋に入って行く。西洋風の鎧兜に数々の装飾が細かく入っているエネルギー収束刃型兵器を装備している零紫の容姿はまさに聖騎士と呼ぶにふさわしい格好だ。思世の声がアナウンスで聞こえ遂に『改造人間』までもが戦場に繰り出される時が来た。彼の場合は荒神から訓練を受けているため戦闘用のシューズを履いて空中を滑るように進めるため、どこで戦っても有利に運べる。目標は敵の攻撃旗艦『ゴリアテ』……軍艦としては一番普及率の高い物だ。これの数は問わず可能な限り撃墜するという任務だ。

「行つてきます」

「氣い付けやあ！」

「頑張つてね！　剣刃君！」

その時、見送りのために射出口付近まで来ていた二人が目を見つけた。戦闘用のシューズに特注の軽装備エネルギー伝達組織を着けた

厚手の戦闘着を付けた兵士の一人が近くの暗がりから零紫に飛びつくように射出口から零紫の姿が消えるのと一緒に出て行くのがちらっと見えたからだ。

「なあ……。お嬢ちゃん……。今の見えたか？」

「私の名前は君枝です。ええ、『改造人間』って剣刃君以外には？」

「居ないはずやが……」

その答えは有るとすれば二つ。新しい『改造人間』かはたまた昨晚見つけられその存在が未だに世間に知られていない『創世主』である琴乃か。この場合は後者を取って考えるべきだろう。これはあくまでその兵士の独断ではなくちゃんとした命令に基づくものだ。

「おっと……。鈴音 琴乃さん、奇遇だね。なんでこんな空のど真中であ会ったのかなあ？」

「そうね……。そろそろフルネームやめてくれない？ 疲れるし。今回はお墨付きよ。思世総司令官のね」

「なら、俺も何も言わないが邪魔だけはするなよ？」

「さあ、どうかしらね！ アタシの方が強いかもよ！」

そして、その頃の中央棟の管理室では絵藤副司令官に指揮を任せ思世総司令官がセントラルタワーの屋上で大型の荒神と巖磨が設計したそれ用の狙撃銃をかついで立っていた。

「リミットは後三十分か……。荒神急げよ」

敵旗艦のエネルギー砲の攻撃を見事に六角形のシールドを張り弾き返している水無月班のメンバーたちはそれに呼応するように弾き返したあとバリアが消えた瞬間に夢路班の操る側面砲がレーザーと言う名の火を吹いている。砲門はこちらの方が明らかで質はいいそれでも敵は数でそれに向かい打つ。機械や兵器の敵との戦力差は現

在の状況では五分五分だ。味方の攻撃兵が『静岡』の防衛を支援している間に『愛知』を落とす寸法だったのだからこちらも責められ続けるかと言うとそうもいかない。味方には各国の学者が認める天才人と大企業のシステムドクターをする事が出来るシステムエンジニア。そして最強のオタク・ニートと元軍の幹部クラスの三人に経済力を持つ画家兼作戦家が揃い、それぞれの力を使いこなし完全に敵の侵攻を防いでいる。

「敵旗艦が陣を展開！ 鶴翼陣を敷き側面の砲台を破壊するつもりです！」

「わかった……。俺がなんとかするからお前らは落ち着いて自分のなすべきことにだけ目を向ける」

『静岡』に変化が起きたのはその時だった。回遊都市は空と海の両面を要塞防衛に於いての防壁にしている。そのため海中と空中を両方移動でき速度と破壊力が劣らない種類の兵器がひつようになる。荒神が起こした隠密作戦の最初の成果が実り『静岡』の地下に潜ってせめてもの抵抗をしていた兵士たちの生き残りが次々に海面から空中に飛びあがり敵旗艦の下っ腹を付いていく。それとほぼ同時に『静岡』の住民が避難している隔離シェルターをその形態に移行させた状態で海面に射出し先ほどの航空機が数機ずつワイヤーを張り『愛知』に向けて登って行く。だが敵もそれを見逃すはずはなく旗艦からの砲火はそのシェルターに向けられる。

「させるかアアア！」

『静岡』の『改造人間』と思しき影が敵の砲撃に向って槍を突き出し拡散させ、なんとか防いでいる。そこに零紫と琴乃が現れ加勢した。各々の武器を構え二人はくっついたまま一人、空中で戦う少年に近づく。

「お前は！ 剣刃！」

「そう言うお前は斧柄だな……。久しぶりだと懐かしみたいが今は守ることが先だ！ 行くぞ！」

「解ってる！」

槍は近接武器だが『改造人間』の生命エネルギーを凝縮し壁や円錐型のシールドを張って必死に『静岡』を守る。琴乃は一応、思世から二つのハンドガンを渡されていたがまったく使えていない。手がしびれてしまうのか撃つては休み撃つては休みの繰り返しをしている。二人が積極的に壁になれるのに対して琴乃は砲撃などが来ると零紫の後ろに避難する始末だ。

「おい！ 鈴音 琴乃！ かえれ！」

「嫌よ！ 借りを作つたままなんて嫌なの！ それから！ フルネームは止めなさいよ！ 琴乃とか鈴音とかにして！」

そして、『静岡』のセントラルタワーが爆破し中心のビル街が炎上していく。そこから数人の離脱者がこちらに飛んでくるのが見えた。その先頭に居るのは荒神らしい。最初に十名居たメンバーを誰一人として失うことなく離脱したようだ。そこでシエルターを守っている三人を発見し空中で合流して現状を伝えに来ていたのだ。

「これまた大物が来たな。鬼神の荒神、万里眼の思世、風来坊空雅。『愛知』の軍隊が誇る三英雄の内の一に生きている内に会えるなんてな。あとでサインをくれないか？」

「お前は斧柄 矛だな……。最終的な戦線離脱後すぐ『愛知』に行つてその女の子に覚醒治療をしてもらえ。サインはいらなくらい会うことになるぞ。これから……」

「は？ ……それはどういう？」

「あの……荒神さん？ アタシもまだその使い方解らないんだけど……」

「大丈夫だ。そいつを助けたいと思えばいいだけだから」

『静岡』の中心街から広がった火の手がもぬけの空となった居住区にも広がって行く。犠牲になった住民も数知れないがシエルターの中に居る住民は次々に愛知の市長である田徒 細洲の支持で臨時の避難シェルターに列を作り歩いて行き彼らは安全を確保され幾分かの安心感に浸っていた。『愛知』の貿易センタービル最上階の特務機関『ガイア』の管制管理室では近況をうけ前向きにさらに勢いづいた水無月班の防御と夢路班の迎撃により少しずつ敵を押し返し始めた。そして、先ほどの三英雄が遂に動き、それに呼応するかのようにならざるに外で戦闘を行っている編隊や『静岡』の残存兵、加えて防御主体の水無月の別機関までもが攻撃を仕掛け敵の旗艦を次々に撃墜し始めた。

「流石、荒神か。プログラムはあのオタクとか言ってたから少し不安だったけど……、なかなか完成度の高い物を作ったじゃないか」

万里眼の思世。敵の動向を読みそれに合った狙撃を忠実かつ完璧に行う元軍内での最強のスナイパー。荒神と巖磨が本当は夢路の管制システムとリンクさせて作ろうとしていた『自動測量エネルギー射出型スナイパーライフル』を彼のために最大限小型化してチューンしたモデルを使い思世は最初の一発目から敵旗艦の動力炉に打ち込んで撃墜したのだ。

「だけど、ちょっと重いか……これは」

次に風来坊空雅。のらりくらりと戦場を渡り歩く一匹オオカミの傭兵を目指していたはずが、いつの間にか正規軍の大隊長になり軍

の英雄のひとりとして数えられるほどの勇者になっていた。独特のターンや旋回、スピンなどの組み合わせで敵を翻弄し気の向くままに敵を落としていく凄腕のパイロット。幼少期や過去のことは一切不明。

「イイ〜ヤツアホオイイイイイイイイイイ！」

少しふざけ症なのがたまに傷だが。

鬼神の荒神。冷酷無慈悲の殺戮兵器として味方からも恐れられていた程の機械人間。感情が薄く起伏が激しいためうかつにてを出不と殺されるなどと言う噂も流れた。事実、暗殺者としての腕は本物でこれまでに仕留め損ねた要人はおらず破壊工作任務から要人警護まで全てをこなしてきた。数々の戦闘で顔に大きな切り傷を受け左手は義手、他にも数々の死闘の跡があるらしい。いつごろかは不明だが急に女性と付き合い結婚、それも長くは続かず離婚しその頃に軍も引退しいろいろな職を転々とするうちに現在の『ガイア』の技術主任に落ち着いたようだ。

「ぬかりは無い。皆！死ぬなよ！」

「応！」

水無月 鋭牙。温厚で優しい彼も一度ヒートアップするとたちどころに凶暴化する。今回の戦闘では『SEHシールド』と呼ばれるシールドと『第二緊急レベルシールドポッド』を使って空中都市『愛知』に被害が出ないように全力で防御網を張っていた。

「皆！シールドを敵の旗艦の直前に張って！一気に方を付けよう！」

「オオオオ！」

敵の軍基地はユーラシア大陸の沿海部にあり攻撃も可能だ……。しかし、彼らは攻撃をしてくる敵を抑えつけても侵略はしない。そういう主義のようだ。戦局は完全に明白化し敵の戦闘機や旗艦の一部が退避を始めるも未だに過激な思想を持っている敵の将校は攻撃を仕掛けてくる。味方は『静岡』の残存兵を向い入れ迎撃を続けながらも少しづつ撤退を始めていた。

「こちら総司令部の絵藤。荒神及び攻撃人員はこれから敵旗艦の本隊を撃沈してくれ。特に荒神には臨時に攻撃指揮を任せる。」

「了解副主任。これより突撃作戦を開始する。隊長及び作戦コード『鬼神』の指揮系統によりO G R E隊及び普通将兵の生き残りは全人員保護のため帰還させる。攻撃メンバーは『改造人間』コード『零』、コード『？』、コード『創』の攻撃作戦ルートを確立これより侵攻する」

荒神の攻撃部隊編成によって動かされているのは『改造人間』の二人と創世主及び普通人間養成開発機構作成個体『第48号』である荒神の四人で行動する。因みに他にも攻撃メンバーは居るが援護射撃や攪乱が目的だ。

「行くぞ。俺がおとりになる。三人は絶対に離れるなよ……。離れた時点で回避しきれずに死ぬだろう」

「荒神さん……そんな不吉なこと言わないでくださいよ。ホントになつたらどうするつもりですか」

「だが、否定もできない」

「ああ、鈴音 琴乃は俺たちの後ろに居てくれよ」

「あ……。うん。解ってるわよ」

敵の旗艦の種類は四種。機動攻撃用の中型攻撃艦、戦闘機の格納

射出が目的の空母型、防衛型旗艦、旗艦収容型超大型旗艦が鶴翼の陣形と機動型の巨大な陣形を駆使し防御砲撃を波状に行いながら主要艦のみを後退させはじめている。そして荒神が組んだ作戦は恐ろしく卑怯なものだ。簡単には敵の操縦士や要人を優先的に殺傷し機動力の落ちた敵旗艦に本部からの掃射をかけるのだ。

「智基……。準備はできたか？」

「ああ、やっといたよ」

「鋭牙は？」

「こつちも準備出来たよ。合図とともにシールドを最高純度で展開する」

「作戦どおり動いてくれ。合図は無線機を使用して俺達にしかな解らない『あのコード』を伝える。後は手筈どおりだ」

味方の戦闘機の数が増え、帰還していくため外に出ている物は減っていく。それとともに本部への攻撃が再び激しさを増した。だが敵の最前列に配置されている旗艦は次々に思世の容赦ない狙撃で撃沈していく。加え空雅の親衛隊の『黒燕』隊が中距離にいる敵の防御艦に向って新しい兵器を撃ち込み敵のシールドを破り一機、また一機と落としていく。その隙をついて一人がシユーズのエンジンを全開にして敵の旗艦収容型超大型旗艦に潜入していく。言うまでもなく荒神だ。

「巖……。オペレーションシステムを機動してくれ、そのあとは今から送る血液サンプルデータと俺と夢路で作っておいた『改造人間補正用プログラム』をリンクさせてくれ。後は少々、荒療治になりそうだから俺の『パーソナルバイオログ』も展開しておいてくれよ？」

「アンタ死ぬ気かいな。まあ、ワイからすれば口うるさい上司が居なくなってくれるなら嬉しいこと限りないんやが……って冗談や。」

「アンタがおらんようになったらあの子をどうする気やねん。わいは面倒見きれんで？」

「死にはしないつもりさ。ただ、部屋の右奥にあるクローンメイカーを機動させといてくれ」

「アンタ俺のこと何やと思うとんの？ 雑用かかりやないんやけど」

「大丈夫だ。一応はそれ以上のランクだからよお。ある意味では。」

『オタク・ニート』というろくでなしだからな」

その頃、三人は中央に構え敵の攻撃旗艦を撃墜していた。零紫は荒神の指示で本部から『改造人間』用の武器を空雅の兵士に運ばせたあと全て各々に配り自分も感触を確かめながら振ったりエネルギーを注入している。

「おい、この武器で本当にあの巨大な戦艦を撃墜できるのか？ どうみても近接戦闘用の武器だが……」

「大丈夫だ。今見せてやるよ、我らが『ガイア』の技術屋たちの成果をな」

零紫が身の丈ほどある大きな剣を構え金色のエネルギーを集中させていく。極限とまではいかないものかなりの量が注入され見た目でわかるほど強力になっている。

「すごいぞ！ シンクロ率がどんどん上がってる」

「作ったかいがあつたもんだな。智基」

「ああ」

零紫の剣から光の孤が放たれ二機の旗艦がその斬撃型の光によって真っ二つになり落ちていく。降下途中に爆破し軽い爆風を受け髪をなびかせながら零紫が向き直る。

「できただろ？ おっと、通信だ」

「こちら中央ラボ。矛つちゆう坊主がそこにおるか？」

「こちらコード？」。矛は俺です。どうかしましたか？」

「おう……。単純明快に言えばお前にオペレーションを合わせるからその通りにつごきや」

「了解しました」

荒神の潜入作戦中空雅隊が側面爆撃を開始しさらに潜入作戦の速度を上げた。しかし、それは敵の警戒を過剰に上げる結果となり荒神の侵攻はさらに難易度を上げたようだ。旗艦内に居る衛兵の動きが活発になっている。

「荒神？ 大丈夫か？」

空雅の音声無線を途中で切断し自分の無線機を握り潰してしまった。そして小型のチップを付けているゴーグルに差し込み閉まっているシエルターに持っているレーザーナイフで刃を突きたてて切り、次々に突破しながら中央管制室に向っていく。

『空雅……。音声メッセージは避けると言わなかったか？』

『すまん……。だがすでに一つ問題が起きてる。傍受した無線の内容だとお前の侵入が敵に知られてる。敵の機動攻撃兵がそっちに向ってるらしい。作戦を中断し爆破させて帰還しろ。『改造人間』なら熱線にも耐えられるがお前は一部を除いては普通の人間なんだ早く帰還しろ。そうしないと今度こそ死ぬぞ？』

『大丈夫だ……。死にはしない。あの時だってそうだったろう……。』

要塞の外の戦闘はさらに激化。銃撃すらままならなかった琴乃も徐々に戦闘に慣れてきたのか支給された銃で敵の攻撃を流しながら攻撃し続けている。当たるか当たらないかは別にして彼女もそれな

りに場の空気に慣れて来たように見える。矛は名前の通りに長めの槍や長刀などの武器を支給されていてその中でも気に入らしい矛を握り本気で敵の旗艦の群れの中央に投げ込んだ。それが未だに荒神が潜入している旗艦に矛も予想だにできなかった一撃として当たってしまったコックピットらしき場所を貫いた。

「ねえ……。その軌道まずくない？ あっちにはさ、未だ荒神さんが居るはずの旗艦が居るし」

「おいおい。マジかよ」

「すまん。ホントに……。荒神さんの回線は……。切られてる！」

「ヤバくない？」

すぐに攻撃体勢を崩した敵の様子を見ていた空雅の部下から連絡が入り帰還を告げると次々に黒光りする戦闘機が帰還を始めていた。零紫が状況を察して二人に帰還を促しすぐに荒神が未だに潜入している旗艦に向った。

「確かに空雅の言うとおりか。ここは爆薬をセットして退避するべきだな。最悪の結果を想定して『E ポッド』もある。回避作戦を開始しよう」

その時、敵の機動兵団が通路先からマシンガンで銃撃してくる。荒神は左手に零紫達のようなオーラをまとい背後の隔壁を掴んで敵との間に押し込み時間稼ぎをした。右手でエネルギー収束サーベルを握り先程の隔壁に突き立て直径十センチほどの穴を空けビー玉程の球体を空けた穴へ投げ込み更にもう一枚、隔壁を左手で掴み隔壁と同じ材質の金属壁とともにひっぺがえし自分の前に防御壁として張った。敵の悲痛な叫びの後に熱線が吹き荒れ隔壁を荒神の方向に押し返さんと怒り狂い猛威を奮っている。

「っ……。敵が多すぎる。限界があるか……」

「荒神さん！ なんとか間に合った」

「爆薬は仕込みました？」

「いや、敵の反撃力と情報収集能力を甘く見過ぎていた。お前の力を借りたい」

「俺しかいないでしょ？ 周りに」

零紫の剣で床、壁、機械を無差別に切り崩し旗艦の中央にあるエンジンルームに近づいていく。そこに到達するとすぐに予備の通信回線を開き狙撃を続ける思世と連絡をとり敵旗艦破壊作戦を開始した。

「夢路、水無月班はあらかじめ荒神との手筈通りに作戦を実行しろ。あとは俺と絵藤の予備プログラムサーバからアクセスして荒神と『零』の退避経路を取る」

『了解！』

爆薬のセットを完了し次々に階をさかのぼって行く二人。零紫が前を滑るように動き敵の攻撃を受け流しながらハッチに向う。

「荒神さん！ アンタよくこの数相手に生きてましたね……」

「俺も一応そういう類の訓練を積んできたんだからな。お前も同等のことしてるんだぜ？」

次の段階を踏む中で敵の砲撃兵の迎撃をかわしながら進むが流石に数の差であろう……。零紫にも疲労が見えて来た。荒神と零紫が入れ替わり荒神のサーベルで近距離に詰め寄り抵抗する間を与えずに切り刻んでいく。断末魔の叫びは爆音によって掻き消されて誰にも聞こえない。先程の矛の攻撃がついに表だった被害を出し始めたのだ。

「荒神！ まずいぞ急いでくれ！ 敵の旗艦が一世掃射を始める気だ」

「荒神さん！」

「わかつてる……。外の矛と琴乃さんに連絡を取ってくれ。すぐに行けるようにな。それまでは俺が時間を稼ぐ。三分間だ」

夢路、水無月の班の準備は既にエンターキーを弾くのみで思世の作った作戦が発動されるのを待っていた。思世本人は屋上でライフルを使って弾を撃ち込み小型の旗艦を落としていく。

「荒神！ 急げ！」

零紫の通信中、荒神の左腕が変形し中から機械のパーツが見えて来た。零紫と同じ金色の光を放ちすぐに防御態勢を固め迎撃する。

「剣刃？ どうしたのよ！」

「荒神さんと合流した。これから脱出する迎えを頼みたい」

「わかった。俺がいこう」

遂に旗艦の滑走路に出て滑空している。荒神の腕は銃撃を受けほとんど再起不能になっていたが顔に出さずに零紫とともに滑走路を抜け空に飛び出た。思世がそれを合図にコードを無線で読み上げた。

『21070213!』

「夢路君！ 行くよ！」

「ホイサ！」

『作戦実行!』

巨大なシールドを近くに一枚張り二枚目を敵の旗艦目前に張る。シールドの軟度を一気に上げ夢路が旧式タイプのエネルギー砲を撃ち込みシールドの中心に当て六角錐を形成した。数秒で形が綺麗に形成され見事な六角錐になっていく。

「荒神さん！ 早く！」

「任せろ！」

水無月が再びシールドの軟度を下げ硬化させていくとそれを待っていたかのようにそこへ持続式のレーザー砲を撃ち込み六角錐を敵の旗艦軍にぶつけ次々に撃沈させていった。その後、荒神と零紫の居た旗艦が爆炎をあげ撃沈。『ガイア』本部では夢路と水無月が八イタツチをし他の隊員の中にも安堵する者、抱き合い喜ぶもの、恐怖がぶり返し腰を抜かす者などそれぞれの反応を見せた。

「どうだった？ 荒神、久しぶりの戦闘は？」

「はぁ……。もう、こりこりだね」

戦地から帰還した荒神を思世が出迎え労いの言葉をかけながら笑っている。

「今回もお手柄だったな？ どうせ今回もお前のことだからデータ取ってたんだろ？」

「思……。お前こそただけ図って俺をこの戦闘に参加させたと思ってる？ これでお会い子だ。それから言わせてもらうが、今回の負傷や兵器の管理費は全部！ 経費から落とさせてもらうからな」
「それくらい認めてやるから安心しろ」

市長の田徒との対面を済ませ管理施設に戻っている思世と防具を外しつつ機械の整備をしている荒神が笑い話を始めている。そこに

同期のメンバーが集まり始め談笑の輪が広がって行く。戦争の直後とは思えない前向きさに少し驚きが感じられるが彼らにも流儀があるそれをくんで今回は触れないでおこう。

「お前の腕も落ちて無いよな？ 思？」

「燕さんもまつたくなまつてませんがねえ？」

「そう言う荒神はその腕どうした？ 遂に自分で改造を始めたか？」

軍関係の三人が別々の体勢で座り『ガイア』の事務所内でお互いの今についてつつきあう。そこに文官組が加わり話の枠がさらに広がってゆく。

「荒神君！ ぶじでよかった」

「鋭牙……。こいつは殺されても死ぬ魂じゃないぞ？」

「違ういな……」

「絵藤……お前さらつとひどいこと言った？」

「そうか？ ハハハハハハッ！」

『ハハハハハハッ！』

戦闘によるセントラルシティ及び地下本部、周辺居住区には被害はまったく出ず今回の作戦で主任位以上のメンバーは全員昇格し給料とボーナスが支給された。他にも『静岡』の戦闘員から数人の功績者をピックアップし上官や副官、部隊長などに起用する。かわいいそんな中間管理の夢路や水無月、絵藤などの文官、戦闘において体力、精神などに疲労を持つ軍関係者、負傷者などに一日の臨時休暇が与えられた。家族のもとに帰る者、趣味のために奔走する者、遅れた学業を取り返そうとする者、仕事を遂行する者。各々の目的に応じてバラバラに行動していく。かいつまんで動向を追っていく。

「パパ！ お帰りい！」

「智基おじさん。お帰りなさい」

「ぐお！ 『我が子ながらあつ晴れだ……』 ガクツ……」

夢路 智基が一カ月ぶりに自宅に帰宅し長男、恭平 長女の公江、吉乃。この三人の無邪気な攻撃をもらにうけ見事にひっくり返った。そのまま良心からか両手に持っていった荷物を運んでいく息子たちを朗らかな表情を見ている。椅子に座りすぐに子供たちの猛襲に合うかわいそうな夢路父であった。

「あ。鋭君、お帰り……あのね。ちょっと言わなくちゃいけない事があるんだけどね」

「うん？」

「この子のことなんだけど」

水無月 鋭牙の婚約者の浜崎 奈々代、職業『ガイア』起用人員看護兼事務員の一人。優しく気だてが良いが実は料理が苦手。その人が勢いで病院から連れて来てしまったのが後に状態が判明するであろう少女だ。持ち物は背負っていた弓と少しの金、他にも少々小物があったが本人の詳細を表すような物は無い。まったく身の上は解らないがひろってきてしまったものは仕方ないこれから二人のもとで預かるようだ。

「っ！ 痛えよ！」

「我慢せえや！ アンタどんだけ馬鹿なことしたかわかっとなのか？ どんだけ心配したことか……」

「知るか……」

「知りや！」

義手の代わりに新しい機械のパーツで組み上げたぎこちない作りの物を彼の元々義手だった左腕に接続したのだ。本人はほっておく

つもりだったのだが巖磨と零紫が押さえつけ無理やり組み上げたためかなり歪で形が悪い。現在の荒神の状態は四人の子持ちと化しかなり体力的にキツイ生活を始めたようだ。長男、二トの巖磨 角は臨時休日を楽しんでいる。父親？ のような荒神のシエルターから地上の個室を与えられそちらに移り住んだ。二男、『改造人間』の剣刃 零紫は彼は荒神の本当の姿を知り臨時休日のその日から本当の父親のように慕い『父さん』と敬意を持って呼ぶようになっていた。長女の鈴音 美琴は養いの親だとしても新たな家族の出会いを本当に喜んでいる。二女である鈴音 琴乃は零紫と住むようになってたため少しつつけんしているが荒神の事は嫌ってはいないようだ。以上の家族？ が荒神の所有しているシエルターや新たな家に住み着き落ち着いている。元鈴音家の家の地下から直接シエルターに繋がる通路を作り始めた荒神の仕事は絶えないが同期のメンバーで酒盛りする時間なども多くなってきた。

「只今……」

「お帰り。親父」

「……………言つとくがその呼び方をやめろ。俺はまだ26歳で16の子供を持てるほど老けぢやない」

「いいじゃないですか」

「良くない。矛……。一応、お前は俺の部下扱いなんだからな。荒神はともかく俺は思世さんと呼べ」

「嫌ですよ。親父の方がいいです。語呂が」

あまり人に慣れ合わない二人、思世 貴登と斧柄 矛の日常の挨拶のような会話であった。下宿先のペアがこの二人になった理由は至って簡単。他に引きとれるメンバーが居なかったのだ。荒神は明らかに無理。絵藤はすでに引き取った。水無月も同じく。夢路は自分の子供で手一杯。空雅も無理があるらしい。

「皇兄！」

「どうかしたか？」

「あれとつて！」

大竹宅での日常はこの連鎖によって成り立っている。絵藤の息子の雅生の遊び相手や大竹自身の助手として最近『改造人間』 幼育所を出た夜井兄妹が下宿している。双子の兄の皇太と妹の紫神の凸凹兄妹は見ていて面白い185センチを超える兄と142センチでかなり小柄な妹、最新型の『改造人間』で扱いが難しく思世の指揮力とこの人員の優秀さなどから『愛知』におしつけられた形だが優しい絵藤一家の接し方に慣れこの街の住人としても慣れ始めたようだ。

この様に臨時休暇を境に新たな仲間も増えさらに賑やかになった『ガイア』本部。思世総司令官やこの街の市長である田徒などこの土地で尽力している者たちとともに空中都市愛知『もこれからの平和のため進化をさせ始めていくのだった。

BIRTHDAY OF GAEA

第二次緊張崩壊戦争の引き金となったこの空中要塞『愛知』の防衛戦は世界各国のこの様な都市に衝撃を与え軍事的緊張を一気に高めた。未だに強い軍と信仰を持つ『創世主』軍の残等による奇襲を疑うユーラシア『大海底都市群島』に火急の報告が舞い込み再び戦火は広がりを見せている。『愛知』は交戦後のため軍事的被害の甚大さと『静岡』の住民の保護という人道的行動を評価され現在、謎の大軍団と交戦中の『海底小群島型都市』ハワイへの援軍招集は免れた。一日の臨時休暇を受け家族のもとに帰った『ガイア』の面々は復興と改革、そして『静岡』からの資源授受を目的とした採掘出張など個人個人で業務は異なるが多忙な日々を送っている。

「行つてきます」

「待ちなさいよ！ あ、行つてきます！」

綺麗に区画されているこの『愛知』の都市バランス自体を変えるプランを指導中の荒神。現在は思世の指示で成り行きで取った家庭保護士の資格を利用し鈴音姉妹を書類上の家族として保護している。零紫もついでに鈴音家宅に引越させ荒神とのモグラ生活を解消した。もう一人、保護を受けていた巖磨は今回の功績でニートから『ガイア』の機械プログラム主任として起用され高額の給料が配給されるようになったようだ。その後は荒神の紹介と調査の任務を併用した関係で一人暮らしを始めた。

「お父さん！ アタシが遅刻しちゃうよ！」

「まあ待て、今行く。それから俺と美琴が七歳しか離れていないこと解ってるか？」

「そんなことはどうでもいいよ。アタシ達としてはちゃんとした家

族が出来ただけでもうれしいの。突っ張ってる琴乃も多分零紫君と一緒に生活できてうれしいんだと思うもの」

荒神のバイクがエンジンを唸らせ猛スピードで一戸建ての普通の家のガレージを出て中心のセンターシティの方向に向って走って行く。中心のセンタービル付近には巨大な施設が多く立っているのは解りきっているとは思うがその周りを囲むようにして建ち並ぶ居住区のことには『ガイア』の面々にはあまり知られていない。そこで今回の戦闘で昇進し地理管理官の職を持つことになった荒神は彼が発明した数々の機材と『静岡』の技術者たちを集めこの居住区を機械化及び改修、建築する。そして巖磨のレポートと水無月の新しい職である教育部の主任や絵藤のデザイン、夢路の商工業規格を噛みあわせ街を造り変えているのだ。

「父さんの仕事はかなりきついな。このドーナツ型で貧富の差が激しく軍の機関や工業の騒音、治安維持の対策をしなくてはいけないんだからな」

「うん、アタシとしてはアンタが兄妹になったことの方がビックリよ。お父さんがアタシ達を保護してくれたのはうれしかったけどなんでアンタまで……」

「俺はまだ軍の管轄だからなちょっと違うが彼のことを信頼できる人として……」

「アンタ正直まどろっこしいのよ。アンタが一度、死に掛ける前に言った『面白い』ってつまりアタシの事が好きってことでしょ？」

「それについてはよく解らないんだよ。俺は幼少期から改造人間として育てられたから人間らしい感情はあんまりないんだ。だから荒神 琴乃がそう言うなら正しいのかもな」

「バツ馬鹿！ 何マジになってんのよ。……まあ、良いわ。今回はその話はなし。それから今日もあのビル超えるのは無しよ？」

零紫と琴乃は学校に向っている。前回のような荒療治は絶対にしないように荒神に止められた零紫と琴乃は荒神が最初に手掛けた仕事の空中を連結して走るエアトレインのレール沿いに滑って行く。途中で上層の普通車両交通域の方から声が聞こえ上を見上げた二人に姉の美琴が手を振っている。そのままバイクは貿易センタービルに入り姉の美琴はその構内にある『愛知第一研究過程大学』に向って言った荒神は言うまでも無く彼の仕事をするためにそのまま地下にある『ガイア』本部に向って行った。

「零紫。早くしなさいよ」

「いいだろう……。別に授業の一回ぐらいいさ」

「良くない」

「あのさ、言っとくけどまだ授業開始の一時間前だぞ？ 解ってるか？」

その頃、水無月は自宅から電車で学校に向っていた。婚約者の奈々代は夜勤で病院泊りが多い。彼は『ガイア』の文官の他にも教師という顔があり昼間はそちらに向っているのだ。座席に座り最新式に荒神がチューンを加えた小型のステレオで音楽を聴いている。込んでくるはずの時間帯だが最近はいろいろな意味で忙しい人が多くかなりすいている。自宅から貿易センタービルまでをエアトレインで移動しその後は徒歩で向う。そこに赤い最新式の磁気浮遊車が横付けし水無月を乗せた。

「助かったよ。夢路君」

「いいよ。しっかし、ひどい目にあつたよ。修羅の開拓、改修、建築の伝票整理とこの前の戦闘での被害額は相当やばいぞ。戦闘機が21機落とされて砲台のエネルギーとバリアのエネルギーを補うための媒体の使用料。半端なもんじゃない。しかもこれからさらにかさむから嫌だよな。ま、食糧があるだけいいか……。あの薄暗い時

代を生き抜いた俺たちにしか言えないことだけだな」

「そうだね。だけど今回の戦闘で見直された軍備のおかげでこれからはもつと楽に戦闘ができるようになるし新しい技術も増えたからね」

「違ういな。どうする？ 今日も一杯行くか？」

「そうするよ」

水無月は校舎に入っ行って行き夢路は車を走らせ貿易センタービルの隣に敷設された工場に入っ行く。巨大な工場の奥にある円柱型の本社に入りノルマを二時間ほどできりあげすぐに乗っ来て来た車に乗り込み『ガイア』の地下本部に車ごと降りて行く。巨大な地下の研究施設を下りていくと建設中の施設の概要が見えてくる。荒神が着工しているのは地上の居住区以外にも数か所ありここもそのうちの一つだ。夢路はその資料設定やデータ管理なども行っている。水無月は物理工学の研究と事務に追われているものの夢路の事務を手伝うだけの余裕はまだあるようでそこまでやつれていない。

「まったく、荒神と巖磨に最速で作らせているハイパーコンピューターができるまでは手作業で仕訳とわな」

「仕方ないんだ。俺も手伝ってるだけ良いと思え……。絵藤」

「わかってるよ。だがこれだけあると流石につらいぞ」

「馬鹿を言っな。荒神や夢路はこれが日常だからな。俺達が楽すぎるだけだ」

巖磨、夢路と荒神の三人はこの空中都市『愛知』の防衛を担う組織である『ガイア』の中枢の構成をなし始めている。今は思世の指示で新しい機材を使い居住区、中心地区の移動用の機材、生活水準向上の環境設備、『ガイア』の本部。全てを同時に改築、改修しているためかなり速度は早いもののその分、彼らの疲労は大きい。

『カーアーン……カーンジジジ』

「それにしても大変だな父さんは……」

「うん、ホントは現場指揮だけすればいいくらいの地位のはずなのにね」

「しょうがないと思うぞ？ あの人はそういう人なのさ」

零紫と琴乃のクラスにさらに二人の転校生が入って来た。他にも中等部に二人。その二人は双子の兄妹で夜井と言っらしい。細身で大柄な兄の皇太、小柄でかわいらしい顔立ちの紫神の二人だ。そして高等部の零紫のクラスにはおなじみのとっつきにくくてドジな矛、最後に無口で何を考えているか解らない名前は星弓 篠という長身の少女で華奢かつ比較的長身、水無月の所に居る正体不明の少女だ。

「おい。矛、お前もそろそろ研究所に来いよ」

「馬鹿を言っな。俺はお前ら『ガイア』とつるむ気はない」

「貴方達……『改造人間』？」

「お前は星弓 篠。その言葉が出るっことはお前が『弑』だな」

「これで残る『改造人間』……別名『ログ』は一人。創世主の子孫である超人類『アダム』と『イヴ』から生まれた最高の素体を持っている人類」

「ストップ。そこからは機密の内容だ」

「ここには創世主も……グハッ！」

「馬鹿やろう。機密っって言ってるだろ」

授業は差し支えなく過ぎる。『改造人間』の暴走を警戒して零紫に持たせている鎮静剤を使う必要は今の内はないようだ。地上を副官に預け現在、荒神が着工しているのは地下の施設だ。『ガイア』の本部と昇進した空雅が率いる空軍の本隊の格納庫及び滑走路を地下におさめ最初に完成させていく。その施設の仕上げとして『静岡』

から技術提供を受け海空両用の戦闘機の水路を作りそこに水とそれを消費しないためのバリアを作動させ『愛知』の底面の隔壁の作動を確認しそこを閉めているところだ。

「今、真下に居るのか」

「ああ、たぶんな。アイツが今、真下で軍の施設と結合させてる轟音が響てる。それにもう上がって来てるはずだ。今、俺たちが作ってるデザインと組織体のプランを取りに来るはずだしな。おっ……来たぞ」

金属と金属の触れ合うよく響く音が聞こえてくる。その音が止まりシステムラボの入口が開いた。絵藤の予想通り工場の親父のようになつなぎ姿の荒神が現れそのまま絵藤が差し出すチップを受け取り作り替えた義手に差し込み絵藤に話しかけた。

「サンキュー……。絵藤」

「お前、休めよ。二日間寝てないだろ？」

「それは皆同じだ」

「俺は寝たい」

「黙れ、智基」

「同意」

「え？ ちょっと待って絵藤？」

絵藤は実は美術家としてだけではなく裏の世界では最強のボクサーとして輝いていた時代があったらしい。事務室にこもるのが飽きたらしく荒神とともに扉をくぐり大柄で筋肉質な体を少しかがみ自動ドアが閉じるともう一度顔を出した。

「おっと、夢路は上がりでいいぞ」

「あ。おう」

街の内郭から順に硬化合金で作られた建物を配置換えしていくプランが完成していた。『愛知』は攻撃用巨大要塞として設計されており建物は地中に格納することも可能だ。巨大なタワー群の入れ替えを行い修繕、新築を繰り返しさらに新しい公共機関を加えていくのだ。教育機関、治安維持機関、環境維持機関のような各所必要機関など住民の希望や夢路、思世、絵藤、水無月、荒神などの文官や機械端が模索し続けている用途が実用化されて行く。特に水無月の教育機関の案件は急務とされ地区の割り振りも強化されドーナツ型の居住区をさらに東西南北に区切り小等部、中等部、高等部、大学研究部を各四区に置く。次に治安の維持は荒神と空雅の軍と協力し治安維持隊を結成し警察部隊として形を作り上げる。他にも軍の中から訓練も兼ねているような機関の代用を始めている。作成作業は機械を使用し夜も続けられている。荒神と絵藤は途中で別れそれぞれの行くべき場所に向った。

「待ちなさいよ！」

「待つてたらその手に持つてる金属の棒で殴るきだろ？ 荒神 琴乃」

「当たり前よ！」

琴乃のシューズは荒神に改造してもらい零紫と同じモデルに引けを取らないスピードが出るようになってる。その後ろを見なれた二人が追いかけながら話していた。学校の終業後に少し零紫が琴乃をからかったことが今の状況に繋がった理由だ。

「まったくよくやるよあの二人は」

「……元気なら良いんじゃないですか？」

ビルの壁面をイオン吸着グローブで吸着しながら滑空していく。

今、四人が向っているのは『ガイア』の中央ラボ、荒神と思世の招集で呼ばれている。この空中要塞『愛知』には一気に三人の『改造人間』が集まった。この後『ログ』と呼ばれるこのメンバーは現在の兵器観点から見ても最強の部類に加えることが出来る種類の生物兵器。彼らがここに集まったことで世界の目はこの『愛知』に集まっている。そして先日の戦争の関係で各地に動乱が広がりつつある。丁度、十二年前に突然起きた世界を巻き込み母なる大地に癒えることのない大きな傷を残した緊張崩壊戦争の終結期。それと同じ広がり方を見せているのだ。思世が警戒するのも無理はない。四人や他のメンバーの記憶ではその当時に戦闘に終止符を打ったのは一人の『ログ』の犠牲……その『ログ』と同じ結果をたどらずに彼らを生き残らせるため彼らにも万全の態勢を敷かせるつもりなのだ。もはや戦争は回避できない。それならどのような結果になると向かい合っていることとしているのだ。そして、四人が荒神と巖磨、思世が待つ中央ラボに到着した。

「父さん。今回の要件は？」

「お前達には悪いがこれから戦闘訓練を受けつつこれから起こるであろう『第二次緊張崩壊戦争』に備える」

「という事は『静岡』が破壊され保護された俺も……」

「素性の解らない私も……」

「指揮管制主任の俺が手続きをしておいた。お前達は以前からだか『ガイア』の特務兵だ。言うておくがこれからは零紫は今までおりだが他は後に知らせがあるとおり各々に指示されるであろう上官の下について各種任務についてもらう。そこで巖磨主任と荒神主任から武器を受け取っておくように」

「解りました」

「了解」

「フンッ」

「……………アタシも？」

「……………はい」

思世が円形の機材が所せましと並ぶ部屋を出て行った。荒神が高機能ハイパーグラスを上に上げ四人に視線を戻した。

「お父さん……………アタシも？」

「悪いがそうなる。お前の素性は隠し通す必要があるからな。で、これからは二人一組で任務を遂行してもらおう訓練に関しては後からだ。まずは武器に関して説明しておく」

巖磨が台車に乗せた武器の数々を固定機から外していく。その途中に見なれない男女一組が荒神に詫びながらラボに入って来た。一人は小柄で鮮やかな紫の長髪の女の子でもう一人は細身で大柄な少年だ。二人とも四人と同じ制服でこの二人の腕章を見ると中等部の腕章だ。

「あ、皆さん初めまして。夜井 皇太です。こっちは妹の……………」

「紫神よ。言っとくけどアタシ達は双子で14歳なんだからね」

荒神が手を叩き注目しろとも言いたげな顔をして夜井兄妹を加えた六人を集めた。最初にとったのは大きめの剣。

「零紫、これがお前の剣だ。巖磨にプログラムチューンしてもらって可変にも対応した新しい武器だ。これは使わなくてはよくわからないはずだ」

「解りました」

次に琴乃に手渡したのは黒い金属の武器だった。形状から見ると銃らしい。

「重！」

「我慢しろ。これ以上はもうどうにもできない。簡易レーザーガンとほれ追加だ」

「フエツ！」

「その中にジョイント用のパーツがある。そいつ等を利用して近中、遠、拡散、収束、散弾、持続を使い分ける」

「わかった」

三人目は矛。長い袋に包まれた武器を投げて渡した。

「おつと……これは？」

「そいつはお前の細胞を組み込んで作った。生きた武器だ、上手く使えよ」

「あ、おつ」

身構えている篠に向って荒神が手渡したのは長身の篠ですら小さく見える大弓と琴乃と同じように袋が渡されしげしげと中を覗き込んでいる。

「お前には持ってた弓を改造したそいつと俺が作った特殊な箇所手弓や折り畳み短弓の類がある。まあ、上手く使えとしか言いようがない」

「了解しました。主任」

待ち切れなかったらしい紫神が特殊な加工のされたトンファーを握ったが荒神に取り上げられ不平を吐いた。

「それ私のじゃないのー？」

「お前のはこっちだ。因みにそのトンファーは皇太のだからな」

「その大きいやつ？」

「そう、お前の力に合わせて大ぶりにした可変式のアックスだ。つ

いでに言うと皇太にはこの袋に入ってる火器とそのトンファーが武器。これで行きわたったな……訓練はカリキュラムごとに教官が違うから気を付けるよ」

それぞれ返事をし思い思いに武器を触っている。剣、矛、弓、大斧、小銃、トンファー、個性豊かな武器の数々にみな目を輝かせている。荒神が再び手を叩き解散を告げ矛、篠、皇太、紫神に『ガイア』の身分証明書を手渡した。そのあとは零紫は荒神、琴乃と家に向う。夜井兄妹は荒神にメモを受け取り巖磨の案内で中央司令部にいたる絵籐のもとに向った。残りの二人も荒神にメモをわたされ基地内を散策ついでに思世と水無月を訪ねに歩いて行く。この『ガイア』本部は『愛知』の科学の粋を集めて設立され簡単に改修できるように設計されていて今回はそれを利用して改修しているようだ。上の街も同様に簡単に改修できるが今回はブロック自体を変形させて改修工事をしているため地上はそれほど早く復興はしていない。靴音と口げんかをする声が響き三人が廊下を歩いて行く。筋肉質で小柄な荒神に続き細身で標準身長で零紫が、その斜め後ろにこれも女子の標準身長で琴乃が続く。現在の時刻は夕方六時。空中に浮いているこの都市は日がくれるのも早い。センタービルの食堂で待たせている美琴を迎えに行くためエレベータを使って上に上がる。その間もずっと口げんかをしている二人。

「なんでもいいけどさ、アンタはこんな華奢な女の子が重い荷物を持ってるのに持とうとか思わないわけ？」

「……いや、持ってるなら良いんじゃないか？」

「そういうことじゃないでしょ！」

「うるさいぞ。荒神 琴乃」

「キィィィ」

「耳が痛いから金属がされるような声を出すな。荒神 琴乃」

「何度だって言ってるわよ」

荒神が振り返り零紫の頭に拳骨を喰らわせ同時に琴乃にも喧嘩を止めるように言葉を強めて言った。

「お前らはホントに十六なのか？特に零紫は『ログ』の伝達意識の関係で感情が薄いのは解るが相手は女の子だぞ？琴乃も向きになるな。お前らは書類上だが兄妹だから喧嘩の一つもするのは解る。だが、公共施設でデカイ声で叫ぶるのは憤怒した大人と駄々こねる子供だけだ。人さまへの迷惑を考えて行動するように。一応お前らも『ガイア』の一員でパートナーなんだからな」

「痛え……。解ったよ」

「ごめんなさい……」

「わかればよろしい。姉ちゃんがファミレスで待ってるからな。今日の晩飯はそこでとろう」

場面変わり基地内では巖磨と夜井兄妹が話している。中央司令部への廊下はかなり整備されベルトコンベアのような形態になっていて歩かなくても進んでいく。皇太の肩の上に紫神が座り足をぶらつかせながら鼻歌交じりに天井を見たり分岐点の装置を珍しそうにのぞいている。巖磨は先ほどの武器を乗せていた台車のとってを持って皇太に基地の説明をしているようだ。

「ここの基地はけっこう新しいんねんで。第一次緊張崩壊戦争のあと一番最初に作り替えられて以来数年に一度の割合で改修されてるみたいやからもう」

「そのようですね。見たところこの先にはこの『愛知』のシステムを制御する中枢システムのマザーブースがあるようですね」

「おつ、ご明答。そや、俺も成りあがり者さかい最近までは荒神っちゅう型物のパシリでニートやったんやがな、この前の戦闘の功績で起用されて……夢路はんっちゅうプログラムエンジニアとさつき

の荒神はんの複合管轄になつとるそのシステム基盤管理をするところの副監理官になつたんや」

「おお、おめでとうございます。この先に司令部があるんですね？」

「それも当たりや。俺はその奥の『ログアームセットシステム』の管理室に行くさかいここでお別れや。絵藤はんによるしゅうな」

「ありがとうございます」

「ねえ、巖さんの名前は？」

「君は確か紫神ちゃんやったかな？　ワイのアンダーネーム角や」

「角か……決めた！　巖さんは今度からツノヤンね」

「ツノヤン……。おお、ふざけとるがなかなかどうしてしっくりきよる。おおきにな紫神ちゃん」

「うん、じゃあね！」

巖磨はさらにその奥に台車を押しながら進んでいく。流石に部屋の前にたどり着くとベルトコンベアは無いようだ。司令部に付くと絵藤が丁度出てくるところだった。

「皇太と紫神か。そつちは意外と速かつたな」

「はい、荒神さんの説明が簡潔でしたので」

「うん、正しくは必要最低限しか言わなくて面白みも何もなかったけど……」

「荒神らしいな。帰ろうか」

「はい」

「うん」

そのほとんど対極にある文官達が多く居るパーソナルステーション。書類整理などをするために文官が集まってくる多機能ブースだ。そこには既に人がほとんどおらず二つほどパソコンの画面が光っているブースがある。そこには水無月と夢路が居るようだ。思世からまわされてくる膨大な量の始末書、伝票、システムバグの改良要請、

他いろいろをすり鉢でつぶすように終わらせているのだ。そこに篠が入り入口で止まった。矛は構わず二人のもとに行き思世の居場所を聞いた。

「お仕事すみません。親……思世主任はどちらに」

「ああ、鬼司令官なら多分、書齋に居るよ。ここをまっすぐ行っつきあたりを右に曲がって一番奥まで行けばすぐわかるよ」

「ありがとうございます。それから篠が下宿してるのはどちらのお宅でしょうか？」

「あ……。俺だけだ」

「水無月さん？ ですね。入口で待ってるようなので終わり次第声をかけて上げてください」

「ああ、解った」

ドジな矛の本領を發揮しとなりのパソコンのコードに足を引っかけ転んだようだ。夢路が馬鹿笑いをし水無月もクスクス笑っている。篠は結局扉の近くから動き水無月の隣の椅子に座っていた。音も無い動きに夢路は恐怖を覚えたらしく少し顔をひきつらせた。その後、二人は仕事にきりを付け立ち上がりさらに下層にある、正確には移動した車庫に向ってエレベータで下りていく。もちろん篠も一緒に

「篠、このあとは暇？」

「……。何もありません。どうかしましたか？」

「うん、夢路君と一緒に馴染みの店で飲もうと思ってるね。予定がないなら一緒にきてご飯を食べていくと良いかなとおもってるね。いいだろ？ 夢路君」

「問題なし。取り合えず一度外に出よう」

「ありがとうございます」

矛は夢路に教えられたとおりに進み思世の書齋についた。ノック

をすると中から思世の返事が返ってくる。かなり広いらしく扉は近代化されている基地には似合わず檜の木の板で作られている両開きの扉で押して開くと思世が椅子から立ち上がり『帰るぞ』と合図してくる。矛もそれに続きすぐに外へでて近くにあったエレベータに乗って下りていく。その頃の外の街は治安強化と災害対策の成果を得てあまり大きな騒動は起きていないようだ。『ログ』もそれ以外のメンバーも楽しそうに平和な今を過ごしている。だが着々と広がりにつつある戦乱はこの『愛知』を飲みこもうとしている。それまでに何とかして現状を把握する情報収集能力と国力を付けなければならぬのだ。

「お父さんって昔は何してたの？」

「そんなこと聞いてどうする？」

「気になっただけ」

「琴乃、そのうちあなたも勉強すると解るわよ。この人ビックリするぐらいすごい人なんだから。他にもねえ、『ガイア』に所属している管理職のメンバーは皆世に名を残すような英雄級の人よ」

「そうなの？」

「そんなことも知らなかったのか？ 荒神 琴乃」

「フフフ、零紫君も琴乃を意識し過ぎ。そんなことしなくても十分よ。君ならね」

「？」

「まったく、お前らは怖いよ。どこまで話してよいやら。機会をみて話してやるよ、それを話すと『ガイア』創立の理由も明らかになるしな」

「創立って『ガイア』ってそんなに若い組織なの？」

ファミレスに入り食事をしながら対話にふける荒神一家。琴乃が荒神の過去に興味を持ちしきりに聞いたがっている。そこに、姉の美琴が口を挟み遂に荒神が口を開いた。それはあまりにも現実から

かけ離れていたが昔の戦時中ならあり得る話しだと美琴が再び口を挟んだ。

「どこから話して良いか解らんが俺の過去とほかの連中の関わりから話してやるよ」

「へ？ もしかして皆同級生なの？」

「ああ、巖以外は皆同じ年だ。俺が中二で他の連中も言うまでも無く同じ、今の幼、小、中、高、大の一貫校とシステムは同じで学部も変わらない形の学校で俺たちは学生生活を楽しんでたよ。まずは俺からか。学年最凶の不良として頂点に居た」

「へ？」

「父さん。それは言ってしまうてもいいのか？」

「問題ない。過ぎ去った過去だ。その時よくつるんでたのは思世と絵藤だ。お前からからすればどんな接点があったのか気になるだろうが至って簡単だ。思世は軍の訓練生仲間と絵藤は幼馴染と言っ事だ。そして、それに加わるようにクラスメイトの水無月、夢路、空雅と増えたんだ」

「じゃあ……。ガイア創立の理由は？」

「簡単だ」

荒神が下を向きエネルギー収束サーベルの旧型を取り出した。壊れている上に赤黒く固まってこびり付いている血が浮いている。そして、肩を触りながら話した。

「あの時はさつきも言ったように戦時中だったんだ。だから俺たちは遅かれ早かれ戦場に送られる運命だったろう。だから俺たちはせめてもの抵抗で夢物語を描いた。思世と俺でストーリーを絵藤が挿絵を……。それがこのガイアのもとになったものだ。俺達だけの夢は学校中に広がりそれに賛同する連中も増えて一種の宗教みいだつたな。そして事件は起きたんだ」

「事件……」

「日本崩壊事件……」

「そうだ。敵の創世主軍が作り出した空中要塞の戦闘用バリアを無効化する音波兵器のせいで『愛知』以外にも沢山の要塞が落ちていったんだ。そして『愛知』にも魔の手が伸びて俺たちも命が危なくなっただ」

その頃の日本は創世主軍との対峙点で全ての戦闘区域の中でもトップに立つほどの危険な区域だった。その中で当時中学二年生だった『ガイア』上層部のメンバーは夢を描いていたようだ。その中でも思世、荒神、絵藤の三人が主体となり夢物語を描いていた。彼らは戦争によってつぶされた夢を取り返したかったのだ。

「空中要塞『愛知』が危機に瀕したのは第一次緊張崩壊戦争の終結期だ。味方の要塞は音波系のバリア破壊装置によって敵の旗艦の攻撃の防衛をする事が出来ずに次々に爆沈して行ったんだ」

空中要塞『愛知』への攻撃が開始され敵の旗艦が周りを取り囲み弾道ミサイルが次々に放たれ都市へ撃ち込まれた。敵の攻撃の標的となったのはまずは軍の機関。次に交通機関、そして教育機関が次々に攻撃を受け陥落および爆破……。

「なあ……。ホントにサボってよかったのかよ。修羅」

「問題ない。……ング！」

「酒くせえなあ！ 荒神、俺にも分けるよ」

「荒神君ダメだよ。空雅君も！」

「荒神……。ちよつと来てくれ」

その時、既に創世主軍の攻撃は始まり各地で爆炎がもうもうと撒きあがり旗艦が次々に滞空して輸送小型機で兵士を本土に侵攻さ

せているのだ。その時現在の『ガイア』上層部メンバーは授業をサボり学校の裏手に作られていて森に隠されている廃兵器工場で夢物語の続きを編集していたのだ。

夢路が運転する赤い車がスピードを上げて車通りが少ない道を走って行く。バーに向っているようだ。車内でも篠が水無月と夢路に問いかけている。彼らは荒神よりもソフトにはなしているようだ。

「懐かしいな」

「うん。十二年前か……過ぎると早い物だね。俺たちが運よく生き残れたのが案外軽い思いでとして心の中にあるなんてさ」

「ああ、生きていられるのには感謝だがあれももう昔のことさ」

創世主軍の攻撃は荒神と思世が気付いたところには軍機関のほとんどを破壊しておりもはや抵抗すらできない状況だったようだ。そして、いつも俯き加減で小さい声しか出さない荒神とあまり口を開くことが多くなかった思世が同時に「伏せる！」と叫んだのだ。

「伏せる！」

「うわっ！」

白い光が窓ガラスを貫き爆風らしき突風によって粉々に吹き飛んだ。荒神は夢路と水無月、思世は絵藤と空雅を覆いかぶさるように床に倒し爆風から守りすぐに荒神が起き上がり学校がある場所を見て口を半開きにした状態で固まった。思世が頭を右手でおさえながら立ち上がり荒神と同じ光景を目の当たりにし同じように固まった。

思世も矛と話しながら暗い路地を歩いている。矛も前者達と同じように重政に話しを聞いているようだ。

「その後、校舎が爆炎と黒い煙に包まれている凄まじい光景を見たんだ。校庭には黒こげの死体が多数転がっていた。そこに敵の歩兵が集まり始め俺の背筋は氷着いた」

「親父でもか？」

「……。ああ、まだ青二才だった俺にとって恐怖その物に近かったよ」

思世が荒神の動きに気付きすぐに作戦を練った。絵藤も協力しスムーズとはいかない物のすぐに陣を組み回避組と迎撃組に分かれ一人でも生き残れるように行動を起し始めている。分隊方法はいたって簡単。迎撃組は思世を司令塔に特攻人員に荒神、補給と殿を空雅が務める。回避組は絵藤を班長に夢路、水無月が付き奥の部屋に逃げ込むそれが作戦の大まかな概要だ。

「荒神……死ぬなよ」

「馬鹿言うなよ。思世！ こいつが死ぬ魂かよ！ な、荒神！」

「解らんが……やるだけやるさ」

迎撃組が入口から少し出たコンテナが大量に積み重ねられている倉庫エリアに向い、逆に絵藤が先導し奥の格納庫へ三人が走って行く。そして、三人が奥に向って背を向けた瞬間に銃声と荒神の物と思われる怒声に人間の叫び声が聞こえてくる。絵藤が悔しそうに下を向いて走って行く。

絵藤はエアトレインの車内で皇太と紫神に問われたらしく苦笑いをしながら答えている。大柄な彼は堀が深く骨ばっているため淡い光を受け石像のように見える。

「恐ろしかったさ。理由は簡単だよ。まだ中学生で命の瀬戸際を経

「よし思世に二人の命を任されていた俺は責任が重く感じられてな」
「そうですね……。自分の命だけならまだしも他人の命が関わると背筋が凍ります」

絵藤達は膝を抱えて奥の格納庫で固まっていた。敵兵の断末魔の叫びが廊下に反響し聞こえてくる。そこは戦場なのだ。当たり前と言えば当たり前だが中学生には過酷で残酷なことだ。いくら戦闘訓練を受けていても中学生は中学生だ。

『絵藤……。俺達どうなるのかな？』

『解らない』

『思世君たちは大丈夫かな……』

そして、あつてはならないことが起きてしまうのだ。

荒神は蕎麦のメニューにある海老天重ねを食べながらもそもそもと話している。食べ終わったらしく箸を置きウエストポーチから血がこびり付きどす黒い円柱の物を机に置いた。そして、左腕に手を当てながら残酷な話しを始めた。

『ぐあつ！』

『思世！ くそっ！』

『荒神！ 伏せろ！』

『……！』

『くそが！』

思世は斜め左から右目を撃ち抜かれこめかみ前を貫通しコンテナの後ろで崩れ落ちた。荒神はその思世に駆け寄った瞬間に敵の兵隊の火炎放射機の攻撃を受け左手を大火傷し使い物にならない。思世をかつぎ空雅とともに元の部屋に逃げ込み思世を空雅に預け、火

炎放射機を使用していた敵に刺してしまったサーベルの予備をポケットから取り出し自分の肩を切りおとした。

「若すぎたな……。自分で自分の腕を切りおとせるなんてな」

「これなら子供にも似るわけよ」

「どういつつてさつきも言わなかったか？」

バーのカウンターに座った三人は話している。夢路は比較的到低アルコールの水割りを飲んでいる。少しアルコールが入って声が大きくなって来ている。水無月はアルコールの高い酒を引掛けている。篠は小ぶりな茶碗をマスターに出してもらい白米をたくあんの付け合わせでちびちび食べている。

荒神と思世が負傷し迎撃が不可能になった。迎撃組は空雅が手投げ弾で侵攻を遅らせつつ退避組が逃げ込んでいた格納庫へ駆け込む。荒神と絵藤が協力して隔壁を閉めたが直後に夢路と水無月に異変が起きた。

『絵藤！ 修羅たちがき……た……』

『うっ』

『夢路！ 水無月！ 大丈夫か？』

『くそ！ これでも喰らえ！』

思世は息荒く右目から流血しており荒神は左肩から下が無い。普通の中学生の二人には少々どころかかなりグロテスクでショッキングな出来事だったろう。外で敵兵の話す声が聞こえ遠くに行ったようだ。

「あれは流石に驚いたな。あれは」

「うん……。思世君は後から気付いたけどね」

「あれは……………。うえ、今でも思い出したくないな」
「夢路主任位さんここでは吐かないでくださいよ」
「わかつてる」

バーのマスターに諫められ途中で酒をやめジュースをすすり始める。思世が家で料理を作っている。男料理とはこのことだろう。質素で飾り気がまったくないが栄養バランスはばっちりな食事だろう。

その瞬間に敵がどうして気付いたのか知らないが龍撃胞というバズーカのような武器を使い比較的薄めの隔壁を破壊し中に押し入ってくる。だが、彼らもやすやすと敵の手に落ちたり殺される気は全くない。空雅と荒神、夢路を支えていた絵藤の三人が近くにあったH鋼を横向きに投げつけ隙を作った。すると敵は煙幕を撃ち込み攪乱して拿捕をもくろむが…………。

『くそ！ 何もみえねえ！』

『夢路！ どこ行っただ！』

『うわ！』

『うお！』

六人に何が起きたのかは謎だ。だが煙幕が治まった時には既に六人はその場から消え敵の創世主軍の兵隊は騒いでいる。

絵藤はエアトレインを下りて歩いて行く。その後ろに紫神を背負った皇太が続き絵藤の話しに耳を傾けている。ここは大きな邸宅が多くそのうちの一つの中に入って行く。

六人がたどった道は気付けば何の事無いが気付かなければ解らない道だ。そう、通気口の金網が夢路のある偶然的な出来事で開き急降下している真つ最中だ。その出来事とは本当に偶然に起きたこ

と……絵藤が支えていた彼はその支えが無くなったため三人がH鋼を投げた瞬間にたまたまダクトのスイッチを頭突きし開いたのだ。そして、まずはダクトの上で横に倒れている思世となんとか気持ちをしつかり保って失神しないようにしている水無月が落ち夢路が落ちると同時に足を滑らせて落ちた荒神、それを追うように下がってきていた絵藤、もう何が起きているか気付いていた空雅とダクトに吸い込まれていくし時間式だったのか自動で閉まったダクトの中を落ちていく

『絵藤！ 水無月と夢路を頼む！』

『言われずともしてる！ そっちはどうだ！』

『なんとか掴んだ！』

『この下は何なんだ………』

『解らないがあんまり良い予感はないな』

落ちた場所は真つ暗な部屋だ。ゴミが腐った酸っぱい臭いが立ち込める中息を吹き返した思世が荒神を起し状況把握を促すようだ。落ちた衝撃はゴミの類がクッションになり完全とまではいかないがそれを抑えてくれたためみな外傷はゼロに近い。全員の安否を確認しまずはそこから脱出することを目指す。

荒神は琴乃の注文を取りすぐに続きを続ける。既に夜も更けているが四人はまったく気にしていないようだ。零紫が荒神が持っている旧式のサーベルを手に取り憧れを帯びたまなざしで眺めている。

ゴミの山から壁を見つけ出し思世がカギをかけられており開きはしなかったが扉を見つけ皆で試行錯誤を続けるさなか、荒神がサーベルを使い切り開いた。穴をでた思世がすぐに気付いた……。そこは現在の『ガイア』の前身である組織の地下本部であることに……そして行動を起した六人が『ガイア』の重役として働く人物にな

っている。

『ハッ!』

『おいおい……。ホントにやりやがったよ』

『急ぐぞ。智基』

『あ、おう』

『荒神……。あとどれくらい持つ?』

『未だなんとか行ける』

『わかった』

サーベルを握った荒神が本人のカッターシャツを切って作った即席の胞帯を撒いている思世や絵藤、空雅、水無月、夢路とは逆の方向に走り出した。思世は所持していた携帯電話はでハッキングをし組織の施設情報を抜きとり中層なある戦闘管制室に向う。途中で空雅が下層の荒神のいる所に向い走り出した。

夢路は酒に飲まれてしまい泥酔し始めている。篠は茶碗にあった白米を腹におさめ黙って水無月の方向を見ている。

空雅が向ったのは荒神の向った方向にある地下上層部のメインハンガーだ。戦闘機を探して進んでいる。荒神が無理やり体を動かして戦って道を開き空雅が後を追ってマシンガンや重火器で補助をする。そしてたどり着き荒神がメインハンガーに居たて敵を片づけるのを飛行機のコックピットで待つ。思世や絵藤、水無月、夢路も行動を起している。

『空雅!』

『荒神を見つけて下に行く! 戦闘機をさがして奴らを倒さないと何も進まないぞ!』

『解った……。俺たちも行くぞ。うっ……』

『思世君！』

『まったく……水無月！手を貸せ！』

『夢路君……』

『行くぞ……。せえの！』

夢路と水無月が思世をかつぎ中層に向う。絵藤が近くにあった斧を持ち思世達の前を走る。すぐに着いたその部屋の扉をこわして開け中に入り水無月が猛烈な勢いで電卓とディスプレイのメモパッドを使用して防衛機能のパスをこじ開けるプログラムを作ろうとしている。思世が出来た数式をもとにハッキングプログラムを並行作成し夢路も空気に流され手近な席に着きコンピュータのキーボードを弾く。絵藤はその隣にあった医務室から薬品を運び手当がいつでもできるように準備をする。

「夢路君寝ちゃったな……。まあ、いいか。あれが俺の生涯……ただの一度だけ本気で計算した式だった……。まさかホントにできるとはおもってなかったけどね」

思世が食器を洗いながら小さいがよく通る声で矛に語っている。矛は思世に言われたとおりにワインと炭酸飲料を机にならべながら聞いている。

パスをかいくぐり次にとりかかったのは防御システムの再起動と攻撃システムの機動だ。防御システムは水無月が再び計算を行い敵の音波兵器に耐性のあるバリアと戦闘用構築シールドの作成を行っていた。敵は『愛知』爆沈すべく兵を引き中型旗艦を本島に横付けして今にも離れようとした時だった。

『思世！ハッチを開けてくれ！今から迎撃に移る！』

『解った！』

『思世君！ こつちも準備出来たよ！ 音波の恐ろしさを敵にも解らせてやる！ 何んで敵艦が反対にいないか解ったよ。敵はまだあれに耐性が無いんだ！』

『だああああ！ わかんねえよ！』

夢路の行動が火種になり『愛知』は息を吹き返した。夢路が赤いガラスカバーを破り中にある砲撃システムを機動するスイッチを押してオートモードになっていた砲撃を再開させたのだ。その砲撃で横付けしていた中型旗艦はほとんど爆破し海に消えて行った。そして水無月がバリアを展開しシールドの座標を合わせて敵の応射を待った。

「まさかな。 と思ったがアイツも一応俺たちの一員だ。 やるときはやるのさ」

紫神を寝かせウイスキーを水割りのオンザロックにして口に運ぶ。 絵藤は皇太と談笑交じりに話している。

敵が再び音波を放ったが水無月がここぞと言わんばかりに耐性のあるシールドを張り跳ね返してしまったのだ。 敵の大型旗艦から小型の戦闘機まで全てがシールドを失いその衝撃で味方同士でぶつかった。 その時に空雅がメインハンガーを離脱し敵のコックピットやエンジンを撃ち次々に落としていった。 その頃、内部では緊張が抜けたらしい思世が倒れ絵藤が手当をする。

『うぐ……』

『思世君！』

『言わんこつちゃない…… 夢路、手を貸せ手当が終わったら脱出しなといけないからな。 ここも危なくなる。 敵の残党が狙うとしたらまずはこちらだからな』

『わ、解った』

そして、事実敵の残党は地上の入口から入り中央管制室を狙ったが完全に引き払い痕跡すら消した絵肘以下四名は荒神が居るとみられるメインハンガーに向って全速前進していた。

「俺や水無月が生きてられるのはまずは思世と荒神のおかげだろう。ついで空雅もその一人に数えられるな。俺達文官なんかは戦力にはなりはしないが相応に戦ってやったさ。そう言う意味では俺たちは最高のチームなのかもな」

荒神たちがファミレスを出て家に向う道中も話は続く。

難なくとまではいかないもの荒神に攻撃を受け負傷していた敵兵は絵藤が振る救助用の斧でなぎ倒し上層にあるメインハンガーへ走っていた。思世が負傷しているのでそこまで速くはないがそれでも着々と進む。そしてメインハンガーに到達し未だに居るらしい敵兵の掃除をしている荒神にであった。

『あ！ 荒神だ！』

『お……前……ら。』

『おっと……。夢路君！ この輸送機に乗るよ！』

『了解！ 重！ こいつ何キ口なんだ体重……』

敵の残党を一手に引き受けていた荒神が流石に精魂尽きたような顔をして地下滑走路の床に倒れこんだ。水無月と夢路が倒れた荒神を兵士輸送用の輸送機に潜り込み絵藤の慣れない運転の中だったが無事に『愛知』の上に出た。敵の旗艦や戦闘機は空雅の攻撃や夢路がオートモードのまま切らずにそのままにした祖国面砲の影響で壊滅し生き残り数機も味方の援軍に撃墜され始めた。

「ここまでが俺たちの武勇伝さ。ここからは執務の連中が頑張ってくれたんだ。『愛知』以外の空軍や兵士のおかげで大損害を被ったが大破とまでは行かずに再建する事が出来たのさ」

「じゃあ、ここからは水無月先生と絵藤画伯。夢路さんが活躍するの？」

「ああ、俺は言うまでも無く集中治療室行きで、思世も同様。空雅は動ける人手を集めて金属や資源になりそうなものを探しに行った。水無月は防衛システムの基礎を構築し絵藤と夢路は他の都市でギャンブルをして資金を稼いできた。危なっかしい時もあつたが俺達新生『ガイア』は最後までへこたれずにここまで来たのさ」

夢路を自宅に送った水無月は篠とともに帰宅し少しだけ自分たち文官のことを話した。あまりにも少し過ぎるがようやくやくされているだけで話の筋は通っていた。

「これからどうすればいいんだよ。巖磨っていうガキも拾っちゃまったし」

「俺たちはまずは思世君と荒神君を守るんだ。それが先さ」

「おい、夢路。お前の運を使うときが来たぞ空雅に送ってもらって稼ぎにいくぜ」

「またカジノか？」

「当たり前だろ？」

先ほどの彼ら『ガイア』は個々にまったく違う性質や特徴、役割を担うことでここまで発展してきたようだ。六人に加えて巖磨も今では重要な役に着き『ガイア』を引っばっている彼らの未来はどのような方向に進んでいくのだろうか……。また新たな世代に彼らの思いは届いたのだろうか。

FIRST ACTION

巨大な力を徐々に内面より外面に露出し始めた空中要塞『愛知』にて数か月が経過し零紫や琴乃、矛、篠、皇太、紫神も任務に駆り立てられ忙しい毎日を過ごしている。『愛知』は完全に改修と増築が終了し荒神や夢路、水無月、他のガイアの重鎮等に余裕ができてきているらしく戦闘訓練などもはじまったようだ。彼ら、『改造人間』と『創世主』は来るべき大戦を目指し毎日厳しい鍛錬に励んでいた。

「零紫、踏み込みが甘い！ それだと二撃目で首を持ってかれる！」
「ぐあー！」

地下の巨大な核シェルター状の訓練施設の中で荒神の体術の講義を受けているのは比較的近距离戦闘をすることの多い矛と零紫。剣と槍を扱う彼らにとって体術は基本中の基本だからだ。一見すれば零紫や矛の方が体格があり強そうだが訓練を見ている限りではそもいかなないように見える。現に零紫は注意された瞬間に殴り飛ばされ壁にぶつかっている。

「いきますー！」
「遅い！ 後0、3遅ければ零紫に負けるぞ！」
「かはっ！」

矛が地面にたたきつけられ大の字になった。荒神が溜息をつき近くにあった小型のタンクのような物に紙コップを近づけ透明な液体を注いで二人に渡した。スポーツドリンクのような物らしい。なかなか美味とは言えないような苦々しげな顔つきの二人に仁王立ちの体勢で彼は話しかけている。

「練習熱心なのはいいが三時間ぶっ続けはキツイだろ？」

「父さん。そんなに余裕そうな顔して言わないでくれよ。心が痛い」

「まったくですよ。荒神主任……。あなたは現役を引退したんでしょ？」

「まあな、お前達は日に日にのびて来てる。後は体が成長するのに合わせてトレーニングすれば俺並にはなるさ。頑張れ」

その隣の部屋では思世がパイプ椅に座って三人の講師をしている。メンバーは琴乃、篠、皇太だ。彼らは狙撃や火器の扱いを習うために過去に普通軍兵の訓練を受けていた……。そして、教官をしていた思世に銃や弓などの扱いを習っている。思世は中学時代に弓道の達人として名をとどろかせた人物でもある。その関係から篠にも弓道を教えられるのだ。他にも中学在学の後半は父親の関係から軍の訓練兵……。いや、大理石の階段で上層部に登れるキャリアの息子だったため少しの訓練だった……。のだがそれでもいろいろな訓練や武器の扱いで訓練兵時代ですら相当な腕の持ち主ではあった。

「琴乃はもう少し足を開き腕の高さを揃えなさい。双拳銃は制射力を問われる。それを付けるにはフォームが一番大切な観点になるからな。足は肩幅よりちよつと開く程度に……。そうそう、流石は荒神の娘だ。飲み込みがはやい。後は訓練で感覚を覚えるんだ」

射出機から飛び出す円盤に弾を撃ち、当たる精密さや思世の熟練の目からみたフォームを教えるのが主な目的だ。琴乃は二丁の拳銃が装備品で彼女の割と小さな手に合わせて作られている。円盤には十発中三発は当たるようになってきた。家でも熱心な彼女は父親の荒神に教えてもらっているようだ。二人目は篠、一分ごとに切り替わる大小の的を壁に映し速さと命中度を上げるのための特訓をしている。彼女の場合は基本はできているためこれからの訓練次第では

大きく革新的な力を目覚めさせることが出来るかも……とい期待まである。彼女の力はとても強力らしいが未だにそれを知っているのは数名にとどまる。

「そう、目で確認するな。風や空気を味方につける。お前は弓が武器だからな。この後道場に来い。型はそっちで教える」

「わかりました。ハア……」

最後に皇太は多種の火器を目的に応じて使い分ける訓練だ。主に使うのはショットガンだが手投げ弾や小型の爆薬、スナイパーライフルも教えられてかじる程度だがそこそ腕を上げて来た。彼は基本的に温厚な性格で戦闘をするよりも作戦を前線での確に指揮するタイプの戦闘スタイルをする。そのためまずは生き残るためにオーラルマイティーな戦闘技術の円滑さを求められているのだ。彼自身もその明晰な頭脳でそれを理解し予、復習を怠らない。

「よし、時間だ。皇太は荒神の体術を受けに行け」

「はい、隣でしたよね？」

「ああ。言っておくが荒神は俺ほど甘くないぞ」

「アドバイスをありがとうございます」

この様に各技術の上で腕の立つ上官たちが部下に当たる『改造人間』や他のメンバーに訓練をしているのだ。特に技術などが関わる射撃、体術、作戦遂行能力は文官である絵藤なども参加し講義をとる。それが最近の彼らの日常だ。多忙を極める中でも彼らはそんな日常に満足感を感じ日々を楽しく過ごしている。上官の面々もそんな彼らの事が可愛いらしく日々張り切った講義を取るようになっているようだ。思世や荒神も徐々に力を奮っているようだ昔のような輝きが表情に見てとれる。

「うううううう……」

「どうした？ 琴乃」

「あれ、今さ、名前で呼んだ？ それはそうとアンタもつらそうだから聞かなくても解るでしょ？ 訓練のせいで筋肉痛なのよ」

「ふーん」

「アンタこそ痛そうね。その頭」

「ああ、父さんから愛がたっぷり詰まった拳を諸にもらったのさ」

「鉄拳が諸に……寒気がしてきた」

毎日の通学路をエアシューズで滑空する二人はそれぞれの近況を伝えあっている。そこにさらに二人が加わり学校に近づいていく。ビルの間道は大幅どころか恐ろしい改修区画工事の影響でかなり広くなりビルの上を抜ける法が楽になってしまったのだ。さらに、戦争は技術関連の進歩を生むためシューズも格段に性能がよくなっている。

「よう！ あてて……。腹筋が痛い……」

「おはようございます……皆さん満身創痍という感じですね」

矛と篠のペアがビルの上から現れ会話に加わった。大柄な矛は学生靴を帯のような物で胴に巻き背中に背負っている。篠は制服自体が違うが一応それ以外は学校の規律を守った服装で現れる。いつもの四人で登校する姿を中層の普通車両域から手を振る者が見ている。零紫と琴乃はちゃんとした制服だが二人は微妙に違う。矛は思世が学生時代に着ていたもので少し型が古い。篠はどこの物か解らないセーラー服にブーツ型のアップシューズと呼ばれる物だ。制服の規定自体はそこまで厳しくないから彼らも教師には捕まらない。

「琴乃！ ヤッホー！」

「君枝！ おはよー！」

上から声をかけるのは夢路にツイで送ってもらっている大原君枝だ。その後ろには大型のバイクがスピードを上げて追いついてくる。顔ぶれは解りきっているが荒神が娘である美琴を出勤のツイで送っているのだ。そして、水無月の教育改革案と思世の軍事改革の取り入れによって市街地の配置や施設自体が大きく変化した愛知。そして、その愛知には敵の旗艦や戦闘機などの攻撃を対処するための力が次々に導入されたたび起こる小競り合いをくぐり抜けて来た。彼ら改造人間もその作戦に組み込まれる日が近づいているだろう。しかし、表だって作戦を遂行し指揮をとることはしていない。

「おつ、いつもの四人か」

「おつす」

「水無月先生が呼んでたぞ」

「わかった」

水無月に呼び出された四人に言い渡された任務は毎度のことながら危険かつ彼らでなければ不可能に近いものだった。今回は作戦が特殊でこの四人と皇太、紫神を加えた六人にさらに実験段階だが機械兵や無人戦闘機などが稼働する特殊なところはここだろう。そして、何より不可能に近い理由は最後の一つ……。

「今回は荒神は不参加、そして最重要任務は空中要塞『石川』の住民保護と建築物及び技術の輸送だ」

「あの……それって。まさか」

「ああ、そのまさかだ」

「空中要塞を接続し建築物を輸送する……。正気ですか？」

「仕方ないだろう。これから三時間後に実行する。配置や戦闘形態は追って思世君から説明がある。今日はそれに備える。学校の地下

に『ガイア』本部に繋がるエレベーターがあるから使って下に降りる」

「了解しました」

作戦隊長は零紫、副官に篠が付き組み分けは三隊に分隊する、第一隊は零紫と琴乃、第二隊は篠と矛、第三隊は夜井兄妹と簡潔だ。文官の類は既に作戦通りに動いているらしく残るは零紫達『改造人間』と空雅の航空隊だけだ。すぐに四人は行動を起し学校の地下に降りて行く。水無月の言うとおりに行動すると本来動くはずのない壁が開き中からエレベーターが現れそれに乗り込む。

「しかし、こんなに実戦が早いとは」

「ああ、それに今回は父さんの助力も無いか……」

「何を弱気になってるんだか。アンタが居ればなんとかなるわよ。」

零紫

「……。私もそう思うわ。荒神指揮官の弟子なんでしょう?」

「いや、問題は他にもいろいろあるんだぞ?」

「わかってるって。だがな、お前に荒神指揮官が与えた試練なんだよ」

「そうそう、だからこそよ!」

「……うん、私もそう思う」

下に降りると既に紫神と皇太は支給された防具を身につけ武器を装備していた。紫神は体のわりに大きすぎるように見えるアックスをかつぎ初陣に備えて緊張感を高め、皇太は各所に火器が付いている防具を確認しながら表の軽装防具をつけているのがうかがえる。すると中から抑揚のある声が響いた。巖磨である。彼の出身は大阪だったらしく未だに根強く関西弁を使っていたのだ。それが治らない理由は荒神がそれを気にしなかったのもある。

「早くしいよ！ あと三時間なんやで？ 初任務は勿論、成功させたいやる？」

「巖さん、はい。それは皆同じです」

「わかってるっての」

「ねえ、これってどうやって着るの？ 篠は解る？」

「うん……。何となくは……。あんまりジロジロ見ないで……。恥ずかしい」

三時間はあっという間だった。その間の零紫は顔には出さないが不安が募っているようだ。いらいらするように癖の剣の柄を撫でることを繰り返し続けている。そこにつなぎ姿の荒神が入って来た。彼の姿をつなぎとは言うが内側には特殊な合金の防御用金属板が入っていて拳銃の弾も通らない。いつも拳銃を所持しエネルギー収束サーベルや小型の爆弾を合わせて隠している。それでも誰も違和感を感じなかったが……。ずっと一緒に生活していた零紫と巖磨だけはその変化を敏感に感じ取っている。

「すまない……。お前から今回は別件で俺が動かねえといけなくてな」
「解りました。全力を尽くします」

「零紫、焦るなよ？ お前ならできる。『愛知』本島は夢路と水無月に任せろ。お前らは生き残ることより多く命を救う事を考えるんだ」

「はい……」

荒神から零紫に軽い平手打ちが背中に当たり荒神が笑っている。小柄で細身なはずなのにかなり筋肉質で見た目からは想像もつかない力を持つ彼は元高機動制圧系の部隊にいた。そんな荒神は変な威圧感がある。しかし、彼も人間であり弟のように扱う巖磨や息子になった零紫には……。何かを感じとれたようだ。荒神も心配事があるらしい。

「安心しろ。俺も終わり次第、加勢に行つてやる」

「親父！ 喋つとるくらいなら早くその『極秘任務』を済ませた方がええんちゃうか？」

「おつとそうだな。みんな、健闘をいのる！！」

荒神が部屋から出て行つた直後に愛知全体で緊急事態宣言が発令された。外でざわざわと人が動き始めている。零紫以下六人も完全武装の状態で地下滑走路のハッチ付近に集合し作戦実行の合図を待った。滑走路はエンジンのかかった愛知製鋼が荒神と研究作成し熟練のパイロットである空雅の意見を取り入れた『燕』型の爆撃機格闘機、輸送機、偵察機などが甲高い音や低くて耳障りな音などをエンジンから噴いている。パイロット達もかなり緊張した面もちだ。

「こちら総司令部！ これより二面作戦に緊急移行を開始する空雅の『燕』隊は各自任意で出撃し空中要塞『石川』の警護に付け！

『改造人間』の『零』以下六名は南方より接近中の敵大型旗艦の撃滅を開始せよ！ 残りの攻撃、防衛班は打合せど通りに陣張りを行い、随時状況把握を怠らず班長の指示で行動しろ」

重い声が響きわたりハッチで立ち話をしていた空雅空軍が次々に位置に着き元元帥の推薦で現在の元帥になった空雅の出撃命令を待っている。『改造人間』の面々は思世からの無線で出撃命令ができたため作戦を予定通り開始し分隊は各々空中で別れ敵の攻撃旗艦を破壊するために飛んでいく。

「零紫！ 親父さんに良いとこ見せるよ！」

「わかつてる。お前こそ司令にそのドジを見せるなよ」

「皆、頑張つて行こう」

次いで一機、また一機と空雅の親衛隊の『黒燕』がハッチを飛び出し遠目に見え始めた空中要塞『石川』を目標に五機ごとに編隊を組み空に吸い込まれて行く。その頃、思世と荒神はもう一つの作戦の遂行をするために最終調整をしていた。

「すまない。荒神。お前しかこの任務をこなせて『ガイア』の指揮官級であるメンバーが居ないせいでもた危険な目にあわせちまう」

「わかってるなら言うな。だが、これは俺の悲願にも関係することだからな。絶対帰ってくるさ。その前に下に寄ってく」

「ああ、いつものか」

「そ、いつものだ。生きて帰ってきたらまた飲みに行こうや」

「ああ、行って来い！」

『石川』が接近し遂に作戦の第一弾が決行された。水無月の班員が一齐にコンピューターのキーボードを弾き音声も併用し計算及びプログラムを構成していく。そして小班らしき区分の代表が次々に手を挙げ声をあげて完成の報告と準備の完了を告げる。

「A班準備完了！ いつでも展開可能です！」

「C班同じく！」

「F班も完成しました！ いつでも行けます！」

「B班左右に同じ」

水無月が立ち上がり全ての班の完成を確認すると総合的な指令を下し『愛知』と『石川』に変化が起きるのを待った。各所で問題なくシールド同士が結合したことを告げる信号が鳴り響き、二つの空中要塞がシールドに包まれていく。

「すげえ……。あんなこともできるのか……」

「斧柄君、よそ見はダメよ……。私たちはもう敵の弾幕にいるのだ

から」

『改造人間』の三隊の内、篠と矛のグループが敵の旗艦軍団に接触し交戦状態になった。その後も零紫、琴乃の二人も敵の爆撃機大隊と遭遇し戦闘へ移行。最後に夜井兄妹も戦闘機の大編隊と接触し撃墜を始めたらしい。そして、今回の作戦はなるべく戦闘は避け、機敏に行動し短時間で内容を終わらせることが成功の力ギになる。荒神は……。

「母なる大地から見つかった聖石……。これがどうして大地を空に浮かべることができたのか……。それを知るために要塞のコアを回収するか……。さて、行くか」

思世が指揮をとり次々に『石川』の住民と大地を切り取り愛知に結合させていく。簡単に言えば芋虫が蛹から羽化する過程で体を溶かし再構築するように『石川』の区画分化を上手く利用して大地を切り裂き建造物を地下に移動させ残った地盤を今から荒神と思世が行おうとしている作業を通して『愛知』に取り込ませるつもりなのだ。

「ここから先は行かせないわよ！」

「紫神……落ち着きな」

戦闘機大隊はあらかじめ皇太が持たされていたある武器を利用しことごとくそれらの前進を止めつつある。数機抜けようともがいたが紫神の可変式のアックスが当たり黒い筋を残して落ちている。同じころに矛と篠は既に敵の旗艦全てを爆破させ二手に分かれて残る篠と零紫と琴乃の所に向う矛の分岐をおこなった。二人の作戦の全貌はかなりあつけない。篠の特殊かつ強力で残忍な力を見た矛は絶句し言葉が出たのは篠の勧めで別れた後に少し離れてからだったの

だ。篠の力、それはパトリオットミサイルのような矢の機動変更追尾などだ。そして、彼女の弓が的である旗艦のエンジンに突き刺さるとエンジン部が凍結し停止してしまい全てが落ちて行くのだ。

「まさか、あの大人しそうな篠があんな能力を使うとは……」

零紫と琴乃には爆撃機の大隊とその支援機が現れており対処はしていたが二人には部が悪い。敵の支援機がハエのようにちよこまかと飛び集中力を乱され撃ち落とさなければならぬ爆撃機が一機として落ちないのだ。そのためどんどん間を抜かれてしまう。だが、シールドの上に爆撃を開始した敵機にいきなりシールドが開き中から砲弾が噴水のように打ち出されそこに居た数機は全滅した。ただし、その後続がその穴をかいくぐり中に侵入し都市への爆撃を開始した。

「空雅！ 行けるか？」

「了解！ 全機攻撃用編隊を組み『黒燕』、『緋燕』、『黄燕』は敵を攪乱し機会をつかがい撃破せよ。その後、『蒼燕』、『碧燕』は要塞の端部に落ちた敵機にさらに爆撃を加えよ」

『サ！ イエッサア！』

『石川』の周りを飛んでいた各編隊や部隊が目標を捕捉し次々に迎撃を開始した。『黒燕』、『赤燕』、『黄燕』の速度が恐ろしくでる格闘機タイプの戦闘機が動いている。中でも空雅の親衛隊である『黒燕』の精鋭部隊が次々に敵機の首元に喰らい着き落としていく。ドッグファイトになればまだよい。そんな状況にはならず左捻り込みなどの妙技を使い殆どの敵機を瞬時に落としていく。

「こんなに簡単に侵入できるとは。資料とデータを抽出……。よし……。後は、大取りだな」

零紫と琴乃に矛が加勢し敵機の漏れが減って行く。そして、要塞の結合作業も早々と終わって行く。この日のために思世と荒神が考案した『限界組織分解エネルギー』を使い建造物や残したい地形以外を水無月のシールドで囲いそこにそのレーザーを照射する。すると物質はたちどころに分解され一定の大きさの粒子となりシールド内で保存された状態になる。それを輸送機で運搬し開発中の区間にて粒子からエネルギーを抽出し元の物質に還元する。さらに構築していくというとても高度な作業だ。

「零紫……。こちらの構築作業はほぼ終了した。そちらの隊は全員引き上げシールドを一時的に解除しお前達の帰還後に要塞で敵旗艦は殲滅する。最後に『石川』動力炉と外郭以外を全て吸収しきつたら海面に落とすのが合図だ」
「了解、これから全員で帰還します」

敵の大隊はほぼこの時点で壊滅し外に出ていた空雅の編隊と零紫以下六人のメンバーが『愛知』に向って滑空していく。そのころ荒神も『石川』からの離脱を開始し空雅の『黒燕』にまぎれ本部に帰還し思世のもとに到着していた。

「無事に帰還何より……。で、例の物は手に入ったのか？」

「ああ、あるぜ。あとで深層動力室に來い。今回もやはり別のタイプらしい。俺もそのうち結論を出すのがあれがどんな物質でどんなものなのか……グフツ……」

「わかった。また忙しくなるな………おい！ 荒神！」

「大丈夫だ……ゲホツ……。気にするな……」
「気にするな……」

「いいか。これのことは誰にも言うなよ？ お前だけに伝えておく。どの道こうなる運命だったのさ」

「……解った」

荒神が吐血し倒れかけると思世が支え理由を追求する。荒神もさして彼には隠そうとせずに理由を話している。だが、彼以外のメンバーにはそれを伝えつことを拒みその後始末を彼に任せようだ。その後、帰還してきた零紫達に気取られぬように処理を行い基地の下層にある『改造人間』の防具を管理している部屋で彼らを出迎えた。

「お帰り……よくやったな皆」

「ただいま。なんとか帰ってこれたよ」

「そのようだな。琴乃？ 大丈夫か？」

「デビュー戦がこれだと少し厳しいかも」

「気にするな。戦闘なんて慣れなんだよ。どれだけ修羅場をくぐり抜けるかが問題なのさ。俺もその意味が解ったのはお前達より少しあとくらいだったな」

「……。なんか解りたくないかも」

「さあ、帰って飯にするぞ！ 今日俺が作ってやるから楽しみにしておけ！」

「やり！」

「っしや！」

零紫と琴乃の迎えは荒神が来たように心配そうに水無月と奈々代が篠を迎えに来た。紫神は皇太の背中中で眠ってしまい皇太は絵藤と小さく笑っている。思世はいろいろな意味で思いつめていた。だが矛が無事に帰還したことを知るとあまり笑わない彼が珍しく小さく笑顔を作り肩に手をおいて出迎えている。『愛知』と『石川』が何故、結合を余儀なくされたのかはこれから解ってくる。思世や絵藤などの指揮官が外部より手に入れる情報を利用し上手く戦線をおかしている『愛知』だがこれからそれすらままならない事態に発展し

ていくことをまだ知らない『ガイア』の面々だった。そして、数カ月後には『石川』の高い技術力で資源金属を補充した『愛知』は現在交戦状態にあったのだ。敵は『愛知』よりも大型な空中要塞で国外の量産型だ。円盤型の巨大な金属の塊はその形状を利用して回転しながら次々に砲撃を続ける。敵とこちらでは知識や学識はこちらが上であろう。だが、劣る物が一つある。人手である。敵は本土から次々に優秀な人材を送り込めるがこちらには替えが用意できるほど未だ教育がいきとどいていない。現在は戦闘を始めて72時間経過した。文官でインドア派の水無月の体にピークが来ているのである。本当ならとつくに倒れていてもおかしくない状態のはずだ。しかし、仲間のためと思いとどまった結果本当に倒れてしまったのだ。

「主任！ 誰か担架を！」

「くそ！ 誰が変わりをやるんだよ！」

学校や病院などの公共機関は全て地下の格納庫に格納し陸上に侵攻されなければ安全なはずだ。司令部は騒然としている。砲撃管制は座標入力だけだがシールドのオペレーションは計算をしてそれをもとにシールドを張るといふものだ。常時、張り続けている薄いポッド型のシールドでは保つことが出来て一時間……誰かがやるしかないのだ。そのため、緊急に会議まで開かれ民間から次々に彼ほどではない人材が派遣されてくる。だが、それも次々に脱落していき水無月の体力と精神力のすごさが浮き彫りになったかんじだ。

「私やります！」

「君は？」

「君枝ちゃん！ 丁度いい！ ほんの数時間でいいんだ！ 水無月の変わりをしてくれ！」

「解りました！」

琴乃の推薦で事務としてたまたま入っていた大原 君枝が変わりに計算を行い水無月程ではないが他の班員が行うより速度の面で速く、より正確にそして長くだ。外では懸命に敵のシールドを破ろうと『黒燕』他、親衛隊が攻撃を続けている。その中には零紫たち『改造人間』も加わって敵のシールドを破ろうと必死になっている。敵のシールドは新型で宇宙空間ですら耐えられる強度の物らしい。こちらの『愛知』が使っている『SHEシールドポッド』は強度としてはそれ以上に協力だ。しかし、消費電力と耐久性が悪くわざわざシールドを座標軸計算し演算して消滅させる工程を踏まなくてはならない。シールドの防御線はこれで固まったが……こちらの攻撃はいっこうに通らない。

「どんだけ堅いんだよ！ このシールド！」

「これじゃ破れない。皆で協力しないと……」

「紫神！ こつちに来てくれ！」

「わかった！ で、どうするの？ お兄ちゃん！」

その頃、本部でも行動を起していた。前回、思世が使用し敵の旗艦の動力炉を打ち抜くことが出来た高火力ビーム砲を利用してシールドを消すつもりなのだ。それが上手く行くかどうかは解らないが思世はそれにかかるつもりでいたようだが……。

「荒神……。大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。あれから一度も吐血はしていない。それよりこいつで敵のシールド発生装置を壊すんだ」

「わかった。俺が狙う」

ビーム砲にさらに三つのエネルギーを凝縮するプリズムとリアクターを加えた大型な銃……。高火力な砲撃を可能にしたがそれなりに扱いにくさが上がっているのは言うまでも無い。それを扱えるの

はただ一人……。思世しかないのだ。恐ろしく強力で経験が必要になる物であるそれが渡され彼は敵の母艦のコアを狙っている。

「水無月先生ってこんなにつらいことしてたんですね！ 智基おじさん！」

「ああ、言つとくが俺の仕事もそう変わらんぞ！」

思世にライフルを渡したあと荒神も武装しハッチから零紫や琴乃のいる場所を目指す。だが、前線にいる零紫たち『改造人間』のチームも考えていた。空気中の元素を固化させた錬金術まがいのシールドも化学変化はするものだ。篠の矢に本人から直接エネルギーを放ち直径5センチほどの焦げ跡を作つてそこに矛の槍を力の限りつきたてる。すると少し亀裂が入り槍の穂先がシールドの内部に通つて行く。敵の管制官が気付いたらしくそちらに敵兵が飛んでくるが零紫と琴乃、皇太が一機たりとも近寄らせない。……絶対に近づかせない。最後に怪力の紫神が矛の槍の石突きをアックスの柄で叩きつけ亀裂を広げていく。すると直径1メートルほどの穴があきそこから入れるようになった。彼らはそこから内部に侵入し敵の動力炉破壊を目指す。荒神が零紫達が開けた穴に気付き、空雅の『黒燕』に合図をし空いた穴に砲撃しるとメッセージを送信し中に侵入していった。

「すげえな……。これだけ全てが全て金属だと……。……うおい！」

矛の言葉が途切れ敵の要塞が大きく揺れた。その原因は思世が撃つた高エネルギー圧縮砲だ。巨大な黄色いレーザー砲を放つたため敵の旗艦が大きくダメージを受けた。そして『愛知』の上空で太いレーザーを放つた思世も驚いている。その威力はもはや軍艦に搭載するものと同等の威力を持っていたからだ。撃つた思世も後ろにはねとばされて啞然としているしまつである。

「こんなに扱えばいいとはな……荒神！ 生きてるか！」

『問題はない！ 敵の動力炉を打ち抜いたみたいだな。だが、サブのエンジンが起動しているようだ。俺は中にはいつて行った連中を追跡する！ お前らは急いでシールドを融解させるプログラムを作成してくれ』」

「ああ、解っている。こちらも水無月が倒れたせいで少しばかり大変なんだ！」

「了解！ 俺は急ぐ、通信は電信で頼むぞ！」

「メールと言え！」

零紫と矛が無造作に旗艦の内部を爆破したせいで緊急指令のアラームが鳴り響き後から侵入した荒神のいるエリアが防衛強化された。そこでは機械仕掛けの四足歩行戦闘兵器が作動し彼に襲いかかる。だが、荒神はそんな修羅場を幾度となく乗り越えた超人だ。そんな彼にはそれほどの敵ではびくともしない経験という名の力がある。荒神は扉を切り分けながら次々に奥へと侵入しある部屋にたどり着いた。

「……人でなしどもが……。こんなこととして許されるはずがない……」

その部屋には人間のクローン兵が詰められていたのだ。それも個体の数は知れたものでないほどいる。荒神はそれを育成停止状態にし動いた。その頃の零紫達も大きな壁にぶつかっていたようだ。敵の旗艦の制御は管制室の数人の人間で行っているらしい。それが中央のエンジンにシエルト並の厚さがある防護壁を張ったのだ。彼らでも簡単には切り分けられない。シールドは電子や薄い原子の構築でできる極めて簡単な形状だが原子が複雑にルミ居る防護壁は簡単にはが通らない。ここでは皇太と零紫が機転を働かせた。

「零紫さんはどう思いますか？」

「お前と同じことを恐らく考えている」

「劣化させますか？」

「ああ」

零紫と皇太が手のひらの前に各々のエネルギーを集中させた。皇太のエネルギーは黒くもやもやした物だ。どのような物なのかは解った物ではないがそんなことを行っている暇ではない。敵兵が近づき矛と紫神が一時的な迎撃に向ったからだ。皇太のエネルギー波がぶつかった場所が赤く光り出しその部分が溶けていく。そこに交代するように零紫が金色の波動をぶつけシエルターを破壊……その奥には真つ赤に光この旗艦を浮かせる程のエネルギーを作り出すメインエンジンに遭遇した。荒神の見たてではサブのエンジンが作動しているという所だった。だが、そうではなく自己修復機能で八割がた回復しシエルターで困った形になっているのだ。

「うおおおおお！」

「砕けましたね」

「ここからは私がやる。矛を残しておいてくれればいい。荒神主任が来てると思うから主任と合流し次第脱出しましょう」

「なかなかいいプランだな」

「ええ、流石ですね」

そこに運がよいのか悪いのか荒神が敵を引き連れて逃げ込んできた。そこに零紫が剣を構えて殴り込み荒神救出と同時に篠が策を動かした。エンジンの周りの空気が凍結し遂にはエンジンの金属部分が外側の温度との大差について行かず熱疲労で……砕ける。内部の燃料が溶けだすという面倒な展開を迎えるがここからは荒神の経験によって味方は皆安全に脱出し生き残る。

「なかなかあの時は驚いたよな」

「うん、篠にはそんな力があつたんだね」

「ん……」

「何で黙るんだ？」

「は、恥ずかしい」

普通の日常に戻った彼らを襲ったのは今度は……考えもしないような事実だった。それはいきなり通達され集められたのは極数人だけ……。その内容は……公表されるのはまだ先である。

「はあ……」

LOST MAD KNIGHT

ある大事変的な出来事が起きた。その事に動揺したのは思世以外のガイアの関係者の全員だった。特に憤怒に近い状態で思世に掴みかかったのは零紫と夢路である。零紫は父親の急変を知らされず亡くなつてからその事実を伝えられたことからだ。もう一人のつかみかかった人物である夢路は彼も絵藤と同様の存在だと言うことが深く関係している。彼も幼なじみでかなり親密な関係だったためそういったことはちゃんと連絡して欲しかったらしい。目の前で別れをしたかつたと、その時の夢路は小さく呟いていた。しかし、つかみかかった二人も思世の鞆から取り出されたディスクを見てから表情が一変したようだ。何が言いたいのかは彼らにはすぐにわかる。広い会議室の暗幕が下ろされ大きなモニターの下に設置されているパソコンに思世が近づいて行く。

「おい！！ 何でそんな重要なことを隠してたんだ！」

「そうですね。何ですか！ 主任！」

思世が取り出したディスクは三枚。そして、小さく言葉を告ぎディスクについての説明をした。一枚がガイアの重官に見せるための物だという……。二枚目は驚いて口が開きっぱなしの零紫に手渡されていた。三枚目は思世によってその部屋のパソコンに挿入される。その数秒後、モニターに映像が映った瞬間にそこにいる全員が凍りついた。モニターには信じられない光景が映し出されていたからだ。屈強で見るからに筋肉質な荒神の顔はやせ細り目は落ち窪んで肌は荒れ、見る影もない姿でベッドに横になっていたのだ。しかも、力なく上体を上げることまでもができないかのように横たわったまま……。その彼が口を開くと彼が深刻な理由もなく口にしなない謝罪の言葉が飛び出す……。皆が驚き誰も口を開こうとはしなかった。そ

れに彼の声は弱々しく彼らしい強く男らしい声ではない。まるで……この数日の間で一気に何十歳も年を取ったように感じられる……。そんな様態なのだ。

『このディスクを見ていると言うことは俺は既にこの世にはいないと言うことだ。だが、今はここに俺がまだ存在していると思っ
て欲しい。集まってくれた皆、こんな醜い姿を見せてすまない……。俺はここでお前たち『ガイア』の皆や家族、部下の鬼神隊の皆に謝らなくてはならないと思っ
ている。すまない』

敵かだが力のないその声……。それを聞いてまず泣き崩れるのは彼と共に幾つもの死線をくぐり抜けた『特務機関特別高機動科学隠密部隊』、別名を『鬼神部隊』の兵士達だ……。皆が一樣に涙を流し、声を上げじと歯を食いしばる者や上を向いて口を嚙む者、下を向き机に拳を打ちつけた者、手で口を覆う女性の兵士、背中を向けて泣いていることを隠す者。誰もが痛ましい彼の姿を見ていた。酷くやせ細っていたのは病気の影響らしい。それでも、屈強だった荒神の面影はあり精神は病にむしばまれることなく保っている。

『零紫……琴乃、美琴、巖……俺は短い間しかお前らに尽くしてやれなかった。すまない』

彼も涙を幾筋も流している。だが、笑顔を崩さないようにしているらしい。眉間と頬が小刻みに震えていたのだ。そんな荒神を涙を流しながら四人は見ている。今頃気づいたがシンボルのような左腕の義手は外されたらしく元の位置には見当たらない。そんな状態である荒神の右腕には大きな切り傷や火傷、縫った痕が多数ある。それが丸見えだが本人は気にはしないらしい。いや、違っ
のだろう……。そんなことを気にしていられるような体調ではないということなのだろうか……。いつもはつなぎを着ている荒神が肌を見せるこ

とはないため、その歴戦の傷跡が初めて多くの人の目にさらされたようなものだ。その傷に関してはガイアの重鎮や改造人間、鬼神隊ですら息を飲む。それほどまでして彼はこの生まれ育った大地を守りたかったようだ。そういう強い意志が見とれるから……。そう、彼の意志が……。

『謝るだけでは進まないな。言葉も残しておこう。そう……、俺はお前たちに言葉しか残してやることができなかった。命もあと少しでつきるだろう。俺の病は既に治らない域に達していたようだからな。最後にこのディスクにはこの言葉を残しておく。』

ありがとう、これまでの事は感謝している

』

荒神の言葉が終わり荒神が疲れたように溜め息を弱くした直後だ。すぐに画面が黒くなりディスクがパソコンから出てきた。最後にディスクを取り出した思世が机を思い切り拳で殴りつけたまっぴり目を閉じてから一度椅子に座るような動作を取ったが思い止まったように立ち上がり……。座ろうとせずもう一度上を向いた。彼は右目が眼帯である。上を向いた彼は健康な左目から大粒の涙をこぼしながらもう一度だけ溜め息をついて落ち着かせた後、大きく叫び……。椅子に腰から崩れるように座った。そのような思世はこれまで誰も見たことが無かつたろう。彼は荒れることが少ない人物だけにガイアの重鎮も驚いている場面だ。だが、誰もが彼の心中を察していた。彼は荒神本人から死のタイムリミットを知らされていたのだ。だが、その時には彼の病状は回復の兆しがないところまで進行していたという。

「主任？」

「思世？」

「貴登……どうした？」

「……俺も心残りだ。今でも生き残ってる軍友は既に俺達三人だった……。それがまた一人……。あの世に旅立ったんだ。貴登の気持ちは痛いほど解る。それに、何かしてやりたくても荒神は自ら運命を受け入れてそれを拒んだろうからな。ヤツはそう言う奴さ」

空雅の言葉が挟まれた後、二度目になるが叫ぶように不本意な先立ち方をした親友の名を叫んだ。本当に悔しそうに……。天にも届かんばかりに喉笛が張り裂けそうな叫び声をあげた。本当に悔しかったに違いない。

「荒神——————!!!!!!」

今、このように周りの目をはばからずに思世 貴登管制主任が米粒の涙を流したのはこれが初めて最後となっただろう。残りの渡されたディスクには見る人間が指定されていたため誰も無理に食いついたり野暮などはしない。荒神がそう言ったことを最も嫌ったからだった。『鬼神部隊』や他の荒神に深く関係し指定されていない人物達が潔くその部屋から出ていったようだ。そして今、部屋に残ったのは……。まずはガイアの文官と武官、改造人間の少年少女、琴乃他数名の一般人だった。ここからは親しい人間にしか明かされない事実が待っているという事だろう。

『二枚目に移ったか……。俺の命が短かったことは誰一人知らなかったと思う。途中で思世にバレたのは誤算だったが……。今の俺はそれでよかったと思っっている。俺の弟と部下として巖磨 角は成人し今はガイアの重鎮になった……。それに零紫は琴乃との出会いを受けて完全な特殊な力を持った人へと進化して命が繋がれ、俺の人間としての任務は終わったわけだが……。』

「お、おやじい……。お、俺……」

「……」

「お父さん……」

解りきったことだが顔色や血色は良くない。やせ細ったその姿は痛々しい以外の何ものでもなかった。あのしつかりとした腕と首はやせ細り骨や血管が妙に目立ち……肌はしわが濃くなって先ほど様子としては語ったが目が落ち窪み鼻が際立っている。そんな彼は前までの健康だった彼ではない。皮と骨と薄い筋肉だけになったその体は既に人とも思えなかった。……そうすると、こうも考えられないだろうか。荒神のような超人的な体力と精神力がなければ既にこの世にはいなかった……とは。思世以下『ガイア』のメンバーで戦闘に関与し長い間彼と共に『愛知を』守り抜いた重官たちは皆そう思っていただろう。

『お前らには生きるための志をもらった。俺の人間としての人生はここで幕を閉じるが……心配ない。旅出の燃料補給は十分だ。俺の意志は息子である零紫と弟のような角が受け継いでくれるんだ。これほど嬉しい事はないからな。残りの気がかりなのは……琴乃、自分の気持ちには素直になつてくれ。俺のように手遅れになる前にな……。それと己を恐れるな。自分が信じられなくなればそれは憎悪や悪感が襲う原因になる。零紫……お前もだ。それから、矛、篠、皇太、紫神、君枝、お前達にもそれぞれに期待を持っている。お前達が俺たちからガイアを受け継ぎ大きな地位を占める立場になつたら……このガイアの創設に立ち返れ……俺と俺の同士の誓いの地へ。俺はお前たちを信じている』

夢路は既に俯き、前のモニターを見れず、『ガイア』のマークがついたスーツのズボンには大きな涙の染みが出来ている。絵藤は泣くことはないが厳しい面持ちでその言葉をかみしめていた。幼なじみの二人は彼の性格をよく知っている。だから彼がどんな思いをしているかすぐに理解できるのだ。その二人以外にも水無月と空雅の

二人共、自分の服に付けられた『ガイア』のマークを手につかみ眺める。空雅の場合は軍隊式に胸に勲章のようにつけられた『ガイア』のマークを握りしめているが……。彼らのそんな動作の中、ディスクから荒神の最期の意志を『ガイア』の上官達に伝える言葉が厳しく飛んだ。荒神もその時だけは全く笑顔を作らず低く厳しい声を放つ……。

『俺の今の感覚だとな……。お前達は俺のことを悼んで『ガイア』をあげて追悼しようなんて古臭いこと考えてるんだろう。そんな無駄な事を考える暇があれば前を向け。人はいずれ死に土に、空に、海に……。各々の帰る所に帰っていく。早いか遅いかだ。お前らには俺の意志を告ぐ義務がある。よって、最後にこう残そう……。

我らが『ガイア』に末代まで……。永久に栄光があらんことを……。

その映像が止まりディスクが出てくると『ガイア』の重鎮と改造人間達が角と零紫以外、全員出て行く……。その数分後には荒神の『家族』と呼べる人物達だけがその部屋に残った。琴乃は零紫の胸に頭をうずめ泣いているのを隠している。美琴は大つぶらに巖磨に泣きつきわんわん泣き続けているようだ。零紫が立ち上がり三枚目のディスクを中に入れる。すぐに画面が先ほどまでと同じになり白いガイアの医療機関によくみられる病室が背景に映る。

『ここまでくればもう解るだろう。これからはお前らの時代だ。俺が古い時代を引っ張っていた昔の仲間の世代交代の中で最初になっただけの事……。まあ、お前らが泣くのは止めはしない。お前達はまだ幼く子供だ。角、これから美琴や琴乃、零紫の事を頼むぞ……。そうそう、頼みたい事がある。以前から俺は死期を悟っていた。だから、俺は心残りにならないようにお前らにはいつも最高の手を差

し伸ばた。特に……零紫と琴乃……角、美琴とは仕事や家族のふれあいの中でも……ゴホツ……すまない』

血飛沫に近い咳をして顔をしかめる荒神の顔を零紫が真剣に見据え出した。既に彼には腕を動かす力すら残っていないようだ。画面の中の彼はそれを気にして欲しくないように真剣にこちらを見てきている。零紫はそれに答えていたようだ。その間も角はずっとその状態だった。彼はこの中で一番、荒神と過ごした時間が長いという事も関係しているのか思い出や時事が多い。だから、荒神の性格も熟知している。そんな彼は荒神が最後に残してくれたこの映像を彼の望んだであろう姿勢で見定めようと決めていたのだ。

『俺も人間だから死ぬのは怖い。だがな、俺はお前らと居れたことで救われ、これまでの苦痛を振りきれた。だから、未練ややり残しはない。そして、俺が居なくなってお前らがどんな感情を覚えたとしても俺はここでお前達に正式に別れの言葉を告げたかったんだ。こんなダメな親父ですまなかった。余談だが角と美琴の関係には気付いている。結婚するなり何なりしろ、お前らの自由だ。だが、これだけは約束してくれ。ラボに……ゴホツ……残した……『命』を必ず育ててくれ』

角がいきなり……ハツとしたように立ち上がり部屋を出て行った。それを追うように美琴も走る。琴乃と零紫は二人でまだ告がれ続けている父親の声に耳を傾けている。彼の声は朝顔の花が時間を追うごとにしなびて行くがごとく………どんどん弱くなり聞こえづらくなって行く。口から血の筋が流れカメラが揺れている。誰かが荒神に頼まれてカメラを回しているのだ。

『俺の経歴に……関わらず零紫……お前が荒れるのは……解る。だが、覚えて……おけ。お前は……うつく……俺の生き……移しに近

い。『暴力は無限の憎悪の根源』だ。絶ち切……れない輪を……はあ、はあ……作るならお前が……それを止めるんだ。いいな……』

「父さん！」

「お父さん……」

『最後だ。お前たちには……この後、思世に案内を受け『ガイア』の最下部中央動力炉に向ってくれ……お前達には期待している。…

…俺の……ぐふっ……じ、自慢の子供……はあはあ……だった。これまで……ありがとう。じゃあな……はあ……我が子たちの永久なる……ピ
ッ
』

言葉は最後まで告げられることなく荒神の死を告げるアラームが病室に鳴り響く。それでも稼働し続けるビデオカメラと思われる物の前に細身で長身の男性が写り荒神にかけ寄って叫んでいる。声と体形からすると思世だろう。だらんとベッドから垂れた荒神の右腕が目立ち琴乃が遂に映像から目をそらし最後にプツンと音を立てて映像が切れても泣き続けていた。零紫ですら琴乃を抱きしめながら声は出さないが大粒の涙をこぼし泣いている。……それから数時間後に零紫は思世に呼び出されていた。琴乃もついでにそこに招かれ机の上に置かれていた荒神の遺物の数々を彼ら家族に引き渡す作業がなされている。荒神は自分に死が近いことを既に知っていたと映像の中でも告げていた。そのため、彼らが生きていけるだけの備えをしておいてくれたのだ。そして、その中の一つを思世が取り上げ零紫に近づき彼の学生服に留めた。『ガイア』の正式なマークの裏側に何か描かれたまた違うバッチだ。零紫はこれを荒神の部屋で見たことがあるらしい。

「こ、これは……父さんの」

「『ガイア』の戦闘特殊部隊の総管轄を行う者の証……と荒神は言っていた。お前にやるつもりでいたらしい。アイツらしいな。それから、ラボの鍵はお前から兄弟に預ける……いや、やる。上手く使え。」

それと、荒神の病名と症状などを伝えておく。『細菌性人分解食バクテリア』……弱い菌であり繁殖もしないし飛沫で飛んだ瞬間に死滅するような菌だ。しかし、アイツの体には体内の各機能とリンクする義手などの金属パーツが付いていた。医者はそこからの感染だと断言している。腐食の始まりも左腕からだと言っていたしな。痛みも相当だったらしい……ただ、これは初期に発見できれば治った病だった。だが、荒神はあえて自分を犠牲にしたんだよ。何故かは解らないが……」

「父さん……、何でそこまで……」

「それから、琴乃。君にも荒神からメッセージがある。君だけにだ」「え……アタシですか？」

「ああ、『不安に煽られず自らを芯にもって己の意志で守りたい物を守れ。力は……そのためにある』とさ」

琴乃の表情が凜とするのを確認し部屋の隅に有った台車に乗せて遺物を元荒神のラボに運ぶと……。そこでは琴乃の姉である美琴が赤ん坊を抱いているではないか……。零紫は何のことか解っていたが琴乃は状況が読めずに尻もちを突いた。白い髪で……どこことなく荒神に似ているその赤ん坊は……。

「お、お姉ちゃん……。隠し子なんて居たの？」

「ち、違っわよ！ ああああ……。ごめんなさいねえ……。よしよし……。この子はお父さんのクローンよ」

「やはり……」

「ああ、親父はわいによくクローンメーカーの機動を言い付けとったんや。今回はそれが上手く作動してこの子が出てきよったんよ。まあ、普通は上手くいくんがな」

「じゃ、じゃあ……」

「そう、お父さんよ」

「あ、でもなあ……流石にその呼び方はキツイでハニー」

巖磨が痛そうなた肘打ちを美琴から横つ腹にもらい呻くなか零紫が口にした。荒神 修羅。その名を持つ子を再びこの世に生きさせてもよいのではないかと……。白い髪と瞳の赤ん坊は零紫の手が頭に触れるとその細い指を小さな手で掴み笑っている。あまり笑わない零紫すらその笑顔には和むらしくまだ産毛のみの頭を軽く撫でると手を引いた。その赤ん坊は少し美琴が怒鳴ったくらいでは泣かず逆に笑いながら美琴や他のメンバーを見ている。特に零紫へは何かを感じたのかしきりに両手を向けていた。可愛らしい赤ん坊は彼らの新たな家族になったのだ。

「そのまま……荒神 修羅でいいんじゃないのか？ 兄さん」

「お、おま……今、兄さんって」

「そうね、うん。そうしましょう。でも、この子女の子なのよね……」

「へ？」

「どういうこつちやねん。クローンは言わば人間のコピーやぞ？」

「どうもこつちも無いわよ……」

零紫が奥のクローンメイカーを調べに行った。どうやら荒神からもう一つメッセージがあったようだ。付箋のようなメモ紙には走り書きの言葉がかかれていたらしい。彼は幼少時から争いに関連する生き方をしてきた。そのため彼が一番感じこれからその赤ん坊の未来を想像した時、その子のため何をすべきかを荒神はわかつていたのだ。昔の彼には無く、今の赤ん坊にはある暖かな家族が彼の生き写しを守ってくれると信じて……。現世にいる最後の彼が残した……その子のこの後を……。守ってくれと。

『戦いに身を置く事なかれ……この魂は平穏にあれ……また、望むのであらば……背を押せ』

零紫がそれを説明しつつ三人にその紙切れを見せる。この子には争いに関与して欲しくないという現れと見られたようだ。それ以外にもいろいろの意味はあるのだろうが今はそれだけを胸にしまい生まれてきたその子を皆で慈しむことを決めたい。それから2、3日したがこのような地下のラボの中での出来事は大きく公表されることはなかった。しかし、荒神の病死は『愛知』や他の空中要塞都市などの大型都市へ大きな衝撃を与えた。その弔いの儀式には過去に荒神と交友のあった諸外国や地域の重鎮的人物が幾万人と集まって盛大な葬儀が行われた。そんな中、ただ一人……その男は違う所に居た。いや、『ガイア』の重役達は誰一人として……形式的に参加する遺族の角以外は誰も参加していない。思世は荒神が未だに生きていたような不思議な感覚さえ覚えていた。それを振り払うために荒神も言い残した『ガイア』の誕生した場所にいたのだ。

「荒神……お前が最初になっちまったな。ここに名を連ねた俺達の最初の遺体はここに葬られる。だが、何故かお前で良かったような気がするんだ。ここに来るとそう感じられる。この……生命の起源に触れるとな……荒神」

そして、また変わらぬ……毎日が始まった。朝の日の出とともに巨大な増幅炉に陽光があつめられ、彼ら『愛知』の住民達が生活していくうえで必要なエネルギーを供給していく。他の場所では空気中の水分を集めてる過し飲み水を作り出す施設が稼働していた。そんな街の一角にある浄水施設の上を抜け、貿易センタービル街の中央にあるサーバーホールタワーのど真中を颯爽と通りぬける少年がいる。その横には白く髪の毛を脱色した少女がいた。学校に入るとすぐに教室に居る彼らに集る他の生徒達……。茶色の髪がいきなり真っ白になっていたのだから確かに驚くのが当然だ。緩い天然パーマがかかったその髪は陽光が撫でるとキラキラと輝く……。その後

るからそれを心配したような零紫が現れた。頭一つ身長差があるためすこし目立つようだ。彼にも表立っては解らないが髪を伸ばし始める決意をしたらしい。

「こ、琴乃ちゃん？」

「ん？ どうかした？」

「え、やあ……、その髪の毛。確かに御父さんが亡くなったって聞いたけど……」

「うん、どうかな、お父さんの真似なんだ。かつこいいでしょ？」

白い髪

「俺は止めると言ったんだがな……父さんと琴乃は違っただから……」

……

「剣刃君……」

「いいじゃない。お姉ちゃんも結婚するんだしさ」

そう、美琴と巖磨も婚約をし美琴が大学を卒業後に結婚するとう話だ。まあ、脈絡も話題の趣旨も吹っ飛ばした話題だが……。零紫は呆れながら伸ばし始めた髪を撫でつける。そこに矛と驚いた顔の篠が入って来た。篠は目を丸くして琴乃髪を眺めている。驚く理由は琴乃の髪だろう。矛はそれに賛同していたが水無月も驚いたくらいのことである。……それでも、事が事だけにあまり深く触れずに軽く流す方向で行くようだ。荒神の死後は巖磨……今後は角と呼ばう……。その零紫と角が戦闘系部門と建築系、開発系部門を分割して受け持つことで同意し、管理するらしい。そんな中……弱まったと見れば付け入る者は居るのだ。敵の部隊は戦闘系空中旗艦が多数、潜水系の軍艦、旧式の海面戦艦が出動して後方には空中要塞とそれを守るマザーシップが五機、敵はその大軍団で攻撃を加えて来た。恐らく……他の日本分割系都市の連合軍だろう。世界の全体にみられる情勢として緊張崩壊戦争後は各都市ごとに食糧自給が深刻な問題になりつつある。そのため表沙汰にならない小規模な戦争は

数多く起こっていたがこのような多数侵略などは見られなかった。それに『空中要塞愛知』は特別な位置に居る。エネルギーを太陽光からより円滑に吸入し水を空気から得て濾過する革新的な技があるのだ。しかもその中で『空中要塞愛知』は数少ない自給自足のできる都市である。そこを植民地にしようという魂胆だろう。荒神の力がそれだけ大きかったという話だが、零紫達も黙ってやられる訳にはいかない。『空中要塞愛知』は緊張崩壊戦争後急激な人口低下を受け今何とか人口を保ち始めた島だ。そんな状態のここを攻撃される訳にはいかないと言うのもある。荒神の資料にはそう残されていた。零紫は角と協力し『荒神』の名を継ぐ決意をしこれから新たな力として『ガイア』の新星になると決意もしている。その彼に初めての大きな波が現れたのだ。

「俺が行く」

「零紫？」

「父さんを失ったからと言って……この『愛知』は負けない！」

「それならアタシも行く！」

「……解った、無理だけはしないでくれ」

零紫は思世の許可を経て琴乃と共に出撃。他の部隊としては『静岡海中戦闘機団』の指揮を執るのは矛だ。彼も一応の事、静岡の『改造人間』である。だからその地域的な観点や慣れから海中戦闘には慣れているのだ。そして、空雅の飛行大隊が今回は全部隊出撃する。敵の数が恐ろしく多いらしい。そこに警護として付くのは篠。彼女の力で彼らを弾幕から守ることも可能なのであるからだ。夜井兄妹と共に『鬼神部隊』も参戦し荒神へ自立したことを見れるため海面に浮かんでいる戦艦に殴り込む。水無月や夢路も今回は全ての部下を動員し荒神を失って弱まったと思われるガイアのイメージを覆すために本気で行くらしい。他の部隊を振り切るように先陣を切って急降下していくのは荒神兄弟の兄と妹。零紫と琴乃だ。戦闘訓

練のたまもので琴乃もそれなりに戦えるようになっていた。敵の戦闘機編隊を八工を落とすように構えた双拳銃の弾丸を的確にエンジンタンクに打ち込んでいく琴乃。荒神が作り上げてくれた高機能的な彼女の力を最大限引き出せる双拳銃に撃ち抜かれる戦闘機は数知れない。黒煙を上げて次々に落ちていく戦闘機の間を縫うようにエネルギー収束サーベルを両手に持った零紫が飛んでいく。彼が通り過ぎるとたちどころに五機ごとに編隊を組んだ戦闘機団は切り込みが生まれ爆破していく。敵の後方に見えるマゼーシップ……空中要塞……形状からすれば恐らく青森だろうが大きさがおかしい。……非人道的な施行に転換したとすれば多数の空中要塞を撃破し吸収したと考えるのが普通だろう。破壊行動に出れば『空中要塞愛知』もそう言う路線に乗ることができる。だが、『ガイア』の流儀ではそんな征服思想は湧かないらしい。あくまで征服者への鉄槌が目的だ。それに『空中要塞愛知』の現状ではできれば戦闘をしたくないと言ったところもある。

「零紫！」

「琴乃、大丈夫か！」

「こつちは大丈夫。一緒にいこう！」

「ああ！」

篠と矛の二分された戦闘機団が敵の“驚いて完全に浮足立った”旗艦群に牙をむく。空雅『黒燕』戦闘機大隊が五機編隊を組み機関砲やレーザーバルカンを乱射し続ける敵の旗艦の間を縫うように飛びぬけ旗艦群の後方あるマゼーシップを狙う。すると敵の攻撃旗艦は向きを変えて転進しようと動き出す。そのタイミングをはかって篠が力を解放する手はずだ。強烈にして曲げることの適わない一筋の氷のラインが敵の大型旗艦を打ち抜いた。旗艦群の一機は爆発し機首が傾いて落下していく。その周りで転進しようとした旗艦はエンジンが停止し側面の方向転換用の小型エンジンすら篠の完璧な制

弓によつて撃ち抜かれ凍結していき次々に海面に浮いている戦艦に衝突していく。ミサイルを放つて空中要塞本島下部を狙っていた戦艦は上から降つてくる敵の砲弾ではなく味方の撃墜された旗艦によつて沈められていった。皇太以下数十名の『鬼神部隊』は既にその現状に気付き空雅空軍の輸送機『蒼燕』によつて回収され今、現在は本土の防衛に回っている。

「氷は全てを終わらせる……。貴方達は私達を舐めすぎた……」

空雅空軍『黒燕』大編隊が敵のマザーシップ数機に接触し敵の自動操縦式の戦闘機を撃破し始めた。既に零紫と琴乃が触れていたためかなり敵の編隊はダメージを受けている。そこから応援を受けて力を徐々に上げ始めた零紫の攻撃が初期の彼を思わせない強力さになつて敵の攻撃などを寄せ付けけないのだ。零紫の力は明らかに琴乃と生活し始めて強大に膨れ上がっている。その力が今、敵のマザーシップに向けられているようだ。

「夢路君！ 的が下から弾を撃つてるよ！ 流石にあの数だとまずいよ！」

「了解！ 下方側面砲操作班稼働！ 座標軸セット！」

「A班完了！」

「B班完了！」

「他一同機動制御完了。セット不能位置の砲台制御班は他の班の補助にまわります」

『愛知』の下部にある比較的小型の砲台が口を開く。それが篠の落とした旗艦に運よく当たらなかつた空母や戦艦が飛行機を飛ばしたり主砲をこちらに向けて来ていた物へ狙いを定めた。次々に砲火の雨が敵の船に当たり大破もしくは爆沈させていく。これも荒神の遺産が働いていた。レーザーバルカン系の破装兵器を乱射しているのだ。その頃の海中では矛の指揮する海中戦闘機団が退却を始めて

中心にある動力炉を貫く。さらに敵の空中要塞の下部を突き崩し空中要塞が爆炎に包まれた。もう一機のマザーシップは怒涛の勢いでアックスを振り回す紫神に切り崩され落ちていく。その奥には爆発が止まらない空中要塞がみえた。一言に空中要塞とは言いがそれらにも形状や組み立てられた形はいろいろあり弱点も異なる。もちろん『空中要塞愛知』にもそれが無いわけではないがそんな部分を荒神が外面に露出させる訳が無い。確かに高度を取っていればミサイルでもない限りなかなか届かないだろう。だが、相手が改造人間だという事を考えなくてはいけない。矛は特徴を言えば腕力や脚力などの爆発的な筋力に特化した改造人間だ。その投げた槍が弱点だったらしい下部を貫いたのだからひとたまりもない。そこから琴乃と零紫が内部に侵入し終止符を打とうと上層に向うが……。

「なんだここ……」

「行き止まり……かなあ」

「う……」

「零紫？ 急にどうしたのよ！」

「石？ だと……前にも似た感覚を受けた。こいつは……」

琴乃がその石に触れるとその石が彼女に吸収された。直後にいきなり……要塞自体が揺れ始める……。琴乃が肩を貸し後から出くわした矛と共に脱出してなんとか『愛知』に帰還した。青森は緊急措置らしい海面不時着をしたようだ。『空中要塞愛知』本島の滑走路では思世以下数名の『ガイア』の隊員が彼らの出迎えをしてくれた。その後……。彼らは思世の案内で荒神の遺言にもあった『ある』場所に案内されて行く……。エレベーターが地下の知られざる階層に入ったエリアから零紫の顔色がどんどん悪くなる中、琴乃は不思議な感覚を覚えていた。懐かしいような……温かいような……そんな長年帰らなかつた故郷にたどり着いたような感覚だ。そして、零紫に似た学生服の少年の後ろ姿と……荒神？ 若い頃の彼のビジョン

が頭の中に流れ込んで来る。

「ここが……荒神がお前達に残した最後の未完成な……遺物だ」

「こ、これは？」

「解らない……アイツは『コア』と呼んでいたがな」

紫色とも桃色ともつかない光が包んでいる部屋の中で金属光沢のある六角形の物体が浮遊している。その中心部に人間をかたどった機械が起動していた。18対の翼と左右に掲げられた武具……翼を除けばは『ガイア』マークそのままではないか……。琴乃がそれへ惹かれるように近づいていく……。

「コア……」

「なんでこんなところに機械因子疑似生命が……」

「零紫……お前は解るのか？」

「父さんの研究だったからわかります。俺も手伝っていたので……。まさか……現物がこんなところに……おい、琴乃！ おい！」

琴乃の体に零紫を復活させた時と同じ金色のラインが幾筋も現れ先ほどの空中要塞で急に彼女の体内に吸い込まれた正八面体が現れる。それが空中で分解され二重の螺旋構造を描きながら気味の悪い赤に近い色をした桃色の光を放つ部屋の中で白く強い光を放った……。その後、真ん中の女性の形をした機械に組み込まれていく。それが何なのかは今、誰にもわからない。

「で、零紫……これは何なんだ？」

「これは上手く使えば究極の生体コンピュータのコアになるものです。しかし、父さんが言うには悪しき意志の有る者が使えば……これは恐ろしい兵器になり世界の終焉を迎えるというものと言ったことでした」

「何だと？」

「恐らく、父さんは前者を作成するためにこれを組み立てた……。しかし、原理までは説明しきれなかった……」

「なんでそこまで解るんだ？ 零紫」

「俺達、改造人間の遺伝子改造にはこの『コア』のナノメートルバ―ジョンが使用されているんです。これは恐ろしい程のエネルギーを生体内で生み出す代わりに使用者の肉体にとっても大きな負荷をかける……。だから、俺達は皆……短命だった。それを覆したのが……無限生体理論の最期の形である『創世主』なんです」

失神していた琴乃が起き出した。それまでは耐えていたらしいがこの部屋の空気が好ましくなくいらしい零紫の青ざめた顔を見ると琴乃が驚いて三人で再びエレベータを上り始める。零紫の体調が回復し琴乃も安心して最近、力の断片が見え始めた彼女は零紫に肩を貸しつつ帰宅していた。帰宅後は一度休憩しそれから……。

「ねえ、零紫」

「どうした」

「ん……、ここ教えて」

「ああ」

「ねえ……零紫……」

「どうしたんだ？」

「零紫はアタシのこと……どう思ってるの？」

「最高のパートナーだが……」

「そうなんだ」

「それがどうしたか？」

「う、うん。何でもないよ」

平穏な日々が再び訪れようとしていた。彼ら『ガイア』の記す年代記のような記録には荒神 修羅の死が刻まれ同時に新たな転機を

迎えた『ガイア』の新たな姿も記されている。そしてまた、新たな出来事が『空中要塞愛知』で刻まれようとしていたのだ。

零紫が少し伸びた黒髪を靡かせながら白い髪に色を落としている琴乃の前をエアシューズで滑空していく。琴乃はそのすぐ後ろを同じ位の速度で進んでいた。数か月前に施行された荒神の大規模改修以来、都市の形態や主要な道路が大幅に区画化され彼らの通学路にも変化が起きている。高いビルが立ち並ぶ都心区、昔は名古屋と呼ばれていたエリア。その中で円柱型のビルの壁面を回り込み着地してエアトレインのレール沿いに足を進め、浄水場と濾過施設が併設された施設の屋上で矛と篠の二人と落ち合い学校に向かう。いつもならば琴乃が話題を作るのだが……今日は彼女の様子がおかしく、そうならず心配になったらしい矛が零紫の隣につき話しかけた。この四人は外部の任務も、もちろん内部の任務も一緒に協力することが多く、その点でお互いの役割やリンクのしかたが暗黙の了解として形になっている。しかし、その形態が今日は歪なのだ。琴乃の存在……それはこのメンバーでのムードメーカーである。それが上手く機能しないと皆の波長がバラバラで上手くかみ合わないのだ。

「おい、零紫。お前ら……何かあったのか？」

「いいや、……あると言えばあったが……それまででしかないことだ」

「ならいいが……」

矛が零紫の横に付いたように琴乃の所には篠がついた。元々が無口で無表情、人付き合いの苦手な篠はあまり積極的に話しかけるなどと言う行為自体をしない。……が今回ばかりは心配になったようだ。少し先に進むと道がつながり更にそこから更に夜井兄妹が加わり学校に近づく。最近は学校の近くに近づくにつれて学生の往来が増え始めるようになった。目の隅に入れただけの例をあげれば忘れ

物をしたのだろうか……あわただしく血相かいてエアシューズで滑空する生徒、付き合っているのだろうイチャイチャしながら普通に歩く生徒、柄の悪そうな屯たむろしている生徒など様々だが……、こういう事は少ない。今が平和だからみられる光景なのだ。空中要塞都市に平和な事は少ない。なぜなら回遊都市や海底都市のように隠してくれる一定の自然事象が無いからだ。少し空に出れば丸見え……しかも雲に隠れることすらエネルギーの供給の関係から不可能で狙われやすい。……暗い話になったが、そんな『空中要塞愛知』にも今は平和な時間が訪れている。それを肌で感じるのも悪くはないだろう。もちろん、彼ら若き『ガイア』の新星達もまたしかり。彼らもまだ高校生だ。普通に生活を送って何が悪い。彼らもまた、悩み苦悩しながら生きているのだ。

「琴乃……大丈夫？」

「な、何で？」

「だって……、いつもは零紫と楽しそうに話してる。だけど、今日は全然話さないから……。喧嘩でもした？」

「え、喧嘩なんかしないよ」

「なら、零紫に……酷いことされた？」

「ち、違うよ！ うう、知りたい？」

「うん。知りたい」

「教室についたら教えてあげるよ……」

途中で加わった夜井兄妹は再び途中で別れ中等部の校舎が近い校門の方向へ向かっていく。改修後、高校や中学は区画に応じて再び分けられ彼らは『ガイア』本部に近い中、高等部が連立された学校に移っていた。今、その高等部にほど近いエリアに来ている。門はもうすぐそこに見えていた。あと少し、……そんな時、高等部の門の前で篠は核心に近づいたようだ。矛は何気なく門の近くで止まった篠や他のメンバーを遠巻きに呼んでいる。何が起きたのかと言え

ば……琴乃が一向にスピードを落とさないことに零紫が気づいて門の手前で彼女を受け止めたのだ。琴乃の頭はカクンと前に押されたように慣性が働き零紫の胸に衝撃を受け止められる。最初、琴乃自身は何が起きているかわからなかったらしいが零紫の手が肩に触れるとスイツチが切り替わったかのように、すぐに後退りして顔を真っ赤にさせた。

「大丈夫なのか？ 本当に……」

「大丈夫！ うん、大丈夫だってば……」

「俺の顔を見て言えるか？」

「うっ……、は、速く行かないと遅刻するよ！」

「一時間前だがな」

「う……あの……その……」

「零紫……その辺りにしてあげて」

その時は篠が救いの手を差し伸べて今回は男女の組に別れて教室に入る。その後、篠は『ガイア』に出入りしていて友好の深い君枝も混ぜてそれに関する話を始めた。もちろん、琴乃に対する配慮をし、零紫とそれにつながるのがある男子生徒や他の生徒に触れないようにだ。まあ……篠は天然というか少し風変りな感受性と趣向をもつていておよそ相談する相手に向いているとは言えない。いや、普通に見ても口下手な相手には相談しないし、たいていそういう人物はできるような人には見えないのだが……。まあ……そこは気にしない方向でいこう。今更気にしても仕方ない。

「二人とも……恋ってわかる？」

「魚？」

「篠ちゃん……下手なボケは止めてあげてね。でも、零紫君にしてるんだ」

「うん……」

「『LOVE』の方ね……。うん、零紫は鈍いから……」
「うん……」

担任教師である水無月が教室に入ってきたことで生徒が皆、急いで席に付き委員長の挨拶でホームルームが始まる。零紫も指定の席に着き琴乃は彼の二つ後の席のため三人は心おきなく文通できた。琴乃はノートの切れ端を……篠はいらなくなった書類を……君枝はいつも持ち歩いているメモ紙を使い手紙を回している。内容としてはガールズトークなども含めつつ琴乃と零紫の日常などから始まり生活環境などかなり入り込んだところまで聞かれたようだ。琴乃はその話題が続いた間、終始顔が赤い。水無月は三人が文通していたことをとうに気付いていたが『ガイア』関係者であることもあり三人にはそこまで深く干渉はしに行かないらしい。『ガイア』の関係者として名を広めて居るのは若い世代の零紫達だけで水無月や夢路などは実質的には明らかにしていない状態だった。彼ら文官組は荒神のように戦闘力が高くない。そのため暗殺や拉致などから身を守るには身を隠すしかないのだ。

『で、琴乃は零紫に何かしたの？』

『してないよ』

『意外と奥てなんだね』

『失礼な……アタシだって女の子なんだから』

『いや、琴乃はお父さんにそっくりな手腕を持っているからね。私も少しは手を尽くしたのかと思っていたんだけど』

『手、ねえ。有ればやってるわよ』

昼の休み時間。いつも5人で行動する『ガイア』の女性陣三人と男性陣二人。だが、今回は零紫と矛を輪の外にはじき出したため零紫と矛は屋上にいる。彼らは今や荒神の遺言もあり一気に上官クラスに昇格していた。そのため『ガイア』関係の実務や戦闘訓練など

もかなりある。今は自主的なトレーニングだろうか……木刀を振る零紫の横では矛が握力を鍛えながら話しかけていた。

「しかし、琴乃はどうしたんだかねえ」

「ん？ まあな」

「なかなかドライな反応だな」

「何がだ？」

「巖磨主任と琴乃の姉さんが結婚するんだろ？ それに触発されて誰かに恋心でも抱いたのかもな」

零紫の振るっていた腕が一瞬止まりまた素振りを始めた。矛もその後、その話題には触れずにダンベルに切り替えてトレーニングを再開する。昼休みが終わり五限の体育の時間を迎えていた。内容として無難に跳び箱と体操の授業だ。男子は跳び箱で女子が体操の授業である。女子の専らの行動は零紫に集ることだ。高い跳び箱であっても軽々と飛び越える彼のジャンプが成功する度に女子は明るい声援とラブコールを送る。しかし、零紫はそれを眼中に入れていないのか普通に男子の方に歩いていく。実は女子生徒達の間ではクールでカッコいいと言うのが定評らしい。だが、零紫自体は全く飾らずありのままを見せ普通に過ごしている。……と言うよりは素っ気なくして鬱陶しいらしい女子を引き剥がしたいようだが……明らかに逆効果になりつつあった。広い近代型のシエルター式体育館に跳び箱の踏切台の音やマットに尻餅をついたりキャイキャイ騒ぐ声が響いている。

「凄い人気だね。零紫君」

「うん、そだね」

「露骨にがっかりしてる。確かに競争率は高いだろうし……大変ね」

その時、実技の順番が回り琴乃が教師に名前を呼ばれ構えに入る。

マツト運動系の体操で体の柔らかい彼女にはお手のものだ。荒神との訓練の賜物でもあった。マツト上で技を素早く……しかも美しく決め男子からも女子からも脚光を浴びている。琴乃も零紫に負けず劣らず周りぬ生徒から人気が高い。元『ガイア』軍事機関の中のトップ3の一人だった荒神の娘だと言うことも関係してくるが彼女が綺麗なこともある。この半年……最近になって成長が著しく、容姿端麗でスタイルはモデル並、白い美髪を靡かせる姿など優美という言葉がよく似合うほどだ。そんな彼女は零紫の視線に気づくと顔が真っ赤になっているのを見せないために俯いたように見える。矛はそこでピンときたのか篠に話しかけていた。

「なあ、篠……」

「やっぱり気づいた？」

「気づかない方が不自然だと思っぜ……」

放課後は男女の組に別れて帰る。矛に招待され思世邸に入った零紫は職務関係で呼び出されていたのだった。思世は日中も夜も業務を『ガイア』本部でしているため、この豪邸には誰もいない。強いて言えば全自動の掃除ロボットと同じく全自動で防水、エネルギー自動吸入式の監視カメラ付き侵入者撃退ロボットなどが動いている。それ以外は見当たらず思世の書斎の目の前を通り抜け応接間に入り彼からの任務や現状の報告などがなされた。その頃……女性陣は……。

「フーン……矛君も気付いたんだ」

「私に申告して来た。でも、当たり障りない返事しておいたから……アタシってそんなに解りやすいのかな？」

「うん……」

「篠ちゃんは少し正直すぎ……」

「でも、気持ちちは伝えた方がいいと思う」

そこに用事終えた零紫が現れオープンカフェにいる三人を見つくと近づいていく。篠と君枝は気付いたようだが琴乃は死角になると軽い怒りから気付かずに零紫の事を口にしながらケーキを食べ続けていた。零紫は不思議そうにその話を聞いていたのだが……途中で気になるワードが出たらしく……琴乃に一度呼びかけるが普通に流されている。篠と君枝が琴乃の背後を指さすと……。

「零紫は……はむ、鈍いから……モグモグ……気付かないのよ」

「ちよつと……」

「いつも、いつも……もく……あらひは……まっへるのに！」

「琴乃……」

「やんなっちゃうわよ！」

「琴乃……」

「あーあ、……お父さんも昔はそうだったんだろうなあ。あの人、恋愛には疎そうだし……」

「おい、琴乃」

「ん？」

「後……」

「背後……」

琴乃が振り向き啞えていたフォークから手を離して落ちた。零紫の困ったような顔が間近に迫っていたのだから……当然と言えば当然だろう。口をパクパクさせ顔を真っ赤にさせていた。零紫は琴乃に会話をする前に琴乃の口についていたクリームを指でとり舐めてから琴乃を問いたです。オープンカフェでは零紫と琴乃の行動に皆の目線が映り数分間だけ時間が停止しているようだ。何故ここまで彼女に零紫が干渉するかと言えばただ、心配しているだけである。零紫が心配しているのは『コア』の格納室に入ってから琴乃の行動や感情表現が以前の琴乃と比べるとおかしい事だった。付き添いの

二人も顔を見合わせるようなことになり……かなり驚いている。時々、零紫は行動に歯止めがかからないことがあるのだ。

「ほら、クリーム……」

「んん……」

「甘いな……。で？ 俺がどうのこうの言ってたが……俺がどうかしたのか？」

「え、いや、その、……零紫こそこんなところでどうしたのよ」

「俺は矛盾の家に寄った帰りだ」

「そうなんだ」

「で？ 何なんだ？」

琴乃が言いくるめることができず君枝が助け舟を出した。それから零紫は思世の指示で例の生体コンピュータ、『コア』と呼ばれたあの不気味な機械の解析を始めている。琴乃より先に帰宅し机の上に広げた父親のレポートを見比べてデータの変化や彼の見解を参考にした。『コア』の作成に入ったのだ。思世曰わく……『恐ろしい故にアイツは解析を急いでいたんだ。俺達にアイツが残した課題なのかもしれん』と言うことだ。零紫の中ではその通りだと答えが既に出ている。荒神がいかに高名な学者に近い技師でも説明すらできなかつた異物……。それを自らの手で切り開きその姿を突き止めなければ『ガイア』、いや、人類に未来が残されていない可能性すらあり得るからだ。地下のラボでそれに没頭していると……琴乃が帰宅したことを示すドアの開く知らせがあった。ドアにつけられている鈴が高い音を響かせながら歌ったのだ。零紫が作業台の椅子から腰を上げて梯子を使いダクトのような細い管を体をぶつけないように通って地下から荒神家宅の一階に足をつける。

「ただいまあ……」

「お帰り」

「零紫……」

「どうした？」

「え、あ、いや、そのね……。アタシって変かな……。最近」

「最近少し変化が見られるな。だが、変ではないと思う」

「そう、ありがとう……。先にお風呂入るね」

零紫は応答するように頷き片付いた部屋の中を歩いて行った。キッチンにむかったようだ。琴乃は宣言通りに浴室の前にある脱衣所のようなスペースに入っていく。零紫は何でもできるため万能の才気がつかげえる。料理を始め自炊などお手の物らしく琴乃が出てくるまでに食事の支度などは殆どをこなしていた。そして、その時……彼の心の中で何かが引つかかっている。それは琴乃が起こしたあるトラブルが元だ。だが、核心には近づけない何かまだ、足りない要素があるらしい。

「修羅……」

ヒタヒタと水がまだ滴る足音がし零紫は不振に思っていた……。そして、琴乃の細く白い腕が自分の胸の辺りに巻きついたことに明らかに動揺している。しかも、名前が……。父である『修羅』だったのだ。零紫は動揺から少し乱暴ではあったが腕を振りほどきキョトンとしたような琴乃に振り返り目を見た……。だが、そこには琴乃の優しい光が強い生き生きとした目はなく魂が抜けたような暗い瞳があったのだ。零紫は更に驚き肩を掴んで体を揺さぶりながら琴乃の名を何度も繰り返して呼びかけた。その後、彼女が急に意識を取り戻したのを確認するとエプロンを取り琴乃に被せて彼女の部屋まで抱き上げて運んでいく。琴乃もパニック状態らしく全く抵抗をしていなかった。零紫としてはそれも不振に感じていたのだが……。

「修羅……アタシ……ずっと待ってたんだよ」

「琴乃？ 琴乃！ 大丈夫か？ おい、琴乃……」

「あ……た……しは……美麗……」

「しつかりしろ！ 琴乃！ おい！！ 琴乃！ 琴乃！」

「はへ！？ あ、アタシ……何でこんな所……零紫？ キャツ！！」

零紫が琴乃が着替え終えたのをノックで確認して部屋の戸を開けた。零紫の手には暖かいココアがありそれはまだ、湯気が出ている。彼はそれをスプーンでもう一度かき混ぜて琴乃に差し出すと琴乃はゆっくりと両手で掴み黙って俯く。彼女が先程の出来事に整理がついていないとわかると零紫は何も言わずに部屋を出ようとす。しかし、琴乃は急に前を向いて……。

「い、行かないで」

「前にも聞いたが……本当に大丈夫なのか？」

「怖い……」

「だろうな。俺もそれは解る」

「うん……」

「心配するな……俺が付いてる。言っただろう。俺とお前が会った時に……。俺の近くに居てくれた方が……守りやすい」

琴乃は零紫の服の袖を掴み彼を引き止める。彼もそれに応じ椅子かけた状態で琴乃の近くにいる様子だ。ただし、お互いに視線は逸らしあっている。零紫の見立てでは彼女の部屋は普通に女の子の部屋といった感じだろうか……。飾りもそこそこでその年頃にも多い何らかのポスターなども見受けられる。それ以外には荒神の残した写真や小物などがあつた。時間がゆっくり流れ二人がだんだんと口を開き始めたころに大学から帰って来た美琴が階段を上がる音がして琴乃はその音を聞いた瞬間だけ体を震わせている。無駄な恐怖を煽っているらしい。とうの美琴は帰宅時に琴乃がいつもは明るく出迎えてくれるのだが、出迎えに来ないことを不振に思い琴乃の部屋

に入る。そこですぐに琴乃の様子がおかしい事に気付いたようだ。零紫は琴乃に許可を得たうえで美琴にことの起りから落ち着いて今の時点に当てはまるまでを語っている。その内に琴乃はココアが体を温め疲れと何らかの影響から深い眠りに誘われ零紫が抱き上げてベッドに寝かせてから一階に降り美琴との話し合いになった。

「そう……そんなことが……」

「はい。俺も驚きました」

「こんなことは私も初めてだから解らないわね。でも、何か琴乃に関係した事があるのよ。最近何かおかしかったもの、あの子」

それに関して零紫が断片的な事象に触れたが『ガイア』の機密であることを思い出し美琴に言うのをそこまで打ち切った。美琴も荒神の仕事の内容などから機密情報が多いことはわかっていたためその先には進まない。

「『コア』って知ってますか？」

「ええ、一応は伝承として知ってるわ。でも、それが関係するの？」

「琴乃は俺を生き返らせるまでに収束された何かの力を保持しています。恐らく『コア』も他の事象も何かしら関係しているんですよ」

次の日、琴乃は零紫の勧めで学校を休んだ。篠と君枝はそれを不振に思い零紫を問い詰めるが彼もそう簡単に口を割らない。その日は零紫について二人が彼らの家に来た。零紫も風邪などの病気ではないから移ることもないだろうといい来るのはよいと言ったのだが、彼から昨夜のことについて彼女らに説明されることはなかった。琴乃の部屋に二人が通されると零紫は早足にそこから居なくなる……。その日は彼に『ガイア』の仕事が有ったのだ。思世に疑似体の『コア』を提出しに行ったらしい。荒神のバイクにまたがり空

いている中層の普通車道を走り『ガイア』の本部の中にバイクを格納して思世の執務室に入り椅子に座ると十センチほどの立方体のケースに納められたそれを零紫が開き机の上に置いたがそれについていい顔はしなかった。

「これは未完成です」

「……そうか、やはり無理だったか」

「いえ、手に入る材料はこれで終わりです。ですから……言っしまえばこれで完成です」

「どういう事だ？」

「思世主任……隠していることは有りませんか？」

「何をだ？」

「俺は気付いたんです。父さんが俺達に話してくれた過去の皆さんの伝説的な過去にはいくつかの穴が有りますよね」

「ほお……で？」

「父さんの腕は確かに自分で切りおとしたと言っています……。ですが……。おかしくないですか？ だとしたら、彼はどうやって戦っていたんですか？」

他にも零紫の疑問点が幾つか思世にぶつけられた。最初の荒神の武勇に関してもそうだが彼はどのように戦ったのだろうか……。元々腕があつた人間が腕を失えば簡単には感覚を合わせられない。しかも、『ガイア』の基地の前身である軍の本部のエネルギーをどこから吸入したのだろうか……。細かい荒神の話ではエネルギー系統は最初に大破していたらしい。まだまだある、銃弾に対しこちらは無抵抗に等しい……。どのように彼らは生き抜いたねだろうか……。

「それは残った右腕で……」

零紫の顔が厳しくなっていく……。彼の心の中には絶対的な確信

のもと今、思世にそれを聞いていていこうような重い決心が有ったのだ。零紫の視線が更に強くなっていき遂に思世が折れた。彼の口からは恐ろしい事が放たれることとなる。零紫の覚悟などとうに超えるようなことだったのだ。荒神自身も彼の心の奥底に封印する忌むべき過去ともう一人の英雄の存在だった。

「わかった……。矛！盗み聞きするくらいならここで聞け！」

「親父……」

「いや、気にはしない。お前の定時報告の事も考えていなかったからな」

思世が後の棚からアルバムを取り出しクラス写真のような物を見せてくる。赤い革張りのその本は黄ばんでいて少し焦げていた。思世もこれを話すのには相当の覚悟を有するらしく一度目を瞑り深く考えるように俯く。零紫は開かれてから瞬時に荒神の物を見つけ、彼ら『ガイア』のメンバーは数十秒とかからずに見つけ出した。そのアルバムの一番後ろのページには『memory of GAE A』と筆記体の文字が書かれその下に『ガイアの前身』と記され創設者の名前が書かれていた。荒神、思世、絵藤、夢路、空雅、水無月、琴鈴……琴鈴？その名を見た瞬間に零紫も矛も顔を見合わせた。これまでの物語には現れない登場人物の出現に驚いていたのだ。

「琴鈴とは誰ですか？」

「荒神の当時、交際していた少女だ。あの事変で犠牲になり『ガイア』の保護の下、語られない歴史として葬られた少女……」

「何でなんだよ。別にそんなこと……今更……」

「まずいことなんだ……。いいか、これは絶対に他言無用だ。絶対に……荒神とこの琴鈴ことすず。美しいみれいは『創世主』の血統だったんだ」

零紫と矛の顔が一瞬で氷ついた。『創世主』……それは過去の世

の中でただ一つの一族。神をも超えようかという有り得ない事象をやつてのけた人類史上最初の超人だ。『鑑 章介』の血統……それは皆、銃処刑されたはずだった。しかし、思世はそれすらを覆すことを口にした。そして、そこからは事実と彼の見解を含んだ事柄で零紫の運命すら大きく変えてしまふ内容を含んでいたのだ。荒神や思世が何故それを隠していたのかはすぐに解る。『ガイア』……『空中要塞愛知』の大組織の創設者に反逆者が近い創世主だったなどと言うことは……絶対に口外できない。だが、思世にはそのことについて彼らの誰もが恐怖や畏怖の念など覚えなかつたらしい。そこは荒神と彼らの大戦以前の過去に遡る話だ。

「そして、零紫……。お前は荒神のクローンであり希望の子だった。もう一つ……お前の父、荒神は『創世主』を裏切つた『創世主』だったんだ。アイツは自らの父親の所業が許せず年幼いころからこの『空中要塞愛知』の軍に志願、所属し彼ら『創世主』を根絶やしにすることを考えていた」

「ということは……。俺は『荒神 修羅』で……『創世主』だと言いたいんですか？」

「それは違う」

零紫の言葉に思世が断言している。彼は生命工学のことはさっぱりだと前置きして説明をし始めた。零紫と荒神は違うと言うことは断言できると彼は言う。絶対的に……違うらしい。第一に体の違いで言えば零紫は髪が黒いが荒神は白い。そして、骨格が違いそうすると体格も変わっていた。クローンにも個人差はあるがコピーを作るなら荒神はそんなミスなどする男ではない。第二に精神的に言えばクローンと言えど性格はばらつきが出る。思世も言うが零紫と過ごして荒神とは違つと『ガイア』の皆が口を揃えた。最後に荒神は零紫を零紫という一人の人間として軍から拾い上げて、その時に思世に告げたという。『零紫が俺と違って良かった』……と。

「俺から言える違いは以上だ」

次々に思世から明かされる事実。零紫ではなく矛が思世に食いついた。矛も自分の出生を知らずに育っているため知りたいたいに違いはない。それについても思世は答えている。この頃の科学はDNAの改変などお手の物で上手く特徴を発現し易く組み替えることも容易にできたという。そのため、資金力のある人間であれば自分と全く同じクローンも作れたし少し改変がくわえられたクローンを子供として作ることすらしていた。彼らもその一人なのだ。『ガイア』の武官クラスのメンバーは誰一人として子供を残していない。それも関係していた。

「おい！ 親父！ なら俺は！」

「お前は俺と空雅のDNAを掛け合わせて荒神によって作られたクローンだった。ただし、お前の場合は少し特殊だな。静岡のお偉いさんが孤児院に居たお前さんを引き取って改造人間に仕立て上げるなんて事態が起きた……」

「主任……琴乃は？」

「琴乃は……琴鈴のクローンだ。あの女は……すうきな運命を代名詞にしたような死に方をしたんだよ。俺や絵藤はあの女を守れなかった。……そして、荒神はあの女の棺に地下の『コア』を使い彼女の遺体を隠した。だから、恐らく彼女と荒神はあの世で幸せに暮らしている。ここからは俺の想像だが……琴乃は最近変に色気づいてないか？」

零紫は首をかしげるも矛は頷いた。零紫がそちらに驚く……。零紫の手に思世が手渡したのは本来、荒神が絶対に表ざたにはならないと言って思世に保管を依頼した品の数々だった。これで零紫の辻褄が合ったようで零紫の顔は解決したようにまっすぐな目をしている。思世はそれでも話の続きをしてくれた。琴鈴という女性も

荒神も幼少時を苦難の連続で心は荒み同じ境遇の者どうして引き合っていたらしい。特に、琴鈴は差別を受けて虐めを受けていたらしいが荒神の出現でそれも変わったという。夢路や絵藤は荒神の幼なじみとは言うが所詮は小学生頃からの付き合いだと彼は告げた。その辺りでも色々な問題点が浮上したが零紫はそれには触れない。恐らくは荒神が非行に走っていたのはその琴鈴を守るためだったのかも知れなかった。

「俺達があの子……美麗を守れず荒神も無念の内を心の奥底に秘めた状態でいた。正に滑走路から逃げようとした時……最後の一瞬だった。俺は意識があつたが荒神はもう、目も開かないような状態だったよ。生きていられたのは『創世主』の血統で少しばかり回復する速さが人並み外れていたからか……いや、最後にあの子……美麗が力を移したのかもしれない」

鮮血が飛び散りその少女は崩れ落ちる……。それを水無月と夢路が離陸時に引き上げたが……。弾は心臓を打ち抜きほぼ即死状態だった。うわごとのように彼のその名を呼び続け彼女の手は荒神の無い左手を掴もうと震えながら……。そして、息絶えた……。血は滴り荒神の体にも少なからず染みていた。瞳孔が開いた彼女の目を閉じたのは彼女の幼なじみでもある水無月である。彼女は安らかに永久の旅に出たのだ。

『琴鈴！』

『琴鈴さん！』

『しゅ、修羅あ……修羅あ……どこなの？ 寒いよ……怖いよお』

『荒神……おい、』

『しゅ……ら……あ。しゅ、ら……』

他の空中要塞軍の援軍でなんとか難を乗り切った彼らではあるが……その援軍も自らの利権しか考えない。戦争とはそんなものだ。そんな中、絵藤や文官達は立ち上がる。彼らがいたからここは成り立つような物なのだ。

「そう、だから、そろそろだな。あの女と琴乃の年齢が被るのは」「でも、何で琴乃だけにその兆候が現れたんだ？」

「俺にも……天文学的にわずかな確立……それこそ、はるか彼方の銀河から来た流れ星がこの地球にたどり着くかのような確立で琴乃と零紫が出あったとしか言えない。俺はそう信じている。運命というのはな。確実な糸の集まりなんだよ。絶対に最初から丸く収まるように手繰られるんだ」

「そんなもんかな……」

「お前は……そう思わないか？ 荒神と琴鈴は婚約していた……だが、アイツの苦しみは計り知れなかったよ。それでもアイツは素晴らしい子供達に恵まれたんだ。そう……思わないか？」

零紫はそこで家に帰された。矛と思世がその続きを『ガイア』の執務室で話している。矛はその話については半信半疑というような心境だろう。自らにあまり関係がないのと出来すぎていることが彼にはあまり信じるに値しないらしい。静かな執務室で思世が腕を組んで矛の疑問を次々に消していった。思世の表情は沈痛で固いものだ。あまりにも顔が固いため矛すらそういった重い質問しかない。

「荒神主任は……零紫に何を託したんだろうな。琴乃と結ばれることか？」

「託してなどいない。アイツはアイツで零紫の生きる道を途中まで引いただけのこと」

「俺には……そうは思えない。だったら、何故俺たちは生み出されたんだ？」

「それに関してだけは俺もお前の意見に同意するよ。だがな、さつきも言ったが……荒神には荒神の意志がある。アイツはクローンを二体作っていた……。俺にはアイツが人の人生を束縛するなんて思えないな」

「確かに……あの人はそんな人だな。『修羅道にこの身ささげた生を持ち、我が剣の一欠けの傷も見当たらず……。赤き血の華咲かせ、己の死を決めるも己の刃なり……。』か。この詩もあの人のためにあるようなもんなんだな」

「そうだな。俺も何かを残しておこう。俺だって永遠に生きれる訳じゃないんだ」

「おいおい、縁起でもない。今すぐは死なないだろう……」

零紫が帰宅すると丁度、篠と君枝が帰宅するというタイミングだった。玄関で鉢合わせし零紫が道を空けると二人が出て行く。琴乃の顔立ちも幾分か落ち着いていて零紫も安心したような顔をする。黒い髪を撫でつけると琴乃が零紫に向って小さく出迎える言葉を放った。玄関は広いのだが琴乃はもじもじしながら隅っこの方で控えるように言葉を告げる。少し二人と話せて前進したらしく前が向けるようになっていた。髪をくるくる巻ながらはにかみながらチラチラ零紫の表情を見ている。

「お、お帰り……零紫」

「ただいま」

零紫が奥に入って行くと琴乃が背中に手を突いて体を寄せてくる。今度は琴乃が零紫の変化に気付いたのだ。零紫も荒神と琴乃との生活を通して薄かった感情の起伏が感じ取りやすくなり琴乃でも感じ取れるくらいになっていた。そのため零紫の表情の微妙な変化も感じ取れている。いや、他にも原因があるのかも知れない。零紫が複雑な顔をするが後ろを振り向かず背中に額を付けた琴乃に声をかけ

ている。

「琴乃は俺のことをどう思ってる？」

「え？」

「俺は自分のことがよくわからないんだ。父さんは俺を大切に育ててくれた。だけど、俺の存在は……」

「アタシは零紫は零紫だから……零紫のことが……大好き……」

琴乃がハツとしたように自分の言葉の意味に気づき……体が零紫の背中から離れた。琴乃の手が恐る恐る零紫の方に向けられ……。急に零紫が彼女の手を掴みいつかの返事だと言って言葉を告いだ。手首に細い指が絡み琴乃は呆然とそれを見ている。彼らの出会いの時は違う安定した感情……いや、いろいろな意味で違うが、落ちて着いたタツチの感覚だった。

「先にちゃんと言わせてもらおう。俺は……お前のが好きなんだろうな」

「……零紫？」

「俺は感情をプログラムされずに生体兵器として育てられ……父さんに拾われた。その七年後にお前に出会ったんだよ」

「……ねえ」

「一目惚れだった……俺から声かけただろ？」

二人の出会いはある日の朝、突然の邂逅から始まったのだ。その日、彼らはある意味で一線を越え『ガイア』に身を寄せ幾つかの死線を超えて今にいたる。彼らの出会いは数ヶ月前……それから大きな変化が出ているのだ。

「零紫？」

「どつかしたのか？」

「アタシも好き……」

お決まりの展開に発展しその動作に入る。零紫の右手に手を重ね唇を重ねようと……。

「じゅめ〜ん！ 忘れ物し……あ、ああ……ごめんなさい……ホン
ト……」

「どうした？ あ……良かったな。琴乃。グツジョブ」

嵐のような二人組に阻害されはしたものの……二人の思いは無事に通じた。全てが解決した訳ではないが……今はそれでもいいだろう。彼らは……まだ、先があるのだから。まだ、見守って行こう。

S I G M A

初めての試みとなるが改造人間の六人が集合し分隊を作らずに出撃し今回は全面戦争になる。いつものような迎撃戦ではなく、今回は敵からの宣戦布告を受けて緊急召集を受けた彼らが射出ハッチから飛び出し各々の力をフルに使って敵を撃破していくという。今回の前線指揮をするのは零紫だ。敵は海中都市……ポセイドンと呼ばれる海中の要塞都市でミサイルや海中からの重砲撃によって攻撃してきたのだ。都市名は『大阪』古代より大都市として栄えていた都市だが近況としてはあまり芳しいという情報は聞かない。零紫と矛が連立して先導しているこの小隊が今回の鍵となって行く。……のだが、ここは空中都市、海面下、特に深海の海底への進撃経験など皆無の彼らにどのように攻撃させようと言うのだろうか。

「これ、露出高くない？」

「仕方ないだろう。海中戦闘用に兄貴が計算してくれたんだ」

「我慢して、琴乃。紫神はノリノリだけど」

「仕方ない……な」

深海の戦闘経験はゼロでも水面下での戦闘経験者は少しばかりいる。そう、矛だ。彼は元々回遊都市の『静岡』所属の改造人間だった。しかし、海中戦闘は『ガイア』の改造人間では矛以外経験がない。射出ハッチから飛び出した六人は角が作った水中戦闘用のスーツを纏い海中に入って深く、より深く潜っていく。零紫と矛を先頭に2列目に紫神、皇太の兄妹が武器を構えて隊列に加わり最後尾に射撃系統の武器を扱う琴乃と篠がつき敵の本拠地を目指す。予想はしていたが『海中要塞大阪』に到達するその手前で海中の生物と戦闘になった。零紫が最初に感じ背負っていた剣を使い巨大な胸鰭と尾鰭を切り落として周りの皆と旋回し退避行動をとっている。先

ほどの巨大な魚を筆頭にして次々に違う形態の海中生物からの攻撃を受けた。細長い白くぬめりのある生物。絡む八本の足がめんどくさい者、やたら遊泳速度の速い魚や集団で襲ってくる小型の微視物……いや、微生物型の海中生物などなど。皆はそれらと用心深く戦闘を続ける。海中では少しの負傷すら命取りになると矛から助言を受けていたからだ。零紫は味方の負傷具合を逐一確認しながら剣を振るっている。

『みんな大丈夫か！』

『俺を気にするな！ 問題は後続だ！』

篠が微生物型の群生生物に集られている。海中では彼女の凍結能力を使えない。そのため甲に仕込んだ暗器と荒神に習った格闘術を使いなんとか回避しているくらいだった。そこに救援部隊として空雅空軍が舞い込み攪乱させながら前進する時間を稼いでいる。その時……。あまり状態として良くないことが起きた。今、彼らは大陸棚の上にあるそこまで深くないエリアの最低点エリアに到達しもう少しで『大阪』へ侵入できるところまで来ていたのだが……。

『うわっ！！』

『琴乃！』

『だ、大丈夫だから！』

『何言ってるんだ！ くそ、二人だと出力が……』

そこへ敵の水中機動兵が攻撃を仕掛けてきた。敵は流石にホームでの戦闘だけありこちらとは動きが全く違う。そこに最高の助っ人が現れ彼らにとって難を回避することに成功する。一機の最新式の海空式戦闘機から通信が入りある脱出方法に着手したのだ。他の四人は緊急脱出し同じように空中に水空戦闘機に引っ張り上げられ弾幕を避けた空路を通って『ガイア』本部に帰ってきている。海中に

残った二人が生きていられるのは零紫の機転と空雅の操縦技能が
み合った結果だが……。

『零紫！ 大丈夫か！！』

『琴乃が負傷しました！ 緊急離脱も出力が足りずに叶いません！』
『ワイヤーフックバーに手をかける！ アルマガムに衝突直前に俺
は退避する。後は何とかしろ！』

空雅の機体が零紫に近づきホバリングエンジンに切り替える。彼
は指で合図し琴乃を抱いた彼は指示を受けてワイヤーを引っ掛ける
用途で付いているバーに手をかけた。その後、衝突まで神経を研ぎ
澄まして琴乃を守るようにキツく抱きしめ……彼の金色のオーラを
前方に噴出させて衝突に備える。それに合わせるように似通っては
いるが少し色の濃い琴乃のエネルギー波も重なり海水を遮断してい
る軟機体金属と呼ばれ柔らかく液体に近い『アルマガム』に小さく
穴を開け海中要塞都市『大阪』に侵入した。一緒に少量の海水と共
に水面に落ちたため地面に落ちるよりはダメージが軽減されている。

「な、何とかか……大丈夫か？」

「う、うん……。ありがとう。守ってくれて……つつ！」

「毒は……無いようだな。なら、止血する肩を見せる。ほら」

『海中要塞大阪』内部。零紫と琴乃は空雅の助力により命の危機
は切り抜けた。しかし、敵地のと真ん中に二人きり……。絶望的な
のには変わらない。その頃、緊急離脱した四人のメンバーが思世と
話していた。海中要塞は確かに強固だ。それを打ち破るには海中の
戦闘に慣れなくてはならない上に戦力が違いすぎる。そして、何よ
りも彼らに痛手だったのは荒神兄妹が未帰還だったことだった。空
雅によれば零紫からの最後の通信で無事なことはわかっている。し
かし、先ほども述べたが二人は敵地のと真ん中にあるのだ。早急に

増援と彼らの救出を施行しなくてはならない。ただし、それを行うにも海中には血に狂った原生生物と海流、敵の兵団が構えている。奇襲に一度しくじっているため二度目は最初のようにうまくいかないだろう。普通奇襲をするような状況ではその突然の出現による敵の攪乱から成功率は低くないはずだ。その初回の攻撃に失敗……。それに関して矛はかなり凹んでいた。これまでに未帰還など出たことがなかったところに主戦力たる荒神兄妹が未帰還になった……。加え篠は海中では戦力にならない。これでは攻めるにも攻められず広域破碎兵器なども零紫達が内部に居る以上は使えないのだ。

「零紫と琴乃、他数名が未帰還か……」

「厳しいな……」

「矛さん。気をしつかり持ちましょう。俺たちが頑張らなければ二人の奪還は不可能なんですから」

『ガイア』の会議室で矛は頭を抱えている。そこに資料を持った思世が話しかけた。思世は細身の長身で日本人らしい黒髪に第一次緊張崩壊戦争末期に負傷した右目は眼帯、鼻が高い美形な顔立ちだが伴侶はおらず矛と二人暮らしだ。そんな彼は息子同然の彼に彼の全てを託すべく相応の教育をしていた。矛が落ち込めばその形に合わせた試練を与え、時には千尋の谷に突き落とすことまでする。今回の作戦は無謀極まりない物で成功は確かに薄かった。だが、それを推したのは彼と零紫。その責任は重い。

「俺と荒神はな。ある取り決めをした」

「親父、急になんだよ」

「いや、俺と空雅、荒神の三人の約束事だな。未帰還の時は必ずその者の安否を確認すること……」

思世の目には懐かしさを思わせる淡い光があった。荒神や空雅、

彼は先陣に立つ武官だ。そのことに関して思い出がたくさんある様子でかなり複雑な表情になっている。笑ったり、難しい表情になったり……兎に角複雑だ。矛は暗い顔をするような性格ではない。しかし、今回ばかりは連立するように戦って来た零紫が危機にある。そのため彼には少し重かったのだ。

「アイツはよく行方不明になるやつだった。荒神や空雅なんてやつはあっちに行ったりこっちに行ったり……兎に角大変だったよ」

その頃の零紫と琴乃もかなり複雑な状況に見舞われていた。そこまで多くはないが敵の兵団に取り囲まれていたのだ。しかし、敵の様子もおかしく零紫も最初から血気盛んとばかりには態度を出さず敵も明らかに威嚇だけという格好のよに見える。エネルギー収束サイベルをしまい敵の大將との話し合いになった。零紫の背中の大剣を敵は興味深そうに見ては居るが武器なだけあり……やはり近くには寄らい。各々の代表である零紫とまだ若々しい男性が話を始める。相手の男性は真っ赤なブラッドレッドの髪に肩幅が広く何より印象的なのは腰から下げられた二本の日本刀だ。

「敵軍の将よ。俺達は戦う意志はない。話し合おうではないか」

「……荒神 修羅がここに居ると聞いたが……どうやら人違いだな

私は^{あがた}亜瀉 康介だ。よろしく頼む」

「俺は荒神 修羅の息子、剣刃^{つるぎほ} 零紫^{れいし}です。こっちが妹の荒神 琴乃です。こちらこそよろしくお願ひします」

「は、はじめまして」

それから二人は亜瀉と名乗る武官に案内され地下通路を通り破壊されて滅茶苦茶になった地下の街に出た。そこにはたくさん傷ついた人々がいる。零紫はその代表らしい男性に引き合わされ話し始めた。男性はかなりの高齢に見えたがそれを感じさせないはっきり

した目と口調が印象的で握手をした時に零紫も最初はその力に驚いている。彼もまた荒神の名を口にしたが彼が違う人物で零紫という存在だと解るや違う言い方で遠回しに真意隠しながら伝えてきた。この都市も何か問題を抱えているのだ。このあたりは人間の住めるような場所ではない。しかし、ここに居る……何かがあるのか？
零紫も周りを見回し老人からの言葉をかみしめている。

「荒神殿かな？ はじめ……」

「おじい、彼は荒神さんの息子さんだよ。零紫君というんだ」

「はじめまして」

「ほう、……あの英雄ならこの大地を浄化してくれると思ったのだが……」

「あの、ここは何故こんなことに？ こんなことは内戦でもしない限りはないでしょう？」

琴乃の言葉に頷くように老人が答えた。それは付け上がりすぎた人間に罰として与えられた事象なのかもしれない。現状としては空中都市も例外ではなくこの地球は歪んだ時点で多くの異質な生物を生んだ。現存している古代の記録にある生物などは少ない。そして、異質な生物は海中要塞の周りに居た巨大な魚類や貝、他にも多数いる。空中要塞にはよく巨大な鳥が体当たりしてくるがバリアで弾かれるためあまり気にしていない。だが、移動できないこの海底の要塞都市は今や滅びに瀕しているらしいのだ。それに海中要塞と空中要塞の違いはその密閉性もあり海中要塞は簡単に害をなす生物を外に出すことが出来ない。そのため……内部でそういった物が繁殖してしまったのだ。

「待つてください……なら『大阪』はどうやって攻撃してるんですか？」

「それは私から説明しましょう」

それに関しては亜潟が答えた。この要塞は『愛知』などとは形態が異なり幾つかの軍事拠点ブロックに分けられる。今、彼らがいる場所は普通のエリアだ。しかし、南側と中央管理区には暴走した軍部が占拠し他の地域には軍が産み落とし対処しきれなくなった生物兵器がウヨウヨしているらしい。唯一無二の安全地帯に零紫と琴乃は居るのだ。零紫は亜潟と二人になり話している。琴乃もそれと同時に並行で傷の手当てをしていた。亜潟を含めた義軍の数は少ない。だから、特出した生物学の知識と戦闘力を併せ持つ荒神はこの土地の問題を解決するのに持って来いだつたのだ。零紫と亜潟は改造生物の侵入を防ぐブロックの防御壁に登り話している。亜潟はかなり沈痛な表情をしていた。大柄な彼だが何か他の所に何か異質なところがあり零紫ですらそこが読めないようだ。

「私達を……いや、罪もない一般人を助けて欲しい。私のような血にまみれた人間など捨て置いて構いません。後生です」

「……助けることに異存はありません。しかし、今の現実を知らなければ手のつけようがありませんが……」

「わかりました」

その話の後に琴乃が零紫に近づく。二人がお互いの想いを打ち明けて今の状態になってから数日とせずに『大阪』の暴走した軍部が『ガイア』に宣戦布告してきた。零紫と琴乃は落ち着く隙もなく戦地にいるのだ。今の『大阪』の状態について亜潟から再び詳しい説明があつたのだが……。酷いものだ。『愛知』と機関としてほぼ変わらないクオリティなのに完全に殆どのエリアが荒廃して緑色の苔や菌類が繁殖……生態系を崩した改造生物の兵器化でさらに人間を脅かしているように見える。もともとこの都市は小さな自治が点々とし、そこに簡易の軍、政府、裁判所などがあり議会制をしいて昔は安定はしていた。だが……、100弱あつた自治は今やこの一カ所だけ……。人口は既にここの数百人程度になりあとは大部分は

軍にいる人間。零紫と亜瀉は作戦を決行するために集まっている。武器を装備する彼らを心配そうに住民が見ていた。特に亜瀉は周りを老齢の人物に囲まれ苦言を呈されていたが……彼は既に決めたことだといいいそれを耳に入れようとしなない。

「零紫……」

「ん？」

「無理は……しないで、アタシたちはいつも……いつまでも一緒だから」

「ああ、わかつてる」

その頃のガイアは『大阪』からの遠距離攻撃が一時的にでも止んでいる時に作戦を練る。中心は思世だが、荒神のように後継者を作りたいため矛に実質的な案件を任せていた。そこに集まったのは作戦の中で機動部隊の中枢に位置する『鬼神部隊』、空を牛耳る空雅空軍上層部の大隊長、本部管制からの指示で前者達を援護する水無月班以下数名と夢路班以下数名、主戦力となる改造人間三人、他にも多数いるが彼らの大多数が纏まらない策に苛立ちを覚えている。

矛が纏められない訳ではなく今回の指揮陣頭に矛が立ち思世では無いため作戦の形態が違いすぎるのが大きく関係していた。これまで彼らが適応して来たのは思世の作戦で、それは緻密でかなり組み上がった物だ。しかし、矛の作戦は突飛でアイデアには事欠かないが臨機応変な現場指揮が求められる……。そんな穴があり現場指揮官ができていなければなかなか成り立たないのが難点となるようだ。

「だがなあ、流石に俺達もそれはキツイぞ。確かにヘキサスピアシールドは強力だ。それを大陸棚に在るとは言え海底の都市にぶつけるなんて無理がある」

「……」

「悪いけど俺も同意だよ。流石に無理さ。せめて水の抵抗を無くす

か固形化しない……」

その時、スクツと一本細い腕が伸びた。意外性抜群の状態で拳手したのは篠だ。篠が立ち上がって指揮台に立ち強引に矛からマイクを奪い説明を始める。思世は面白くなってきたようで顔の隅に微笑みを浮かべ目を閉じて話を聞いていた。その作戦は相手の攻撃を完全に遮断できるが失敗すればこちらも相当なリスクを伴う物だ。ここで思世が口を開く。思世の目が徐々に輝きそれなりに昔ほどではないが覇気を持ち出した。荒神が死んだからは彼は全く笑わない……笑っても変な作り笑いしかしなかったのだ。しかし、その彼が徐々に楽しそうに作戦に着手した。篠の申し出に賛成しそこからのプランを矛に確認を取りながら決定……。

「私がやります。私が範囲を決定し海水を凍らせる。阻止たら使える」

「そんなことができるのか？」
「皆さんはいつからそんなに弱気になったんですか？ 零紫はいつも任務の時に言っていた。『できる、できないじゃない。割り切つてやるしかないんだ』って」

ハツとして顔を上げそれに同意するように頷き水無月と夢路が立ち上がって二人の部下に指示を出し次々に作戦への移行準備に入っていく。他のメンバーが次々に動きつつことを勧めていた。その時、『ガイア』のイメージエンシーコールが鳴った。矛と思世が状況を確認し指針を決定して敵襲と気づいたのだ。そこからは特殊暗殺系機動部隊『鬼神部隊』が皆、動き新手の敵襲の対処に走る。最後に皇太が矛に向かって言葉を継ぎ開け放たれたドアをくぐって先に向かった紫神と共に敵の迎撃に向かう。会議室が閑散として皆があわただしく動いていく。『ガイア』いや『空中要塞愛知』の平和は再び崩されたのだ。

「矛さん。零紫さんなら無事なはずです。僕は僕らで任務をこなしましょう」

今回『ガイア』が敵の侵入を許したのは敵の侵入が新手の方法であったからだ。『大阪』の空中機動兵を航空機から直接投下したのだ。それらはバリアを貫通し次々に高層ビル群に降り立ったとみられている。データによれば『大阪』は海中にありながら空戦対策や地上戦闘、海中の機動力すら持った最強の軍隊を持っているようだ。それが本当に直接攻撃を仕掛けてきたなら目的は絞られている。要人の暗殺、もしくは無差別破壊。そのような事しかできないという事は敵もかなり焦っているという事がうかがえる。矛や指揮官級のメンバーは落ち着きを持ちその事に対処していた。広域破壊兵器が使用されないという事は何らかのトラブルが敵を襲っているのだ。こんなチャンスはない。今が転機のタイミングといえよう。

『01 敵部隊補足』

『05 敵部隊補足』

『07 敵部隊と接触、排除開始』

『03 待機中敵部隊補足』

『04 敵飛行機発見。破壊開始します』

『02……』

『鬼神部隊』は通称を『OGRE』と呼ばれ通信時のコードを『OGRE』のOの字をとり部隊は数字で表される。彼らの総員は荒神の死後、一気に志願者が増え訓練も良質化。その影響からより練強な兵士が増えていた。結果、敵は侵入したはいいが……既にほぼ補足されていた。それに輪をかけたように思世がライフルを構えてセンターホールビルに陣取り近づく連中を片っ端から撃ち殺している。『ガイア』のホームは空中の機動。それをいくら訓練を受けて

いたとは言えそれに関しての猛者には適うはずもない。『OGRE』の機動部隊の最後の部隊からの通信を合図に思世が全体に指示を出す。

『O13 敵部隊補足』

『イーグルアイ。これより狙撃を開始する。皆、注意せよ』

『了解』

『サア！』

『敵部隊排除』

『敵飛行機を破壊完了』

思世の通信中のコードは『イーグルアイ』という。その彼が指示を出し『鬼神部隊』が動き出した。逆手持ち用のエネルギー収束サイベルが各所で光り、次々に敵の部隊が落とされていく。通信が途絶したのに気づいた敵は目標を要人にさらに絞ったが……。次々と額を撃ち抜かれて死んでいく。思世が囮とも気づかない敵兵……。さらには改造人間の増員まで加わり敵兵は窮地どころか絶望に苛まれるはめになった。先に到着しイライラしていた彼女、紫神はその小柄な体格からは見受けられない程の剛腕と体の柔軟性、動体視力などの体の特徴がフルに使える。そのため今の六人の中では肉弾近接戦闘において彼女が最強だろう。ただし、彼女一人では深追いや任務の無視をよく起こすため一人では戦闘をさせない。後方から武器の簡易火器を構えた兄の皇太と組み、二人が合わさることで最強をほしいままにできる。皇太の指揮能力と洞察力、観察力は指揮官球の『ガイア』のメンバーを凌駕するのだ。その統率力で紫神に的確な指示をだして敵を潰して行く。

「やあああああ！」

「こ、子供！？」

「甘く見るなあ！…！」

「紫神！ 抑えなさい！ また、ビルを打った斬る気か？」

思世の周りには夜井兄妹が張り付いていた。これでは敵も攻撃は愚か近づくことすらかなわない。そんな敵部隊が大損害を被るなか零紫たちも作戦を決行した。出撃するのは義勇軍の全員。敵の拠点を撃破することが目的だ。序盤は好調な進行も隠密作戦の遂行中にトラブルに見まわれた。敵の軍が攻撃してきたのかと思いきやその敵の軍が植物系の改造生物に襲われ捕食されていたのだ。こちらの手勢はそれらの特徴を熟知しているため被害は出なかったが……。敵の軍は植物の玉が飛んできてその吹き出す溶解液に溶かされて吸収されたり丸飲みされている。道を迂回してそちらに向かつていくがついにこちらでも被害が出た。琴乃と後続に居た少年兵士が薦のような物に絡め捕られたのだ。

「うわあああああああ！！！！」

「な、何なのよ！ これ！」

その時、零紫と亜瀉がほぼ同時に空中に飛び上がった。亜瀉は黒鉛色の曲刀と赤い波紋が入った黒鋼の曲刀を構えて少年兵士の足に絡まった薦を断ち切って着地。少年兵は尻餅をついて逃げ出し味方の部隊の方に四つん這いで這っていった。次に零紫がエネルギー収束サーベルを取り出し琴乃の薦を切り裂き空中でキャッチして空中を飛び回る。エアシューズの出力を上げブラストモードに切り替えて逃げるが……。零紫の右腕が攻撃型の薦に絡まれた。その薦はとげが付いていて彼の腕の肉に刺さり絡めとると彼らを根に近い株の方に引きずり込もうとする。零紫は亜瀉の方に琴乃を投げちゃんと受け止められたのを見届ける。その後はその薦にわざと絡め取られたまま大剣を振るい薦の株らしい塊を真っ二つに切り裂いた。何故そのようにしたかと言えば耳に刺さったピアスを引きちぎるように彼の腕に深く突き刺さったとげを無理矢理に引き抜こうとすれば腕こ

ともぎ取られかねないからだ。彼が株に近づいて斬りつけたその瞬間に蔦や種の猛襲は止み彼も帰って来たようだ……。しかし、彼の左腕は……。

「もってかれちまった。結局な……」

「零紫君。気丈に張るのは止める……。死ぬぞ」

「父さんと同じ運命を辿るだけです。簡易でいいので義手はありますか？」

植物の食胞に肩からごっそり食いつかれ……肉が削がれて筋肉の一部と骨が見えている。その彼に琴乃が駆け寄って泣いているらしい。零紫は背中を優しく撫でながら落ち着かせ一度、基地に帰った。その時に左腕を義手で補い第二段の策を考えている。亜潟は心配そうに零紫と付き添い続けている琴乃を見ているようだ。今回は……少数精鋭で向かい、この都市を捨てる覚悟で敵陣を討ちに行くという……。その前に零紫は『ガイア』本部に向けて電信を送っていた。それは父に教わった重要な暗号だ。零紫自身もこれを使う事になるとは夢にも思わなかっただろう。しかし、いずれは使わなくてはならないのだ。そう、いずれは彼らも一つにならなくてはならない。

『シグマ……byo（ゼロ）』

零紫の電信をキャッチしたのは水無月だった。彼は瞬時に意味を理解し思世と矛にメッセージを転送している。次に送られてきた日時の電信を解読しそこから思世と矛の思案の結果、全員の任務の動きが決まったようだ。作戦実行日時を待つ間に篠と矛が話している。蒼い長髪に濃紺の瞳を持つ篠が弓道場の隅で座禅を組んでいたのだ。その隣に矛が現れて座り少しイライラしたように話しかける。赤いスポーツがりの髪を引っ掻き回しながら愚痴積もりを篠に打ち明けた。彼も人なのだそれくらいはあり得る。

「あゝ〜〜〜〜〜〜！！ 指揮官なんてやるもんじゃない！！」

「どうしたの？ あなたは上から見てればいいのに……」

「それが嫌なんだよ。俺の守りたい仲間達を遠巻きから戦わせるなんてできるかよ。俺はお前だつてそうなんだぞ」

「え……」

「俺は誰一人失いたくないんだ。幸いにして空雅空軍の未帰還者は重傷も居たものの皆、命は持って帰つて来たんだからな」

篠が俯き矛に打ち明けた。確かにそうだ。あのタイミングで一人……力を使つて重荷を背負うのだから緊張もする。気を落ち着かせるために座禅を組み座っていたのだ。矛と話しているうちに彼女も笑い始めていた。彼女が笑うのは珍しい。そんな時、矛が面白いことをきいた。矛は自分のことに関してとても鈍い性質の間ではあるが他の人間に関してはとても敏感なのだ。観察眼は思世からも受け継ぎ情報の集積はともうまいようだ。

「お前さ。零紫のこと好きだつたんだろ？」

「……え？」

「ま、見てれば解るさ。俺はそう思つてた。どうだ？」

「うん。確かに……そうだね。でも、琴乃が好きなのも零紫だったから。私は諦めた。私の気持ちより強い気持ちが見えたから……」

「そうか……」

「運命なんだよね。あの二人。時間を超えた愛か……羨ましい」

矛の顔が一瞬厳しくなり元々の顔に戻った……。それからも二人は話を続けて任務開始まで時間をかけて待っている。夜井兄妹や世の動きのおかげで敵の襲撃などは特に気にすることはなし……という程度で終わった。『ガイア』の本部内でも文、武官達が話している『sigma』それは彼らにとって懐かしいものだったのだ。

荒神が考えたこの暗号。メールで送れば彼らは皆、一カ所に集まる。そう、『総和』、『全員の力を結集しよう』という合図だ。彼が零紫に教えたように全員が懐かしそうに……しかし、少し重く心を集めた。

「懐かしいな『sigma』。サボリの合図か」

「うん。あの頃はそれだったけど『ガイア』になってからは『総戦力戦』だけ……」

『ガイア』誕生以前の思い出を噛み締めつつ、次に策を投じるまでの時間までを待つ。そして、作戦決行の時刻になり亜瀉、零紫、琴乃が動いた。エアシユーズをプラスチックモードに切り替えて三人が敵の本部に奇襲をかけたのだ。零紫の大剣が敵の要塞の壁を砕き中にはいる。基地内に侵入し片っ端から未完成の『コア』を制御している装置を破壊しに向かう。この改造生物はその『コア』によって制御されるからだ。それが停止すると細胞へのエネルギー供給がストップしすべてが腐敗して消え去るらしい。次々に敵兵を斬り捨てる二人の後ろを双拳銃を構えて敵のこぼれた者を撃ち抜いていた琴乃……。表情が暗く零紫から目を離さない。彼女はとても心配していた。零紫の肩からは緊急手術だったこともあり完全な接続がされていない義手が付いている。それから流血していたのだ。ドロドロと滴る血が床に垂れて跡ができていく。

「零紫君。君は後ろに下がったほうがいい。流血しているじゃないか」

「いえ……大丈……」

「大丈夫じゃないわよ。零紫……お願いだから……下がって」

琴乃に言われて零紫は折れた。隊列を変え琴乃が前に出て行く。基地の中心部に入り体を酷使しているらしい零紫は亜瀉の勧めで休

まさせられている。生物を管理しているコアを見つけ破壊しようとして刀を亜瀉が構えた。そこに初老の武器を構えた男性が現れる。それに対して亜瀉は刀を構えて相対す構えをとった。その男は二人の会話から考えて敵と考えるべきだろう。それから彼らの凄まじい打ち合いが始まり火花が散るところも間々見られた。二人とも刀を構えたまま一度後ろに飛び退き無言のままに再び斬りつけあう。長い間の斬り合いの末……。亜瀉が敗北した。日本刀できき手の肩を切り落とされた亜瀉はまだ息はあるがほぼ虫の息だ。刀が零紫の目の前に落ちそれを抜き取って構える。

「荒神 修羅？」

「俺は息子の零紫だ」

「ヤツに子がいたなど聞いたことがないが……」

「養子……だが。俺は彼から多くを学んだ」

零紫が日本刀を構えたタイミング……。ここで要塞が揺れた。海中のその部分の水分が凍結され体積が上昇したからだ。それを起している海面では篠の周りを三人の改造人間が守りを固める。水無月のバリアが水中の一定エリアを囲い凍結させる原因の篠の弓矢の放つエネルギー波を補正しつつ夢路の班と一緒に彼らの援護、補正を行う。彼らは零紫の意志通り『ガイア』で一丸となってことに当たっていたのだ。

「大丈夫か！ 篠！」

「な、なんとか……」

それが激しさを増す中で海底でも動きが始まった。生き残った住民を連れて脱出の準備をするのだ。脱出用の小型艦船をエンジンに点火した状態で待機させ三人が今『大阪』の本部にいる。亜瀉は戦闘不能だが……。零紫が刀を構えて対峙した。零紫の構えは居合いの

構えでそれを見た相手も同じような構えに移る。しかし……零紫の力では到底太刀打ちできない。たちまち窮地に追いつめられてしまった。彼はあくまで洋剣の使い手で日本刀のような曲刀の扱いには慣れていない。それでも琴乃を守りたかったのだ。彼はボロボロになるも、日本刀を構えてなお対峙する。

「流石に荒神 修羅の息子でも手負いでは他愛ないか……これで最期だ」

零紫が目を閉じて心の中で考えをまとめるように軽く域を吐いた。荒神に言われたことを思い出したのだ。それを心に留め自分には何ができるのかを考えている。そして、結論に至ると零紫がカツと両の目を見開いた。決心が強くなったその強い輝きに呼応するように彼の体にも大きく変化が生まれている。

「父さん……俺は、守りたい物を守るためなら……その道が修羅道とて、恐れはしないよ。貫けるなら……戦渦だっていい。俺は……守りたい者のために戦う」

零紫の構えた亜潟の黒刀が輝き……いや、違う。表情の変わった零紫からエネルギー波が溢れ出している。「ガイア」に保護される前に軍の未完成なデータによって不完全な覚醒を迎えた零紫はエネルギーの制御が下手くそだった。その彼から黄金に輝く波動や薄く立ち込める黄金色のオーラが放たれているのだ。衝撃で構えが崩れたためか仕切り直し、琴乃を下がらせ零紫が黒刀を構える。

「俺は……無駄に命を奪わない。生きたいと願うなら生かす。だが、俺の征く道を塞いだり奪おうとするのなら……俺は真っ向からぶつかり対峙するその道を……絶つ！」

太刀筋が定まり刀捌きが尋常ではない技量に変化して先程までの零紫の動きではないような動きになっていた。エネルギー波の制御が精密化し、より細密な体重移動や威力の加算が可能になり移動速度が異様に上つて腕力や脚力も増している。対峙した初老の男は防戦一方の一方的な展開を経て最終的にバツサリと上半身と下半身を斬り分けられた。そこで、彼らにとつて恐ろしいことが起きる。矛や他の高官達も予想だにしない出来事で驚いている状態だ。気温や水温、海底の火山活動の急な温度変化の影響から理屈から考えるとおかしな海流を生みだしたらしい。それらの要因から水圧などに対する要塞の強度や『アルマガム』の対応値を越してしまったのだ。そのため砕けた氷が『アルマガム』の海水遮断壁を突き破り建物の金属柱や壁を破壊して砕けた岩や金属片がそれらを次々に崩している。壁や塀が崩れる中、零紫は恐るべき力で脱出を図った。琴乃はそれに関してパニックに陥っているため全く機転は働きそうもない。亜瀉の息がまだある。彼も外に連れだそうと零紫が動き出した。

「わ、私はいい……君たちは生きるんだ。持ち帰るなら、私の刀を……」

「零紫！ 入り口が！ 入り口が塞がれちゃった！」

「俺にしっかりと捕まっつて居てくれ……行くぞ！！」

背中の中の肩甲骨の辺りが変形し翼龍のような翼が零紫の背中から現れた。琴乃をしっかりと抱きしめ亜瀉も義手でなんとか抱き上げた形で軍の基地の天井を破り黄金のオーラを放ちながら空へと飛び出した。そして、空中近くで四機の中型輸送機に鉢合わせしそこでさらなる攻撃を受けた。空雅空軍の中型輸送機、『碧燕』が氷の穴を降下して住民の救出をはかろうとしたらしい。それが巨大な鳶に一機絡め捕られそうになっているのだ。『碧燕』の尾翼と左翼の端に絡まるとそこに赤いオーラを身にまとった矛が垂直に落下してくる。その矛が『碧燕』の横を抜いて垂直落下し鳶の株を貫いて再び上昇

し『碧燕』に上昇を促した。零紫が矛に亜瀉を任せ次々に襲い来る生物を狩りながら……上昇を試みている。

「まずい！ 入口が閉まる！」

「矛！ 亜瀉さんを上に！ 『碧燕』輸送機隊は退避だ！ 俺が小型艦船を引っ張り上げる！ 早く行つてくれ！」

零紫が一気にエネルギー波を全開にし四機の『碧燕』のワイヤーを切断して上空に登らせていく。輸送機は戦闘機と違い速度の最高値は低い、そのため早めに脱出させなければパイロットの命にかかわるのだ。零紫が住民を格納している艦船を急激に加速しながら上空に抜ける。矛と亜瀉、『碧燕』四機は無事に安全空域まで抜けた。零紫がいまだ危険空域……、篠が凍結させ穴をあけた空洞で艦船引き上げに奮闘中の時……。

「アタシも手伝う！」

「ダメだ！！ おとなしくしてる！！！」

「嫌よ！ いつもそうじゃない！ アタシは置いてけぼりで何もできない……守られるだけなんて嫌なのよ！」

零紫の額にさらに変化が現れ一本の長い角が現れた。琴乃が零紫のように力を解放しようともがこうとするなか零紫の体に変化し遂にギリギリで危険空域を脱出する。ガラガラと腹に響くそこから『ガイア』の地下滑走路に滑り込み……。

「零紫！ 琴乃！」

「みんな！」

琴乃が出迎えてくれた君枝に抱きつくその暖かい輪の中に零紫の姿が見当たらない。艦船の横面にもたれて意識を失っていたのだ。

琴乃が思い出したように思世に零紫の様態を告げ何とか命を取り留めた。琴乃の介抱のおかげで零紫は快方に向かい……再び小休止を彼らが待っている。失った者や守りきれない者もあると学んだ零紫……。加え、新たな感情の芽生えを感じ取っていた。

RIGHT AND LEFT

少々の間となつてしまつたが小休止が再び訪れた。左手の補修と細胞を修復したため集中治療室に居たが零紫はそこから出てきて普通の生活に戻つた。……のだが……再び琴乃が心中穏やかではなく荒れている。原因は零紫だというのだ……。確かに零紫にも原因が無いわけでない。だが、全く悪びれないためか遂に琴乃の我慢ができなかつたようだ。それ以外にも『愛知』内ではもう一つ変化がある。零紫が『ガイア』の重官であることを公前に明かしたのだ。確かに義手や多数の目立つ怪我をこれ以上は隠しきれないのだろう。高校の征服ではなく『ガイア』の新しい征服を身につけている彼は右肩にも致命的な傷を受けていた。そのため荒神の残したレポートを基に構築した細胞構築理論を適用している。それで回復させ左腕は荒神の残した物を基体にして作り普通の肉体より神経伝達の感度が高く彼の体に入っている『コア』をリンクしているため普通より強度もたかめだ。

「零紫君。今日は琴乃さんと一緒ではないんだね。どうかしたのかい？」

「少し口喧嘩をしただけです。で、何ですか？」

亜潟 康介は肩を切り落とされてしまつたため……もう、以前のようには生活できず体を起こすことすら自分ではできないらしい。その彼が零紫を病院に呼び出して用向きを話しているのだ。彼は残っている腕で何とか壁に掛かつていた彼の太刀を指差した。黒刀と白刀は持ち主が持てないため抑える金具に押さえつけられている。零紫が刀に手をかけると亜潟が今の容体を伝えてきた。零紫の肩を心配そうに眺めるが……。彼も心配できるような容体ではない。彼は幾多の死線を越えて体に致命的な傷を受けた半機械……アンドロ

イドのような存在だ。その機械の機能がほぼ完全に停止し心臓の心音すら微弱になっていくらしい。荒神時代の特務兵はもうほとんど生き残ってはいないだろう。彼もそんな一人だった。

「私はもう長くはない。私の命はあと数日のうちに絶えるだろう。わかっている。死なせたくないなどとは言わないでくれ。私は死ぬことなど怖くない。怖いのは……私の意志が失われることだ」

亜潟が零紫に真剣な眼差しを送り刀を零紫が手に取って刃を打ち鳴らした。亜潟が頷き二本の刀を携えた零紫の背中に言葉を重ねる。亜潟の正体が明らかになったのは彼の遺書が見つかったからだ。彼は詳細としては……荒神 修羅の所属した部隊『鬼神部隊』の生き残りの一人だったのだ。その後、亜潟の葬儀を関係者のみの参列に抑えて『ガイア』本部で執り行い、彼は『愛知』の墓地に埋葬された。その人望を見せる参列者達は皆、涙しうなだれていたという。零紫の胸には重い物が重なった。だが、彼も前を向いて行こうとする時、決心を揺るがぬ物にしていたようだ。

「君は……お父さんとは違うな。彼が築いた道を君が進なら。君は『ガイア』の月になるんだ。健闘を祈る。私は……疲れたよ」

零紫と亜潟が誓いを交わしたその日から二日後、亜潟は長老に看取られ息を引き取った。亜潟の刀は彼の家の宝刀らしく僧侶だったらしい長老が式典を行い零紫に正式に託される。そして、その日。零紫が帰宅すると琴乃の様子がおかしかった。いつもはもっと明るいのだが……下を向き零紫が「ただいま」と声をかけても返事がない。夕飯が終わった頃に琴乃が荒神の部屋を改装した零紫の部屋に降りてくる。零紫がそれに気づき機械を組み立てる手を止めた。最近は何が動いていないのか彼女自身にも解らず時として精神が

不安定になるらしい。零紫もそれに気づいていない訳ではなかったが……。傷つけてしまつといけないためあえて触れなかったのだ。

「零紫は……どうして、アタシに優しいの？」

「それは……」

「最高のパートナー？ そんなこと言つて実はお荷物なんじゃない？」

「おい、琴乃」

「どうせ……アタシみたいにドジでバカで誰かに助けてもらわなくちゃ戦えないひ弱な女なんて……」

「琴乃……流石に……」

「篠みたいにさ、何でもできる女の子の方が良かったんじゃない……キヤツ！！」

零紫が珍しく怒鳴つて琴乃の頬を平手で打った。彼はそんなことをする性質ではないが……余程、血が頭に登つたと見える。目がいつもとは違い敵にも見せない怒りに満ちた目をしていた。零紫は多少の事ではそこまで血を上らせたり手をあげたりはしないのだが……。感情の変化と言うなら彼にも大きな変化が出始めているのだ。その変化は思世が零紫に問い詰められ荒神の過去について語つた時から顕著に表れている。何より、父親がそうするであろうことを意識的に遂行するようになっていたのだ。彼は荒神のなしえなかつた『コア』のシステムの解析を八割方終えていた。そして、壁にぶつかり今はそれを模索しているところだつたらしい。それだから、今は琴乃に構つてやれる暇がないと見える。彼自身は琴乃を思っているが行動と彼女の心情の変化に彼が追いついていないのだ。それに加えて最近はその周りで目まぐるしくことが動いた。荒神の死以降、動乱期の頭角が徐々に現れ始め亜瀉の死も重なり彼も余裕がないのかも知れない。流れ動く世の中を受けるために多忙となり次は心や精神的にも疲れがきているとも言える。

「バカな事を言うんじゃない！ 誰がお荷物だ！ お前が居なきゃ俺は死んでたんだぞ！ それにお前は俺の大切な……」

「だったら……」

「何だよ……」

「だったら何で頼ってくれないのよ！ 少しは頼ってくれたっていいじゃない！ それに……パートナーなら……アタシにもあなたを助けるくらいの事があってもいいじゃない！！ 零紫なんて知らない！」

零紫のラボを飛び出して玄関に駆け込みブーツ型のエアシューズに足を入れて琴乃が玄関を飛び出した。零紫は追おうともせずただ、琴乃を打った右手を見ている。伸びた黒髪を結っていた紐を解き部屋の奥にあるリクライニングチェアに深く腰をかけて目を閉じた。彼は思いつめるといつもそうしている。亜漉に託された通り父の残したレールに自分の道を重ねることをしている零紫。亜漉の刀を眺めつつ心底穏やかでない自分の心中をなんとか抑えようと努力している所なのだ。彼は『大阪』戦の日以来、体と心に歪な変化と義手以外の遺物間をうったえていた。特に戦闘時に感情が高ぶると……体表に鱗が現れたりするのだ。その研究も並行して行っているためさらに多忙を極めている。荒神の残した記述からは文章や経緯、状況的推察は可能だ。しかし、バイオテクノロジー的な観点から考えるとそれが可能なのを見つけないならならぬ。特に零紫は自分がそうであるため尚更不安だった。

「あれ？ 琴乃？」

「……」

「どうしたのよ」

「喧嘩した……零紫と」

「え……。早……、どうしたのよ。ああ～ああ……こんなにほっ

ぺ腫らしちゃって」

『ガイア』本部から遠く離れた市街地……この地域は昔は豊橋と呼ばれ多くの民家が存在した地域だ。現在も荒神の改修の影響は少なく民家が増えて学業都市としての発展が見込まれている。ただし、特殊な学部を専攻している君枝は未だに『ガイア』本部にほど近い中央高校に通っていた。実は荒神の改修後に学業施設などの公共施設はかなり多くなっているのだ。分割された区域に必ず一つ以上ある。その豊橋に新居を構えそこに住んでいる大原 君枝宅の部屋に上がり込み君枝の両親に事情を説明すると二人から滞在の許可が降りた。琴乃の姉の美琴は放任主義で自由主義者でもある。だから、家出しようが迷子になろうが人道から外れたり早死にするようなことをしなければ多少のことは黙認しているらしい。喧嘩をした張本人の零紫はもちろん角など……誰一人探しに出ないようだ。琴乃自身もそんな姉の行動を熟知しているためあえて動こうともせず君枝の家族にかくまわれている。次の日から琴乃は君枝の家から登校し荷物は『ガイア』の本部にある自分のブースに置いてあるためそこから取り出しつつ1日を過ごしていた。しかし、彼女の心は一向に晴れない……。確かに昨日の発言に関して言い過ぎたとは思って居るらしく零紫が学校にいる間に謝ろうと思っていたのだ。それなのだが、零紫はその日を無断欠席し角もはつきりした所在を知らなかった。ただ一人、彼を除いては……。零紫はよくそこに足を運ぶ。父の眠る場所に……。ただ一人だけ零紫の居場所を知る彼もまた同じだった。心を見返しているのだ。

「零紫、どうした？」

「いえ、少し心の整理をしていたんです」

「そうか……。考えるのはいいがあまり先を考えすぎると目先の難題で躓くぞ」

「わかってます」

琴乃は君枝宅で君枝に『大阪』でのことを話していた。半ば愚痴のようになりかなり感情的な話し方になっていたが君枝は落ち着いて菓子をつまみながら聞いている。しかし、琴乃の心はまだ晴れずさらに重くなるばかりだったようでだんだんと沈痛な表情になって行く。その顔を見た君枝がいきなり額を指で弾き同じ行為を琴乃に二回当てて彼女が額を押さえたのを見るやまだ少し腫れている右頬に人差し指を突き立てた。人差し指でぐりぐりしながら笑顔を作り琴乃に向って話しかけている。零紫と琴乃のことに關しては好意的な視線を送る君枝。ただし、彼女は琴乃が困っていたとしてもいつも助けない。彼女は苦難こそ人を育てる材料と言った理念を持つ人物だ。そのため彼女の苦難をわざわざ助けようなどと思わないらしい。

「で、どうしたの？」

「零紫はいつもアタシを助けてくれるじゃない？」

「確かにねえ」

「アタシ……ドジなの。だから、零紫の左腕や『大阪』での怪我は全部アタシのせい……。アタシはやっぱりお荷物なんだ……アテツ！」

「バーカ！ 琴乃がそんなだから零紫君は琴乃を守ろうとするのよ」

「お荷物……イタツ！」

「また、またよ。それが違うの！ 当事者には解らない物ね。じっくり考えなさい。私は……そんな暗い顔してるのなんて琴乃じゃないと思ってるから！」

ぼかんとした表情の琴乃をよそに零紫の所には篠が現れていた。玄關に上がるなりグレーパンチが零紫に向けられたが要件はだいたいわかっていたためあえて彼はよけなかったようだ。篠の拳は少しと

げとげしい堅さがある。その拳で殴られれば意外と痛いだろう。事実零紫の頬には真つ赤な跡ができている。篠の瞳にはとても強い怒りが見てとれた。零紫はいつものように感情表現の薄い澄ました顔で彼女の怒りを受け止めている。表情一つ変えない所を見るとそれなりの覚悟があるのだ。零紫の頭の回転はよすぎる程にいい。そのためだいたいの選択判断やその場の状況からのイメージなどは簡単にできる。しかし、コロコロ変わる人間の心情を読み取るのは大の苦手らしいのだ。

「何をした？」

「それは俺が具体的に何をしたか聞きたい事だぞ。……篠」

「お前は琴乃に何をした？」

「俺がか……いつの間にかカツとなって琴乃の頬を打っていた。何なんだろうな。俺にも解らない」

篠が胸倉をつかみ2発目を構えたが……零紫は抵抗をしない。篠は気がそれたのかすぐに腕を戻して別のことを彼に問い始めた。彼女も矛に気付かれるだけの感情表現を零紫に向けていたのだ。それくらいのことは有りうる。そして、彼女は今や『ガイア』に落ち着きはしたがそれまでの経歴や素性は完全に闇の中であり零紫もそこには触れないが未だに一抹の不安が存在していたのだ。ただし、幾度かの戦闘を経て仲間であるという意識はあるらしい。だから、篠には敵対視せずありのままの彼をみせていた。

「……零紫は、琴乃が好き？」

「ああ」

「そ、そう……。なら、いい。打つてごめん」

二日目になったが一向に零紫は学校に現れない。そんな彼に周りの生徒達は変な噂を立て始めた。零紫の腕の義手のことや伸ばした

髪の毛、『ガイア』の関係の話だろう。零紫が現れず段々と琴乃自身が凹み始めている。一時はカツとなり零紫に強い言葉を浴びせたが……心の奥底では零紫もそれが解っていると思えばえて無視を続けていたのだ。しかし、肝心の零紫は全く追ってこず姿さえ見せない。それが更に上乘せされた悲観的思想で心身にダメージを与え始めていたのだ。彼女は気丈にはりはするが内心弱く脆いタイプでもナイーブな感情の感受性を持っている。その彼女に今の状態は身を切るような痛みがあるのだろうか。

「零紫……今日も来なかった」

「そうだね。矛君なら……情報あるかな？」

「……」

徐々にやつれて行く琴乃……。次の日に矛から有力な情報を仕入れた時に零紫の単独任務について初めて知らされた。内容は要人のマークだ。相手は空中の傭兵団の総督らしい。ある程度ランクの高い頭が働く人物を考えると今の所は彼しか思い当たらず、矛が思世に促されて起用し零紫が単独で任務に当たっていたのだ。零紫のことがだんだんと心の底から不安になりはじめ、矛から任務中の零紫がおおよそ居るであろう場所を聞き出しそこに向かう。

「零紫君ってフリー？」

「俺は想い人は居るが今は……一方通行だ」

「へえ、なら。こういう事はまだ？」

タイミング悪く琴乃がそれを目撃してしまったようだ。スタイルの良い篠に似たクールビューティー系の女性が零紫に向けて腕を伸ばして肩に絡め、顔を近づける……。琴乃は怖くなり……。その場から逃げ出した。信じ続けてはいたが……。こんなに簡単に関係が崩れてしまうのだと琴乃は心に更に重荷が加わったようだ。その次の日、

琴乃のクラスに編入生が入って来た。零紫と一緒にいた篠に似た少女だ。その少女は悪戯に笑いかけ……。彼女の心をえぐるように話しかける。

「零紫君について話があるんだけど……」

琴乃はカツとなり椅子を後ろに飛ばして立ち上がり屋上に駆け上がる。すると、しつこく琴乃をつけて来る少女……。篠は割合落ち着いた性格なのだが……。この少女はそうではなく嫌な性格をしている。わざと琴乃が気にしていることをついでにきているからだ。琴乃はついにイラつきが頂点に達している。

「聞いたんだけど、兄妹で付き合ってるの？」

「まだ、……付き合ってるじゃない」

「へえ、なら。アタシがもらっていい？」

人を蔑むような笑いをし琴乃の周りをゆっくり歩くその少女。どうやら、彼女は最初から琴乃をからかうつもりでいたのだ。名前も明かさずにその少女はクスクス笑いながら昨日の話をした。彼女は琴乃がその一部を見ていたのを知っていたのだ。琴乃がそれに関して傷ついたことを知りながらさらに言葉で追い討ちをかける。

「零紫君って意外と堅いんだね。キスしたかったのにさ」

「何が言いたいの？」

「だって、零紫君のこと嫌いなんでしょ？　なのに可哀想……一途にあなたのこと考えて」

「どういう……」

「さうとう鈍いわね。彼はね……。あなたが思ってるほどバカじゃないの。独りで困惑しているのはあなただけよ」

「な……、うっ！」

その時、急に後ろから現れた篠によって口を塞がれた。何かの薬剤が染み込ませてあるハンカチらしい。琴乃が抵抗しなくなり意識を失うと二人は彼女を連れて居なくなった。それから数時間後に零紫が動き出す。琴乃は誘拐されたのだ。零紫は責任感などと言うよりは先に琴乃の安否の方を優先させていた。彼は私情よりも他人や他者を優先させ自らを犠牲にするタイプだ。その彼だから当然と言えば当然だろう。

「零紫……」

「先に行っています」

「お前、待て！！ 作戦の要が居なくちゃ……」

「作戦の要？ 二人で一人にしかねない俺がですか？ 俺は今

『ガイア』としては動いていません。俺は『剣刃 零紫』として動きます」

そこにイマーゼンシーコールが鳴り響き零紫は角から日本刀を受け取って『ガイア』から出て行く。その頃、琴乃はやっと気づいていた。捕縛されて空中に浮遊している球体のバリアの中に閉じ込められていたのだ。気づくとドンドン叩きながら「出せ」だの「ここはどこだ」などとわめき始めた彼女。その映像が『ガイア』の面々には届いている。外傷は未だにないが下手な攻撃は人質を取られている以上はできない。しかも、人質は荒神の忘れ形見のような琴乃なのだ。下手に手を出せない……。

「……畜生が」

「虫唾が走るな」

『何とでも言いなさいよ。引き替えには人物しか応じないわ。』剣刃 零紫』との交換しかね』

「……無理な相談だな」

『なら、いいの？ この子、とことんお馬鹿よ？ 下手に抵抗なん

てしたら……』

指を一度打ち鳴らし近くの操作をしている兵士がレバーを下げた。バリア内で電流が流れ琴乃が叫び声をあげたが終わった時に呟いている。『ガイア』の面々は怒りに満ちた表情をしていた。それもそうだ、これまでは普通に攻撃をしてこれたが今回は人質を取られた上に要求された零紫は独断で動いている。加えて何も今の彼らにはできないのだから……。

「零紫……は来させ……ないで……アタシは大丈夫だから……」

矛が背負っていた槍を構えて『ガイア』の会議室を飛び出した。次に夜井兄妹が……最後に篠が複雑な顔をして部屋を出る。思世は下手に策を講じるよりも彼らに任せた方が得策だと判断したらしい。『ガイア』の重鎮達とくに正直でまっすぐな性格の夢路はいきり立ちモニターを割ろうかという勢いをしそれを止めている水無月と絵藤も目には並々ならない怒りを燃やしていた。その頃の琴乃は……。

「零紫君、来ないわねえ」

「来るわけないでしょ。命令無視してまでアタシを助けるなんてバカなことしないわよ」

「そうね。あなたみたいに純真でお馬鹿に加えてドジな女をアタシは知ってるわ」

いきなり変な笑顔を作り琴乃に話しかけた。零紫は先に出たが彼なりの手を尽くしているらしくまだ現れない。どこに居るのだろうか。その時、敵の軍艦が次々に放火を空中に向けて放ち始めた。矛が怒りに任せて体当たりし船底や横面、管制室のような部屋に槍と共に突っ込んで破壊していく。そこに紫神と皇太も加わり篠と零紫以外が全員揃って攻撃を開始する。だが、敵も数が多くなかなか彼

らを進行させてくれない上に今回は厄介だ。旗艦同士のコンビネーションがとてもよく砲火が止むタイミングが掴めないらしい。

「あなた……鈴琴 美麗はアタシから荒神 修羅を奪った……。だから、最初からあなたは生かす気なんて無かったわよ。彼をおびき寄せる餌になつてくれたなら、それで用済み……」

「ほ、報告します！」

「今、アタシはコイツと話してんだろうが！」

報告をしに現れた兵士が一瞬で凍結しその氷が砕かれた。冷淡な調子でその少女は話を続ける。どうやら話が見えていない琴乃は必死に考えているらしい。しかも、自分の名前を違う似たような名前で呼ばれたのだ。気になるのが当たり前だろう。それに、彼女の心の奥底では恐怖と怒りを同時に放つ複雑な感情が湧き上がりながら、零紫が来てくれるという断ち切ったはずの期待すら出てきていたのだ。心は張り裂けそうな悲観と死を覚悟しながら零紫への捨てきれない愛。そして、少女に向けられた強い怒りと恐怖……琴乃はその複数の感情に悩まされている。

「零紫君は荒神 修羅のコピーよ。私は『創世主』の一族の末裔。氷土妃……。あなた、太陽妃とは相容れない立場の女。荒神 修羅は家も位も高いアタシを選ばずあるうことが裏切り者のあの女を選んだ。そうよ。それは零紫君も変わらなかった。だから、全てを終わらせるわ……。肉体を失ってまで愛した男と憎き女を別々に葬つて……復讐する。あなたは……『創世主』のクローンなのよ」

琴乃のバリアが急に解かれ尻餅をついた琴乃に手を凍らせて鋭利な刃にした氷土妃が首もとにそれを添えた。琴乃が目を閉じて覚悟するように生唾を飲んだ瞬間に……腰に刀を提げた兵士が現れ詩を歌い出す。声には二人とも聞き覚えがありその男が氷土妃に向けて

黒刀を振り抜き最後の言葉を述べる。帽子を深く被って戦闘服を身に纏った細身な剣士はブーツで床を突く音を立てながら詩を読み終える。黒刀は氷土妃には当たらなかつたが……。それなりの効果を見せてくれた。

「最後の鬼の修羅の道。黒白の刃を携えて御、護る身を護らんと月となりしこの身かな。今、我が身を省みず。愛しき者を護らんと……」

帽子を投げ捨て黒刀を抜いて琴乃の周りを固めていた兵士と氷土妃に斬りつけ琴乃を抱き上げて回避しながら監視カメラを破壊しつつ逃げていく。その正体は零紫だ。零紫が回避の途中にかくしていた髪の毛を襟から出して腰に刀を納めた。それから、格納庫かラボのような部屋に入り二人で話を始めている。零紫の右手が一回り小さい身長で琴乃の頭に乗る、撫でた後にキツく抱きしめた。零紫も荒神に人として育てられたのだ。そのため、かなり豊かな情緒を最近強く見せるようになり始めたように感じられる。

「れ、零紫……いつから……」

「この船の後から乗り込む敵の輸送艇に乗り込んでこの船につきつき乗り込んだんだ。琴乃が連れ込まれた頃から行動を始めていたよ」

「れ、零紫……あのっ……キャツ……」

「無事で……良かった」

零紫に琴乃から質問が入った。それもそつだ。理解できていないとしたとしても知らない当事者に言えば驚く内容だからだ。零紫の細胞の宿主は荒神、琴乃は名前も初めて聞いたような女性……驚くに決まっている。零紫はその話が出た瞬間に表情を曇らせたがすぐに真剣な表情に戻し麗美な顔立ちの零紫の顔が久しぶりに微笑んだ。

零紫はその話をあまり苦にはしていないようらしい。むしろ彼からすればこれは転機になる話だったようだ。

「アタシ……零紫とアタシはクローンだって……」

「そうだな。だが、亜瀉さんも言っていた。俺は『荒神 修羅』ではなく『剣刃 零紫』だ。それと同様に、お前も『琴鈴 美麗』とは全く別なんだよ」

「で、でも、……」

琴乃の言葉が触れる前に零紫の唇が琴乃のそれに触れた。琴乃はいきなりこのことで零紫を突き飛ばそうと腕を胸に突いたが腕力では琴乃がどのように足掻いても零紫には勝てない。しっかりと抱きしめられた状態でそれを終えると零紫は琴乃を離して壁に手をつく。その後、弱く一言呟くと日本刀を抜いた。彼が何か気づいたらしく琴乃はいつものように……とつさに頭を重ねて伏せている。

「無事で……本当に良かった……」

目にも止まらぬ速さで零紫が機械の機動型の兵隊と戦い始めた。亜瀉の黒刀には彼の金色のエネルギー波が馴染みやすくそれを利用して耐火水性の装甲を軽々と切り分ける。そのロボットの内蹴り飛ばされた物が部屋の照明のスイッチを押してしまい部屋の明かりがついた。ここは……クローン培養のラボだ。しかも、培養されていたのは……篠と酷似した個体だった。下手をすれば数百はあるような個体のポッドを零紫が憎らしげな表情をし片っ端に破壊し始める。彼には前々からわかっていた。篠はこの戦艦の主、氷土妃の部下で『ガイア』に改造人間識別番号『零』の素性を探るスパイだったのだ。しかし、彼はそれを責めるつもりはなかったらしい。彼もそうだが、途中から作られた個体には……経験がなく教えられたことが全てだ。そのため、強要されたに近い。それを理解しているか

らこそ彼は篠の暗い過去を打ち砕くためにそれらを破壊し始めたのだ。

「し、篠が……」

「これ以上……俺たちの仲間を苦しめるな！」

部屋にあったポッドが全て破壊され中身は全て不完全体として処理がなされていたらしく空気に触れると急速に腐食して骨すら残らなかった。残ったのは無残に砕けたガラス片と金属製のパーツ、培養液……それだけだ。零紫が体を振るわせながら扉に向かって刀から波動を飛ばして再び戦い始めた。どうやら照明器具の電源履歴を調べられ場所を突き止められたらしい。零紫も必死で自分の体の変化を抑えていた。琴乃が近くに居る以上はあまり暴走じみた力を簡単には解放できないと判断したらしい。

「後ろに下がってる！」

零紫が敵兵に向けて刀を振り抜き接近しすぎた兵士は次々に命を落としていく。ただし、敵兵はそれなりに名をあげた傭兵集団のため零紫もこれまでのように上手く敵を撃破できていない。軍の正規兵は堅い訓練のもと組み合わされた型をたたき込まれる。しかし、傭兵は自らの技を鍛え上げた天然の戦闘素材だ。それをわかって氷土妃も傭兵ばかりを集めたのだろう。ヒットアンドウェイの戦法を駆使し接近戦に適應した傭兵と中、遠距離の兵士が組み合わせる。次々に銃弾を打ち込んでくる。隙間無い攻撃が雑戦の基本だ。ルールのない戦闘はどれだけ敵を追い詰められるかが焦点になると言うことである。

「さっすがにこの数が相手だと大変そうだな」

「確かにな。お前らのようなやつが沢山いれば面倒だがこれくらい

の実力を見せた程度で喚くな」

琴乃に向けられた弾丸をかばい零紫の腕や背中に弾が数発当たった。しかし、背に腹は代えられないらしい零紫の体に傷はつかず金属と金属が当たるような音が聞こえる。その零紫の額から一角のような角が現れ頬に鱗が現れた。零紫が琴乃の方向から敵に向き直り刀を鞘に納めると爪を変化させている。初期に琴乃にも見せた爪に金色の固化したエネルギーを収束する武器は彼自身の体だったらしい。傭兵の内の数名は踵を返したように恐怖の色を浮かべて逃げていく。それにすら恐怖を感じない傭兵達は……。

「俺の目の前に現れ、壁をもたらず者は……皆、消す……」

次々に犠牲者は増え続ける。零紫の黒い瞳の瞳孔が異様に光を強めつつ広がっていた。爪の攻撃を続けながら琴乃の様子を伺うことを繰り返し戦う零紫。敵を粗方片付けた彼は退避する場所を変えるため琴乃を抱きかかえて中心に空いている穴にダイブした。その下には動力炉があり零紫はその横に着地している。零紫が琴乃を立てると琴乃が近づこうとしてくるのを拒んだ。

「零紫……」

「俺は……お前には傷ついてほしくない。俺のせいで傷つけるのは……もつと心苦しい」

「そ、そんな……」

「俺が怪我をするのは別に悪くない。俺はお前さえ怪我なく生きてくれれば……命だって惜しくない」

「アタシは……嫌だよ。零紫がアタシのせいで傷つくなんて……耐えられない。アタシだって……零紫の役に立ちたい。アタシ達は……」

そこに巨大な氷柱コウが落ちてきた。その瞬間に零紫が上から降りてきたオーラに覆われた少女と戦い始める。氷のオーラは篠と同じだが……異質に張ったオーラは篠の落ち着いた物と違い君が悪い。零紫が琴乃に下がるように告げてから……彼自身の限界に挑戦しようとしていた。

「もう一度だけ下がってくれ。コイツはヤバいぞ」

零紫にはその力についての知識があつた。第一次緊張崩壊戦争には幾つかの変期があり緊張崩壊期を迎えるまでかなりの時間がかかっている。その期間に緊張が崩壊する要因があつたのだ。それは『創世主』一族内での蜂起だった。一言に『創世主』とは言えどそれは確立された階級で区分されピンキリが激しい物だ。荒神はその蜂起の時に先陣を切つて『創世主』の権威と象徴を守ろうとする独裁主義者と戦い父親だと記されていたリベイヤ・オールドロスという人物を殺害。そして、琴鈴 美麗などの迫害を受けていた末端の血族を匿い逃亡し彼らは荒神の助けにより各地に散り散りに離散した。その時、彼を愛するが故の狂気に触れ……彼自身によって殺されたのが……、氷土妃だったらしい。本名、ブリザーデ・クイーナス。彼女のように肉体を失つた『創世主』は記憶媒体にその身の記録を移し今、復活しつつあるのだ。荒神の記した情報ではそうになっている。零紫も全てを鵜呑みにはしないがここまで状況が揃つてしまうと信じざるをえない。

「二度目の失恋……。その女さえいなければ……。アタシは『アシユレイ』の妻になれたのに……。アタシはあの女とつながる全てを許さない。全てを終わらせてやる！」

『創世主』一族の力、端的には無から有の生成と物質転移、生命の作成、融合などの他にも彼らは魂と器を自由に変更できるという

恐ろしい力を持っていた。荒神 修羅……前名『アシユレイ・オルドロス』が記述に残した所によればその魂、現代では精神と呼ぶが彼ら『創世主』一族のそれを打ち破るには肉体と分離したそれを『創世主』が打ち砕かなければならぬらしい。そして、『創世主』にはもう一つだけ恐ろしい力が備わっていたのだ。いや、備わっている訳ではない思惑により『植え付けられた』が正しいだろう。

「俺にも父さんから受け継がれた。今、古代の生物の血を今復活させてやる！」

先程も述べたが『創世主』一族の特徴には生命の融合がある。それは『1+1=2』と言った具合には行かず『1』が何十倍に膨れ上がるという累乗計算以上に増幅率の高い空想論に近い。特に……残酷なのは……荒神 修羅には古代の生物の力が備わっているのだ。彼らはその子供達の意志に関わりなく異物を体に注入し体変化の能力を植え付けたと記されている。よって、荒神に植え付けられた力は零紫にも受け継がれたているのだ。零紫の体表の鱗と筋力、それは恐竜の物だという。彼女にも何らかの力が植え付けられているようだ。そして、その氷土妃はそれに容赦ない攻撃を加えてきた。零紫の力と氷土妃の力では能力が違いすぎて零紫が圧倒的に不利である。勝てる見込みなどないのだ。しかし、零紫は琴乃を守りたかった。そのために身を投げ打つ覚悟で氷土妃を討ちにかかったのだ。

「零紫……アタシが戦う。何でだろう……。力が湧いてくる」

零紫を押しよけるように前へ出た琴乃の右目が金色に光を上げてオーラが辺りを包み始めた。零紫が後ろに飛び退いた瞬間に氷土妃が吹き飛ばされ琴乃が前進し次々に波動を打ち込んで行く。今まで琴乃は力を自分の意志で解放できず零紫に頼ってきていた側面は確かにある。その力が一度爆発すると今度は何も……、誰も追うこと

「またよ！！　あなたは何であの女だけえ！！　アタシに振り向いてよお！！！！」

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！　零紫には……手だしさせないんだからあ！！！」

琴乃が肩を強く振り抜こうとすると突起が突き刺さっている腕を始めた部分で彼女自身が引きちぎり鮮血が飛沫を上げる。それと同時に氷土妃は顔面に拳の痕ができて吹き飛んだ。零紫が琴乃に駆け寄ると琴乃が離れるように告げてきた。その瞬間に無いはずの腕の造形を光がなして……腕が復活したのだ。しかし、その腕には入れ墨のような痕があり彼女が零紫の刀を手に取り……。この段階で零紫は琴乃が覚醒したことに気づいた。今、彼女が使用したのは有を無から生成する力だ。それが行われた時点で彼女は創世主として覚醒したということになる。

「伝わってくるよ。うん……零紫が月なら……アタシが太陽になる。亜瀉さんもそれを望んでるから……」

刀からは金色のラインが現れ琴乃が詩を念じ始める。金色のオーラが次々に刀へ集まり氷土妃に言葉を告げ、亜瀉の白刀を構えた。零紫は琴乃を守るため後方から現れた敵兵を片付け始めている。次々にことは急速な展開を迎えていた。零紫の黒刀が振るわれる中で氷土妃と琴乃の決着がついていたのだ。零紫の目の前で力を使い果たしたらしい琴乃は崩れ落ち……指揮官を失って浮き足立った敵に『ガイア』が総出で動き出した。

「我、馳せ参じ器たる肉体より解き放たれし魂を打ち砕かん……。愛しきを守り我が愛人を護るため……。我が魂を差し出しことの週末を迎えよ」

動力炉が傷つき爆発が始まった旗艦から、零紫が琴乃を抱きかかえて壁を切り分けて空中にエアシユーズを付けずに身を投げた。エンジンは琴乃が巨大な波動を撃ちはなつた瞬間に破碎し、外では赤い波動が周りの小型の旗艦軍を撃墜し始めている。その他にも琴乃の波動を合図に『ガイア』本部からの重砲撃が行われていた。次々に爆焔に包まれる旗艦は数分と保たずに赤い焔を上げて落下していく。

「終わった……」

戸惑っていた篠が空中に身を踊らせて前進しある程度狙いを付けられる場所で弓にエネルギーを集中させた。次に皇太と紫神も各々の武器を構えて次々に軍艦を撃墜している。その途中で改造人間のメンバーと『ガイア』高官の皆が驚くべき物を見た。零紫の姿が空中で変化し背中から大きく無骨な翼が生えて額からは角が現れている。篠が再び咳き凝縮したエネルギーを……そこで放ち零紫達が当たらない場所に離れた所で彼らがいた戦艦にぶつけて爆沈させ完全に消失させる。零紫が一度集まっている改造人間の皆の前に現れ『ガイア』の地下滑走路のハッチが開いたのを確認してそこから中に皆で入って行く。

「篠」

「わかってる。……私には居られない」

「いや、終わったんだ。お前の蟠りは琴乃が終わらせてくれたよ。礼なら起きたら琴乃に言ってくれ。苦しかったんだな……」

「ま、俺も気づいてたよ。これからも頼むぞ。篠」

零紫の体が元に戻り琴乃を病院に運び込んでから新たな行動に移る。彼も今回のことでのいろいろなことを学んだ。琴乃が目覚ましたのは事変から2日後。入れ墨のある右手を気にしながらだが、…

…零紫と気持ちを確かめあつた彼女としては充実した事変だったらしい。『ガイア』に残留が決まった篠も今や普通の生活を手に入れた。

「これは？」

「俺の仲間の墓だ。コイツ等に教えてやらないとな」

「何を？」

「こつという事さ」

零紫が琴乃を抱きしめてキスをする。零紫と琴乃の二度目のトラブルが解決してからは皆が円満に時を過ごしていた。また、それから数日後に再び『ガイア』の重鎮が息を引き取った。思世の急死に『空中要塞愛知』を揺らし……大きな戦闘を再び舞い込んだのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4935m/>

ジェネシス・アーク

2011年10月6日20時47分発行